「木遣り」研究報告書

２０１７年度

信州大学人文学部 芸術コミュニケーション分野

音楽系　濱崎ゼミ

まえがき

濱崎友絵

御柱祭の「木遣り」をテーマにゼミを展開しようと決めたのは、松本平を吹き抜ける風が春めいてくる 2017 年 3 月のことでした。かねてより信州、松本の地で受け継がれている音楽を学生と一緒に調査してみたいと思っていたこともあり、松本市内で御柱祭が開催される 2017 年を機に、「音楽的観点からみた木遣り」をゼミのテーマに据えることにしました。この機会を逃すと、次に調査できるのは六年後です。とはいえ、学生も私も御柱祭については多少、見聞きしてはいたものの、肝心の木遣りについては、文献から得られる知識も断片的なもので、まさに五里霧中の状態でした。

そこで 2017 年の前期は、「御柱ゼミ」と名を冠し、自主ゼミという形で学生たちと一緒に松本市内の御柱祭に参加することから活動をスタートさせました。正規の授業ではない「勉強会」として開始したゼミでしたが、本ゼミ生の多くが積極的に参加してくれたことは、心強くうれしいことでした。後期は授業の一環として展開しながら、諏訪や松本市内神社を巡り、各神社の木遣り師の方々にお話をうかがいながら、木遣りの、まさに御柱に刻まれる年輪のような多様性と奥深さを我々は知っていくことになりました。

本報告書はこうした経緯を経て、学生たちが、彼ら／彼女たちの視点で木遣りの「今」をまとめたものです。編集にあたっては各班から提出された原稿をもとに、検討チーム（田中［ゼミ長］、宮田［副ゼミ長］、丸山［記録統括］、沢木、濱崎）がチェックをおこない、とくに採譜やその分析については、あえて統一せず、各班の創意工夫にまかせるスタイルをとりました。

報告書は大きく二部構成をとっています。

第一部は、序に続いて、御柱祭の「本家」である諏訪大社上社と下社の報告となります。第二部は、本ゼミにご参加くださった沢木幹栄先生（社会言語学）のご寄稿を挟み、松本地域を中心に御柱祭をおこなう各神社（小野・矢彦神社、沙田神社、橋倉諏訪社、宮原神社、須々岐水神社、千鹿頭神社）の報告となっています。最後に、全体を通した考察と総括となります。付録として、木遣り師の方々のお話を書き起こした記録、さらに各社の木遣り師の方々のご協力とご許可を得て収録した音源（CD）も巻末に収めました。これらも本報告書の大きな特徴となっています。

木遣りは世代を超えて伝えられてゆく、いわば「音」と「思い」が編み込まれた声の彩文です。長い時間をかけ、人々が唄い継いできた身体と記憶の連鎖でもあります。こうした伝統に敬意を払いながらどうやって無形の世界を文字や楽譜に書き起こせばよいのか。文字化すること、記録することにどのような意味があるのか―。正解がないこうした問いに、学生ひとりひとりが自分なりに向き合い、個々人の体験を重んじながらも、次の展開に活かせるよう、できるだけ学術的な観点からまとめようとしたのが本報告書です。

まだまだ至らない点が多々あるかと思いますが、木遣りに「音楽」という切り口から向き合ってきた学生たちの挑戦の軌跡です。多くの方々のご助言、ご鞭撻をいただければ幸いです。

目次

まえがき

目次

序

御柱祭における木遣りについて 1

報告書の目的・検討方法 3

地図解説 5

第一部

諏訪大社 上社 7

諏訪大社 下社 20

第二部

記録と人口から見る神社と御柱 35

小野・矢彦神社 41

沙田神社 69

橋倉諏訪社 89

宮原神社 97

須々岐水神社 106

千鹿頭神社 119

総括 133

参考文献一覧 139

謝辞 142

あとがき 144

付録 1 沙田神社 木遣り師の方の話 147

付録 2 千鹿頭神社 木遣り師の方の話 151

本ゼミ活動についての新聞記事 167

CD トラック番号 168

御柱祭における木遣りについて

宮田紀英

御柱祭はその正式な名称を式年造営御柱大祭(しきねんぞうえいみはしらたいさい)(諏訪大社)、あるいは式年御柱祭などといい、諏訪大社をはじめ長野県内の複数の神社で行われている遷宮祭である。遷宮祭の典型は伊勢神宮のように各社殿を周期的に新しく建て替えるもので、伊勢神宮の周期は 20 年に一度である。いっぽう、御柱祭を行う神社の遷宮祭では社殿自体は建て替えずに社殿の四隅の御柱を建て替えることになっている。これには諸説あり、一つには短期間で社殿を建て替えるのが経済的、人手的に難しいからといわれることがある。また、『古事記』の国譲りの話の中で、建御雷神(たけみかづちのみこと)との争いに破れ出雲から諏訪盆地に逃げ込んだ建御名方神（たけみなかたのみこと）(諏訪大社上社の主祭神)が諏訪から出ることはしないと約束する場面があるが、ここより、社殿を囲むように建てられる御柱が結界の意味を持つのではないかという説もある。いずれにせよ、御柱祭がいつからどの神社でどのような経緯で始まった祭事なのかははっきりしない。

現在の御柱祭は、各神社によって多少の差異があるものの、概ね「見立て」、「斧入れ」、「山出し」、「里曳き（さとびき）」、「建御柱（たておんばしら）」といった手順で全行程一年ほどかけて行われる。すなわち、簡潔には、御柱となる木を定めて伐採し、山から里へ曳いてきて境内に建立するといった大掛かりの祭事を、複数回の行程にわけて行っているのである。木落し坂を下る映像など一般的によく目にするのはそのうちの「山出し」以降で、御柱を曳行している場面である。

さて、御柱祭の話から一旦離れてここで『日本民族大辞典 上』を紐解いてみよう。この辞典の「木遣り(きやり)」の項を参照すると、冒頭部に「伐り倒した木材を鳶口(とびぐち)などの道具を用い人々の力を合わせて運材・集材する作業」[1]と述べられている。運材・集材の作業は今でこそその大部分を電気や化石燃料から取り出したエネルギーに依存しながら少人数で行えるようになったが、近代以前までは基本的には人間の力で行わなければならなかった(ただし馬や河川などを利用することもあった)。ここで最も重要とされるのは、曳行に携わる者が一挙に力を掛けることで力を無駄なく用いて木を引っ張ることである。木はセルロースなどの多糖類からなる細胞壁(やその死骸)を主成分とした頑丈か

1 福田アジオ,新谷尚紀,湯川洋司,神田より子,中込睦子,渡邊欣雄『日本民俗大辞典 上』吉川弘文館 (1999)

つきめ細やかな構造からなっており、その上、伐採直後は木自体の重さよりも重いといわれるほど多量の水分を含んでいる。個人個人がバラバラに力を掛けていたのでは、このような木を動かすのは到底困難な話である。「木遣り」はそれを克服するために生まれたとされる。一団の頭が掛声を掛けることで曳行する人々の呼吸を合わせ、力を一つにした。ここには労働歌としての木遣りを見て取ることができ、今でも日本各地にそれぞれの地域で唄われてきた木遣りが残っている。

御柱祭に話を戻すと、氏子たちは御柱の建て替えのため、五丈五尺～四丈五尺の長さの大木を山で切り出し、神社境内まで曳行しなければならない。ここでもやはり、息を合わせて力を一つにするために木遣りが唄われる。これが御柱祭における木遣りの核となる部分ではないかと考えられる。しかし、全ての木遣りが労働歌というわけではない。むしろ今回の調査でわかってきたのは、様々な形態の木遣りがあるということである。例えば諏訪大社下社には「曳行の木遣り」と「神事の木遣り」という二種類の木遣りがある。前者には「力を合わせて　お願いだ」などといった歌詞があり、人々の息を合わせ心を一つにするというまさに労働歌的な側面が強い木遣りであるが、後者は、山の神様を里へお迎え、あるいはお送りするものなど、神へ捧げる唄である。木遣りの多様さは、唄われる場面にまで敷衍している。木を曳く際の労働歌といった意味では本来、曳行時以外に唄われないはずの木遣りが見立ての際に儀式的に唄われることがある。また、曳行の休憩中に即興で唄われる木遣り、オチを付けて場を和ませる木遣り、各木遣り師の持ち唄の木遣りなど、余興的な木遣りも各神社でみられる。この報告書では、それぞれの音楽的特徴や地理的分布などが考察されている。是非ともご一読願いたい。

参考文献

福田アジオ,新谷尚紀,湯川洋司,神田より子,中込睦子,渡邊欣雄『日本民俗大辞典　上』 吉川弘文館、1999 年。

倉野憲司校注 『古事記』 岩波書店 、1991 年。

報告書の目的・検討方法

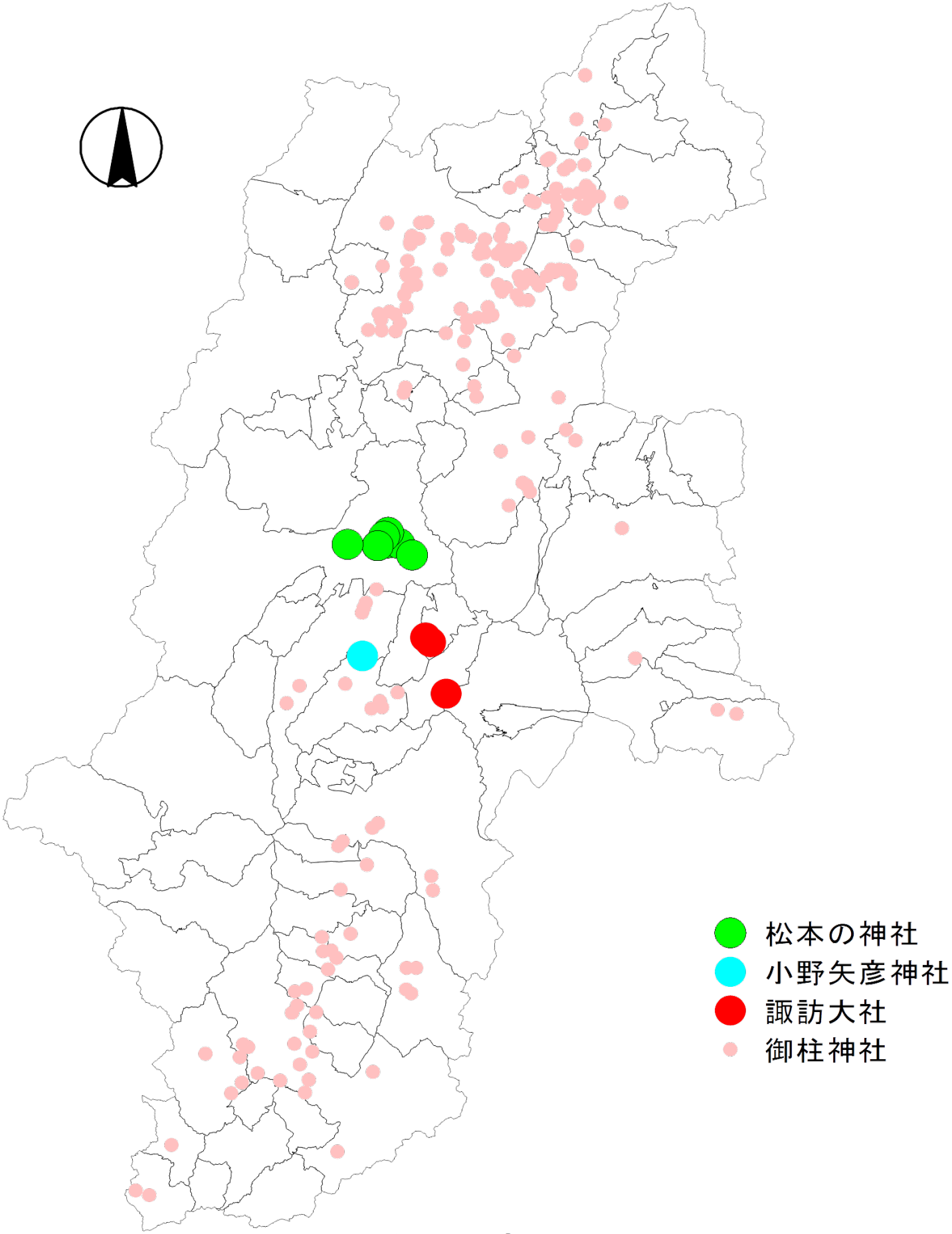
宮田紀英

この報告書の最大の目的は、神社や場面によって多様に唄われる木遣りの実態について体系化し、より鮮明な形にして残すことである。御柱に関する先行研究を探しても木遣りについて記述されているものは少なかった。2017 年は松本地域の諸神社で御柱祭が行われる酉年にあたったため、ゼミにおいて調査・研究を行うのに相応しい機会であった。

さて、報告書を作成するにあたりいくつか重視したことがある。まず一つは生きた報告書作りである。木遣りの継承には例えば楽譜のような書き起こされたものは用いられず、口頭で唄い継がれていく。また場の雰囲気に合わせて唄われる即興の木遣りが存在する神社も複数あり、そうでなくてもその場面に似つかわしい木遣りが披露されることが多い。いわば木遣りは御柱祭の雰囲気の中で、場面で「生きている」唄なのである。そのような木遣りについて述べるにはやはりある種の臨場感を持ってするべきだと考えた。そのような考察をしていくためには実地調査が必要であった。ゼミ生は諸神社の御柱祭を見学し、氏子たちにお話を伺ったり、映像、音声の収録を行うことはもちろんのこと、後ほど各神社の木遣り師や木遣保存会の方々にお願いして直接お話を伺う機会を設けるなどして文献の調査だけでは拾いきれない「生きた」木遣りの世界に触れ、それをできるだけ取りこぼさないように報告書にまとめることとした。

また、神社ごとに検討班を作った。班はおおむねその神社の御柱祭を実際に見学したゼミ生で構成されている。神社により章立てや採譜の方法が異なっているのはこのためで、それぞれの神社の特性に合わせて編集が進められた。例えば木遣保存会の活動が盛んな神社では、その活動についてかなりのページが割かれている。このような編集方法も報告書を作成する際に重視したことの一つである。これに関連して、報告書の多くにはその神社の木遣りを理解する助けとなる神社の立地、由緒などの概要や保存会の歴史などが述べられている。例えば木遣りの歌詞に聴き慣れない単語、フレーズが出てきていたらそれら概要の章などを参照すると意味がわかることがある。

そして最後に、神社同士の比較を行ったことも付け加えておきたい。検討班同士で情報共有をしたり、木遣り師の方々を授業の時間に招聘して話を伺っていく中で木遣りの特徴的な共通点・相違点が徐々に明らかになってきた。これを各班で検討して考察を進めた。また同神社内でも柱によって異なる木遣りが唄われていたところもあった。このような比較の観点にも重点を置きながら、報告書を完成させるに至った。



御柱を行う神社

地図解説

沢木幹栄

御柱はあの有名な諏訪大社だけで行われているのだろうか。松本市や塩尻市、辰野町にあるということは長野県のほかの地域にもあるのだろうか。

このような疑問に答えてくれる研究が小林竜太郎の「平成に入ってから御柱祭を開催した記録のある長野県内の神社」である。ここには長野県内で御柱祭を行った神社のリスト（以下リストと呼ぶ）がある。ただ、残念なことに地図化されていないので、地理的な分布を一覧することができない。

そこで、御柱ゼミの学生が分担して神社の位置情報（緯度・経度）を入力し、沢木が入力情報の最終的な整備を行い、GIS ソフトの MANDARA を使って地図化を行った。それが地図「御柱を行う神社」である。

小林が報告した神社は百九十八社だった（「さらに調査中」ともある）。このうち三社の位置はグーグルマップでも国土地理院の地形図でも確認できなかったので地図からは除外してある。

また、諏訪地方（岡谷市、下諏訪町、諏訪市、茅野市、原村、富士見町）の神社はリストに入っていない。地図上には上社と下社があるが、これは作図時に加えたものである。諏訪地方では諏訪大社の御柱と別にそれぞれの集落や地域の神社で御柱を行うので、それを全部記載すればリストは膨大なものになったと思われる。

今回調査を行った神社の具体的な名前と位置はもう一枚の地図に譲ることにして、この地図では長野県全体の分布を見やすくすることをめざした。その結果として、松本地方の神社は同じ記号で表示し、上社と下社も「諏訪大社」としてまとめることになった。報告書に名前のないその他の神社は「御柱神社」としてある。

地図を見て分かるのは中信地方と東信地方の分布がまばらであることだ。特に中信では松本の薄川沿いの神社群と沙田神社の密集、安曇野市以北の空白が目につく。空白には何か意味があるのだろうか。諏訪大社と同じく建見名方神あるいはそれに連なる神を祭神とする諏訪系の神社はこの空白地帯にも分布しているので、御柱を行う神社があっても良さそうなものである。たとえば、松本市内で最大の神社である深志神社の本来の祭神は建見名方神だが、ここは御柱を行わない。なぜなのだろうか。

なお、リストには松本市上金井の天狗社があったが、これは上金井の集落の裏山の尾根に位置していて現地では「山の神様」と呼んでいる社である。上金井の集落だけの産土（うぶすな）の神であるらしい。上金井では他の集落とともに二の柱を担当する須々岐水神社で御柱を行い、それとは別に山の神様でも御柱を行う。

松本の大和合神社の氏子の各集落にも山の神様があって、それぞれ大和合神社と別に御柱を行う。もともとは須々岐水神社、宮原神社など大きな神社を中心としてまとまった集落のそれぞれに山の神様があったものと思われる。

松本市の神社群は孤立した分布を示すが、そのことと松本の木遣りが諏訪大社の木遣りとはっきり異なったものであることは関係があるのだろうか。小野・矢彦神社と松本の間に位置する塩尻市の神社の木遣りはどんなものなのだろうか。

御柱を行う神社がよく知られている諏訪大社だけでないこと、長野県内に多数存在することはリストによって鮮明になった。南信地方や北信・中信地方に木遣りはあるのか、あるとしたらどんなものなのか、興味はつきない。

参考文献

小林竜太郎「平成に入ってから御柱祭を開催した記録のある長野県内の神社」『長野』303 号、2016 年。

諏訪大社 上社

北村奈々

高橋満里奈

田保綾

はじめに

本項目では、諏訪大社の上社(上社本宮・上社前宮)で行われる御柱祭と木遣りについて取り扱う。御柱祭と木遣りに関する調査を行う私達のゼミでは、諏訪大社および松本市内の様々な神社に足を運び、また保存会や御柱祭に携わる地域の方々のお話を伺った。その中で、それぞれの神社の御柱祭や、人々の木遣りに関するとらえ方の違いが明らかとなり、その差異に大変興味を惹かれた。これらの違いに着目しつつ、報告書の作成により、諏訪大社上社の御柱祭の特徴や、木遣りの変化とそれに大きな影響を与える保存会の活動について、現在の実態を記録したい。本報告書執筆にあたり、実際の御柱祭と木遣りの現状を知るため、諏訪市木遣保存会の方々のお話を伺う機会を設けた。本項目は、文献に加えてこの保存会の方々のお話を参考に作成されている。

第一章では御柱祭の基本的な流れをまとめると共に、下社との差異について取り上げる。第二章では、上社の木遣りの特徴や、近年みられる変化について記す。第三章では、ゼミ内で諏訪市木遣保存会の方を招いた際に伺ったお話から、保存会の活動内容等についてまとめている。

第一章　御柱祭について 担当:高橋満里奈

第一節　御柱祭の流れ

まず、御柱祭の定義を明確にした上で、御柱祭の流れを確認していく。御柱祭とは、寅と申の年に六年に一度行われる行事であり、正式な呼称としては「諏訪大社式年造営御柱大祭」というものがある。御柱祭の行事は、大きく分けて二つに分かれている。社殿の造営行事と、御柱の曳き建て行事である後者の方は、氏子と呼ばれる諏訪地方六市町村の住民が奮って参加をする行事となっている。その地区の住人は老若男女問わず氏子に値し、他県などから引っ越してきた人も、その土地に住めば皆氏子となる。私自身も茅野市に住んでいるため、氏子の一人となる。上社の本宮と前宮それぞれの社殿の四隅に建て替える、合計八本の柱を諏訪市・茅野市・富士見町・原村の四市町村を八グループにわけたブロック一つずつで受け持ち、曳行から建て御柱までを行っていく。なお、本報告書での「御柱祭」というのは、基本的に上社の方の御柱祭を指すものとする。御柱祭が行われる年を、御柱年と呼ぶ[2]。

2 『「御柱祭」ガイドブック』信濃毎日新聞社、2004 年、26 頁。

御柱祭の主な流れ[3]

＜御柱年の二年前＞

仮見立て…御柱用材の巨木を選ぶ見立てに先駆け、その前年行われている候補選び。上社の御柱祭では、御柱祭の二年前に行われる。上社では、明治・大正以前は仮見立てが存在しなかった。慣例では上社御柱山の御小屋山で行われているが、最近では用材不足のために、別場所で行われることもある。

＜御柱年の一年前＞

本見立て…御柱用材を正式に決めること。上社では御柱年の前年に行われる。各柱には、「おねがま」とも呼ばれる諏訪大社の神器の薙鎌が打ち付けられる。

＜御柱年＞

～2 月 15 日～

御柱抽籤式(おんばしらちゅうせんしき)…御柱の曳行分担を決めるためのくじ引きを上社本宮で行う。1890 年から行われている。本宮と前宮の御柱各四本の曳行分担を決める抽選で、前述した四市町村を「ちの・宮川」「玉川・豊平」「湖東・北山・米沢」「原・泉野」「富士見・金沢」「中州・湖南」「四賀・豊田」の八ブロックに分け、各組から選ばれた人間がくじを引き、担当の柱を決める。①拝殿に昇る順番を決めるくじ、②三回目のくじを引く順番を決めるくじ、③担当する柱を決めるくじ、というように、曳行分担を決め終わるまでに三回くじを引くことになっている。上社の御柱は、一般的に本宮一の柱の太さが一番であるとされており、上社の柱を担当する各地区では、自分たちの地区にふさわしい御柱を曳くことを望む氏子は多い。そのため、くじを引く人に期待が寄せられるので、くじを引く人のプレッシャーは大分大きいように見受けられる。抽籤式の様子は、地元のテレビ局によって中継もされている。

～3 月中旬～

山之神祭(やまのかみさい)･･･御柱用材の伐採前日に行われる。伐採に向けた安全祈願祭で、祭壇には元禄五年の生き神様である諏訪頼隆から拝領された朱塗りの柄の神斧をはじめ、のこぎりなどの伐採道具が供えられる。山作りの持ち回りによる当番の家が祭場となる。

七社明神祭･･･山之神祭に引き続いて、七社明神で行われる。伐採の奉告や安全を祈願する。

火入れ式･･･七社明神祭のあと、山作りの鍛冶場で行われる。火焼式とも呼ばれており、伐採に使用される神斧やのこぎり、なたなどを忌火で焼き清め、翌日の伐採に臨むための儀式。

3『カラーグラフおんばしら　ガイドブック』信州・市民新聞グループ、2003 年、2 頁~22 頁。

御柱の伐採･･･火入れ式の翌日に行われる。諏訪大社の神職者や山作りから一般氏子に至るまで、近年では数千人の参加者がある。山作りの人が神斧でよきを入れ、伐採開始が告げられる。

綱打ち･･･抽選で決まった柱の大きさにふさわしい曳綱を作ること。材料には玉縄が用いられることが多い。

～4 月上旬～

御柱の山出し･･･三日間かけて、綱置き場に置かれた八本の御柱を茅野市宮川安国寺にある御柱屋敷まで曳行する。ちなみに、山出しの終着点である御柱屋敷とは、里曳きまでの約一ヶ月間御柱を安置しておくための、屋外にある広場のことである。道のりは、約十一・九キロメートルに及ぶ。各ブロック毎に、カラフルな法被(はっぴ)に身を固めた氏子たちの手で曳行される。二十五度の斜度を三十五メートル落ちる木落としや、土手の上から川の激流に突っ込んで川を渡る川越しなど、曳行する中でいくつかの難所が存在している。また、木遣りによって多くの氏子の心を一つにしながら曳行していく。各地区ごとに法被を作り、それぞれ個性豊かなパフォーマンスをしながら曳行が行われる。法被の柄も様々で、比較的落ち着いた色合いのものから、非常に派手なものまで地区ごとに特色が出る。

～4 月下旬～

御柱休め･･･六年間の役目を果たした御柱を撤去する行事。山出し終了後から里曳き開幕までの間に行われる。撤去した柱を諏訪市中洲の八龍神社(はちりゅうじんじゃ)に安置して古御柱祭を行う。

～5 月初旬～

里曳き･･･山出しから一ヶ月後に、三日間かけて行われる。御柱屋敷から、各柱を建てる本宮または前宮まで御柱を曳行していく。曳行する距離は一キロメートル～二．三キロメートルであり、山出しとは一転して短くなっている。御柱は、御柱屋敷より本宮一・二・三・四、前宮一・二・三・四の順に曳き出される。ゴールデンウィーク中に行われることもあり、観光客も沢山訪れている。屋台なども多く出店され、御柱祭を盛り上げる一端を担っている。

建御柱･･･本宮・前宮の境内に曳きつけられた各四本の御柱は、社殿の四隅に建てられる。これが建御柱である。御柱が曳きつけられたあと木遣りを唄い、柱の先端を三角錐状に切り落とし、御柱としての威儀を正すとされる冠落しが行われ、建立へと移る。御柱に氏子がまたがった状態で、少しずつ御柱が建ち上がっていくため危険さもあるが、その分見応えも大きい。

～6月15日～

宝殿遷座祭･･･本宮に東西二棟ある宝殿を六年おきに交互に建て替え、新しい宝殿へご神体や剣などの神宝を移す行事。御柱の曳き建てに並ぶほど重要な行事である。慣例により、6月15日の正午から行われる。

私自身は、上述した工程の中で山出し・里曳き・建御柱に参加したことがある。そのうち、山出しと里曳きで実際に御柱についている綱を曳いた。地区ごとの団結がとても強いため、時折あがる「ヨイサ」のかけ声に合わせて、皆で協力できた感じがした。地区ごとに毎回法被を新調して揃えたり、安全祈願のために御守り袋を作ったりした事も、氏子の士気を上げる一因となっているように思う。また、家族や親戚の中で御柱に乗る人がいれば、その活躍ぶりを見に行く楽しみもある。御柱祭が終わると、次の御柱祭を心待ちにする氏子も多い。上社の御柱祭は回を重ねる毎に華やかになっている感じがする。地区によっては宝投げやくす玉割り、太鼓演奏やラッパ演奏なども行われるので、多様な観点から御柱祭を全力で楽しむことができるのも、魅力の一つである。

第二節　上社と下社の御柱の違い

～御柱自体の差異～[4]

氏子によって曳行される御柱そのものについては、基本的には上社と下社とではそれ程差異はない。だが、上社と下社とで、主に三点異なる点が存在する。一つ目は、御柱自体の重さである。上社の御柱は約十トン、下社の御柱は六～八トンと、上社の御柱の方が重くなっている。これは、御柱を伐採する時期が上社と下社とで異なっているために生じる差異である。下社の御柱が御柱年の一年前に伐採されることで水分が蒸発するのに対し、上社の御柱は御柱年に伐採されるので水分を含んだ生木の状態が保たれるため、下社のものよりも重くなるのである。

二つ目は、御柱の木の皮の有無である。下社の御柱は前述のとおり御柱年の一年前に伐採され、その後、木の皮を剥がれる。対して上社の御柱の皮は、そのままの状態になっている。ただし、最近では下社にならって皮を剥いでいる地区もある。三つ目は、めどでこの有無である。これが一番大きな違いであるといえる。めどでことは、御柱の前部と後部に穴をあけて差し込み、V字形に取り付ける木の柱のことを指す。このめどでこがあることによって、御柱を左右に傾けバランスをとり、動きやすくすることが可能になる。上社の御柱にはめどでこがあり、下社の御柱にはない。下社の御柱にめどでこがないのは、下社の御柱を曳行する際の道路幅が狭く、もしめどでこをつけて左右に揺らすと谷底などに落ちてしまう可能性があって大変危険だからである、ともいわれている。

4 宮坂清通、増沢光男、竹渕甲子、信州・市民新聞グループ『おんばしら　諏訪大社御柱祭のすべて（改訂版）』、信州・市民新聞グループ、2009年、20頁~21頁。

～御柱祭の流れ上で生じる差異～[5]

御柱祭の工程ごとに、上社と下社との違いをみていく。

工程	上社	下社
仮見立て	御柱年の二年前	御柱年の三年前
本見立て	御柱年の一年前	御柱年の二年前
抽籤式	御柱年の２月 15 日	柱を曳行する地区が元々決まっているため、行われない。
御柱伐採	御柱年の３月	御柱年の一年前
綱打ち	御柱年の３月	御柱年の２月
山出し	御柱年の４月上旬	御柱年の４月上旬後半～中旬。なお、川越しは行われない。
里曳き	御柱年の５月初旬	御柱年の５月上旬後半～中旬
宝殿遷座祭	御柱年の６月 15 日	里曳きの前日

私自身は、上社と下社の御柱祭はどちらも違った魅力をもっており、工程や柱自体に違いはあれど、どちらも各地区の氏子達が力を合わせて本気で取り組んでいることに変わりはないと思っている。下社の御柱祭では、より迫力のある木落としを見ることができ、上社の御柱祭では、川越しや氏子達の華やかなパフォーマンスを見ることができる。どちらの御柱祭も、魅力にあふれた素晴らしい祭の一つである。また、一人の氏子として、自分達の柱を無事に上社まで曳行し、建御柱が完了するまでを無事に遂行することに、使命や誇りを感じている。

5 宮坂清通、増沢光男、竹渕甲子、信州・市民新聞グループ『おんばしら　諏訪大社御柱祭のすべて（改訂版）』、信州・市民新聞グループ、2009 年、15 頁。

第二章　木遣りについて　担当:田保綾

2017 年 12 月 14 日、諏訪市木遣保存会より、役員の竹森笑子さん・田中和人さん・石上千奈美さん・小林智波さんを大学に招いた。この章は、その際にお話しいただいた内容をもとに作成している。

第一節　諏訪大社上社の木遣り

木遣りは御柱祭に必要不可欠な存在である。例えば御柱祭では、境内に御柱を建てるため、数千人の氏子による曳行が行われる。その際に、綱を曳くきっかけを作ったり、数千人の氏子の心を一つにしたりするのが木遣りの役割である。その点で、木遣りはかけ声のような存在であるといえる。諏訪大社上社の木遣りに特徴的な高い声は、曳行の長い列全員に声を届かせるために、有効なものである。木遣り師はおんべ(御幣)を持ち、掲げながら木遣りを唄う。

実際の御柱祭中に木遣りを披露する場面では、まず木遣り師が前半を唄い、氏子全員の「オー」や「ヨー」というかけ声の後、続いて木遣り師が後半を唄い、再び「オー」などの氏子全員のかけ声に、「ヨイサ　ヨイサ　ヨイサ」というかけ声が続く。下の句では複数の木遣り師が加わって唄うことが多い。曳行の際などにはその直後に綱が曳かれることとなる。また、木遣りの直後にラッパ隊によるラッパの演奏が加わる様子も頻繁にみられる。近年では、曳行の列が昔よりも長くなっており、列全体に声を伝えるために、離れた位置にいる木遣り師二人が旗を合図に、最初から同時に唄い始める場合もある。

しかし、このような木遣りの流れは、諏訪大社以外の神社では様子が違っている。松本市の千鹿頭神社（119 ページ参照）や塩尻市の矢彦神社（41 ページ参照）など、他地域の複数の神社では、木遣りは曳行の途中の、休憩の合間等、落ち着きながら聞くものであり、綱を曳くきっかけになることもない。木遣りの長さも諏訪のものと比べて長く、最後まで一人の木遣り師によって唄われる。ただし、矢彦神社では、長い木遣りとは別に、綱を曳くきっかけをつくる「さくり」と呼ばれる木遣りが存在し、こちらが諏訪大社での一般的な木遣りと同じ、かけ声のような役割を果たしている。

諏訪大社の下社と上社では、類似した木遣りがみられる。上社の木遣りは、下社に比べて音の上下(山)がはっきりとしており華やかなことが特徴である。

第二節　近年の木遣り

木遣りは御柱祭以外でも、祭りやイベントなど様々な場面で唄われている。コンクールや CD が登場した影響で、地域や個人間の差異は少なくなる傾向にあるが、節回しは一人ひとり異なる。個々の唄い方の違いとしては、例えば始めの「ヤアー」の部分の伸ばし方が挙げられる。音の高低がつくる

山が一つか、二つかが人によって異なっており、その影響で伸ばす長さも個人によって違ってくる。しかし上記の通り差異は少なくなっており、上社と下社の木遣りも、過去より一層似たものとなっている。

コンクールは現在、上社と下社でそれぞれ行われている。「木遣り日本一コンクール」は現在十一回目で、上社だけでも百七十人ほど参加しており、保存会だけでなく一般参加も多い。名前の五十音順で木遣りを順番に披露する。審査は始めの人を基準にし、声量・品格・明瞭度・節回しなどを審査項目として、優れたものを決める。主催は長野日報と LCV(ケーブルテレビ局)であり、名人の名もこれによって与えられる。

現在では女性の木遣り師も多くいるが、女性が木遣りに加わったのは戦後になってからのことである。

歌詞についても変化がある。歌詞の内容は本来御柱祭の進行や内容とリンクしているものが多い。唄われる場所や、状況により歌詞が決定されるのである。例えば川越しの場面では「ここは川越しお願いだ」、木落としの場面では「ここは木落とし　お願いだ」などがある。石川の論文「諏訪大社御柱祭の文化人類学的研究：祭礼の存続と民間信仰」（2015）において、木遣りが唄われる状況と歌詞が、表としてまとめられている。このような基本的な歌詞は現在も歌い継がれているが、一方で新たに作成される木遣りがある。例えば、子どもたちによる子供木遣りの場面では「子供の木遣りでお願いだ」といった、独自の歌詞が唄われている。また、保存会の木遣り師が御柱祭以外の様々なイベントに参加して木遣りを披露する場面では特に、作詞が頻繁に行われる。例えば結婚式では、「〇〇記念で おめでたい」「ご両家栄えて おめでたい」「新郎新婦 幸せに」といったような歌詞で木遣りが行われる例がある。

第三節　諏訪市木遣保存会の木遣り

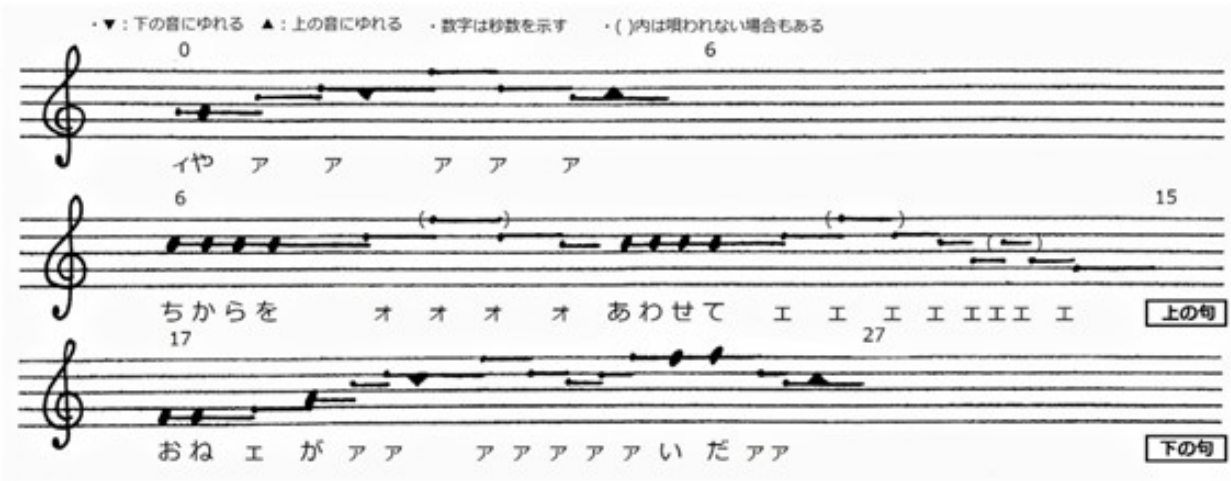
諏訪市木遣保存会には上社の四賀・豊田地区、湖南・中洲地区に加え下社の上諏訪地区も参加しており、区別なく同じ木遣りを行う。本報告書の CD に収録されている上社の木遣り音声は、諏訪市木遣保存会の皆様に大学にお越しいただいた際に採録したものだが、三番目（CD トラック 3）に収録されている木遣りを唄った小林さんのみが、下社の地区に所属されている。実際に小林さんの木遣りを他の方のものと比較すると、基本的な部分に違いがないことがわかる。

この保存会が参考としているのは、複数回コンクールで最優秀賞を受賞している小松名人の木遣りである。もともと、小松名人の木遣りを継承していくためにこの保存会が結成されており、会員は名人の木遣りを手本に、各々の節回しも取り入れながら木遣りを行なっている。木遣りの歌詞についても、保存会ごとに歌詞をまとめた資料が作成され、受け継がれている。また、現在保存会では、長持ち唄など、御柱祭で唄われる他の唄の習得にも取り組んでいる。

特徴的な発声は、腹式呼吸を始めとした練習の成果であり、保存会会長によればほとんどの人が練習によって出すことが可能だという。しかし実際に間近で木遣りを聴くと、声量やよく通る高い声に驚かされ、簡単に習得できるものではないということを感じた。重要とされているのは、喉に力を入れるのではなくお腹から声を出すことで、木遣りを長時間唄っても喉が痛くなることはないという。ただし同時に、木遣りは繊細なものであり、常に万全な状態で唄えるというわけではない。体の調子によっては、よい木遣りが唄えなくなってしまう。今回大学で木遣りを披露していただいた際も、会長の竹森さんは、木遣りを唄う前に長時間声を張って話をした影響で、本調子で唄うことができなかったとおっしゃっていた。本来木遣りの前には、喉の保護のために事前の行動に注意を払い準備するのだという。

第四節　木遣りの記譜と特徴

譜 1



いくつかの木遣りを参考にし、平均的な音程等を示したのが以下である（譜 1）。数字は秒数を表している。歌詞のなかで、「ちからをあわせて」までは上の句、「お願いだ」は下の句にあたり、それぞれが一息で唄われる。音程の基準は決まっておらず個人によって、また状況によって、唄い始めの音程は異なる。しかし、実際に複数の木遣りを聴くと、特に女性において最も多く唄われているの

が画像にあるような「ラ」から始まる木遣りであった。この場合最高音は「ファ」であり、最低音はその一オクターブ下の「ファ」となる。男性の木遣り師は個人間で基準となる音の差が大きいが、女性よりも低く「ミ」や「ファ#」を唄い初めにする方が多い印象を受けた。音の長さについても決まっていないが、初めの「ヤアー」と下の句の三音節目(譜例ではおねがいだの「が」)部分が最も長く、どちらも平均して六秒ほどである。下の句の最後(あわせての「て」)は四秒ほどで、唄全体の長さは三十秒程度と言われている。

諏訪大社の御柱祭で唄われる木遣りの多くは、歌詞が「ヤアー」から始まり、その後、上の句が七から八音節、下の句五音節で構成される。歌詞が多少字余りであっても、上の句の場合、言葉の入る部分が全て同じ音程(譜例では「ド」)のため、そこに数音節加わるのみで旋律に大きな変化はない。上の句が七音節であれば三対四(例「やまの　かみさま」)に分けられ、三音節目が一区切りとなって音が伸ばされることとなる。上の句が八音節になった場合はその分かれ目は四対四となる(例「こどもの　きやりで」)。

その他の字余りの例として、下社では、上の句が七+五の十二音節となるものがあった(「男綱 女綱の 綱渡り」)。このとき、始めの七音節が三対四に分けられて通常と同じようなメロディで唄われ、残りの五音節はそれに続いて、四字の部分が繰り返されるように付け加えられる構成となっていた。この十二音節の音程は全て同じであるため、結果的には三対九の分け方に聴こえる。また、下の句で音節数が変わることは少ない。

本報告書に収録されている、諏訪市木遣保存会の方々の木遣りをこの譜例と比較してみると、一番目(CD トラック 1)の竹森さんの木遣りは譜と同じ「ラ」の音から始まり、三番目(CD トラック 3)の小林さんはその上の「シ」、二番目（CD トラック 2）の石上さんはそれよりも高い「ド」から始まっていた。竹森さんの木遣りには、譜上に括弧で表された音の全てが現れなかった。石上さんは始めに出てくる括弧内の音のみ発声しており、「ちからを」の後のメロディの山がはっきりとしている。小林さんは、始めの括弧とその次の「あわせて」の後の一つめの括弧内の音を発声しており、より音の上下が激しくなっている。全体的にみるとこの諏訪市木遣保存会の傾向としては、括弧内の音が比較的現れにくいということが分かった。これには手本としている木遣り師の影響が考えられる。もちろん個人の木遣りの違いは今回譜に記した括弧の音だけにあるのではなく、音声を聴くとその他にも多くの差異があることが分かる。しかし節回しの個性は完全に自由に決定されるわけではなく、ある程度アレンジ箇所と方法の規則性があり、その組み合わせによって生まれているということが感じられた。

第三章　諏訪市木遣り保存会について　担当:北村奈々

2017 年の 12 月 14 日、私たち御柱ゼミは諏訪市木遣保存会の方々を信州大学にお招きし、お話を伺った。第三章は、その時に伺ったお話をもとに諏訪市木遣保存会の実態について記述している。

保存会の構成

諏訪市木遣保存会は四賀・豊田地区、湖南・中洲地区、下社の上諏訪地区で構成されている。会員は三十八人で、現会長は竹森笑子さんである。会員のうち女性は十四人いる。会長は総会の選挙で決められ、役員の任期は御柱祭から御柱祭までの六年間である。

保存会の普段の活動

諏訪市木遣保存会の方々は、毎月、第二週の日曜日や、第一・第三週の火曜日に、西山公園で木遣りの練習をしている。また、御柱や上社に関する理解を深めるため、学習会を開いて勉強することもある。 個人で結婚式のお祝いの一つとして依頼されることもある。各地区の敬老会などにも出演している。依頼があれば県外まで出向くこともある。御柱年には、姉妹都市である長崎県壱岐市へ古御柱をトラックで移送し、海を渡る御柱祭も行っている。以前にはハワイでの御柱のために木遣りに行った経験者の方もいる。また、冬季長野オリンピックの開会式にも参加している。

以下に諏訪市木遣保存会の方からいただいた資料をもとに、保存会の平成 29 年度の活動状況の一部をまとめた。

5 月 9、16、23、30 日　諏訪市民を対象に四回連続の木遣り教室を城山小学校体育館で開いた。(最終日の参加人数は延べ百六十人であった。)

7 月 8 日　市の生涯学習課からの依頼で、ニムラ舞踊創作ダンスと木遣りのコラボをし、諏訪の伝統を伝える小学生と綱渡りを表現。

7 月 22 日　柳並公園ですわよいてこ祭の昼の部と夜の部に参加。

7 月 31 日　食彩館にて行われたお船祭前夜祭で、下諏訪町木遣保存会と合同で木遣りを競演。

8 月 1 日　下社春宮で行われたお船祭りに参加。

9 月 10 日　諏訪大社下社秋宮でご祈祷・参拝をした後、学習会を開いた。

9 月 13 日　諏訪赤十字病院の日赤ロビーコンサートで木遣りを披露。

10 月 4、10、19 日　選挙候補者の「事務所開き出陣式　総決起大会」で木遣りを披露。

12 月 14 日　信州大学人文学部　芸術コミュニケーション分野　御柱ゼミの依頼により、木遣り披露。

2018 年 1 月 1 日　かたくら諏訪ホテルにて、新年初木遣りを披露。

保存会の課題点

諏訪市木遣保存会の課題点の一つは、若い木遣り師が少ないことである。現在、保存会会員の三分の一が七十歳以上であるため、もっと若い人に広めていく必要がある。

二つ目の課題点は、女性の木遣り師が少ないことである。木遣りは男性文化中心で、湖南・中洲地区でも、女性は絶対に柱に乗ることが出来ない。昔は、女性は柱に触ることすら許されていなかった。

諏訪市木遣保存会は、このような課題を改善するための活動を積極的に行っている。まず、今年から木遣り教室を開き、子どもに木遣りを教え、若い木遣り師を育成する活動を始めた。また、依頼があれば、県内外問わず出向き、様々な場面で木遣りを披露し、色々な人に木遣りを知ってもらおうと努力している。毎月欠かさず木遣りを練習したり、御柱や上社に関する学習会を開くなど、自分たちも向上していこうという努力も忘れない。

写真 1: 諏訪市木遣保存会会長　竹森笑子さん　(2017 年 12 月 14 日　撮影:田中)

会長の竹森さんは、男性文化中心の木遣りを変え、女性にも広めたいと考え、会長になったと話していた。竹森さんが会長になってから、新規の会員が六人ほど入ってきたらしい地区外から木遣りをやりたいと言って保存会に入ってくる女性も増えたという。それは保存会の積極的な活動による結果であろう。竹森さんは、「木遣り教室から改革して、人数を増やし、会員の意識を変えていかなければならない。木遣りはやりたい人がやる分野なので、入ってくる人は六年あっても二、三人ほど。そうすると何十年か先の未来は見えているのでここでどうにかしないといけない。若い人にも木遣りを広めていくのが自分の使命だと思っている」と話していた。保存会の方々のお話からは、御柱祭に懸ける熱い想いや、木遣りを継承し広めていきたいという意気込みが伝わってきた。

また、保存会の方々にはお話だけでなく、実際に木遣りを披露していただいた。木遣りを聴き、私はその迫力に鳥肌がたつほど圧倒された。保存会の方々は、教室を突き抜けてはるか遠くまで届くような声で唄っており、その唄を真正面から聴いて、自分の肌がびりびりする感じがした。保存会の方々に指導を受けながら、私たちゼミ生も実際に声を出す練習をしたが、お腹から声を出すのはとても難しかった。木遣りは、御柱祭の曳行で、御柱を動かすために何千人もの氏子の気持ちを一つにするという重要な役割がある。その何千人に届くように木遣りを唄えるようになるには、長年の訓練と努力が必要である。基本の発声をすること自体とても苦労したことから、改めて木遣り師の凄さを感じた。　保存会の今後について、感じたことや考えたことがいくつかある。まず、保存会の方々が、木遣りを広めるために積極的に活動を行っていることや、木遣りが素晴らしかったことから、その努力が実り、木遣りをやりたいという人がこれからもっと増えると思った。また、私は木遣り師が名人の節をアレンジして、自分独自の節をそれぞれもっていることに驚いた。そういった自分だけの木遣りをつくり、唄うことができるのも木遣りの大きな魅力の一つではないかと思う。保存会の方々の中に、お子さんが小学生の時 PTA の役員で子供に木遣りを教えたと言っていた方が何人かいたが、人に教えるということは自分も木遣りに対する理解を深める必要があると思うので、そういった機会がきっかけで木遣りの魅力や素晴らしさに気づく人が増えるといいと思った。

最後に、保存会の、若い人や女性の木遣り師が少ないという課題を解決するために、私が考えた案を提案する。まず、地域ごとで一定の年齢になったら木遣りに参加しなければならないという決まりをつくるという案だ。例えば、成人したら保存会に必ず入るというようなことである。これは、確実に後継者を残すことができると思うが、強制的なものになってしまう。できればやりたい人がやるのが一番良いと思うので、この案はあまり好ましくないのだが、一つの案として提案した。二つ目は、衣装を若者受けしそうな派手で格好いいデザインのものにするということである。もちろん今の伝統的な衣装も素晴らしいと思うが、もっと若者を引き寄せるためには検討しても良い案なのではないかと思う。「あの衣装が着たいから、木遣りをやりたい」というように、形から入って木遣りに興味をもつ若者がいるのではないかと思う。最後に、木遣りはそれをやることを通して地域の人との関わりが増え、その結びつきが強くなるという側面があると思う。新しく地域に入ってきた人達も木遣りを通して地域に溶け込めると思うので、積極的に声を掛けていくのが重要ではないかと私は考える。

写真 2: 写真２　諏訪市木遣保存会の皆さんとゼミ生　(2017 年 12 月 14 日)

おわりに

諏訪市木遣保存会の方々を信州大学にお招きした時、下社の保存会の方もいらっしゃり、お話をしていただいた。そのお話によると、もともと素朴なものだった下社の木遣りは、木遣りコンクールで優勝するために華やかになったり、名人の木遣りを録音したＣＤの影響で皆名人の節に統一されてきているという。つまり、下社の木遣りが変化し、多様性がなくなってしまったということである。木遣りコンクールも名人の木遣りのＣＤも、木遣りを広め、継承していくために必要なものだと思う。しかし一方で、木遣り師が各々で独自の木遣りをもっており、それだけ多様であることも木遣りの魅力の一つであると思うので、難しい問題だと思った。民謡は変わっていくのが普通でそれが面白さでもあるので、研究していく上で変化と多様性を頭に入れておくと良いというお話もされていた。この報告書を作成するうえで、そういった民謡の可能性や問題点についても考える良い機会となった。

参考文献

上田正昭『御柱祭』郷土出版社，1998 年。

宮坂清通増沢光男、竹渕甲子、信州・市民新聞グループ『おんばしら　諏訪大社御柱祭のすべて（改訂版）』信州・市民新聞グループ、2009 年。

『「御柱祭」ガイドブック』信濃毎日新聞社、2004 年。

『カラーグラフおんばしら　ガイドブック』信州・市民新聞グループ、2003 年。

諏訪大社下社

長谷川七海

吉野ひかる

五十嵐美佳

戸田伊城

はじめに

諏訪大社下社の御柱祭および木遣りについて報告していく。

実際の御柱祭に参加することはできなかったが、2017 年 12 月 17 日に初めて下社の木遣りを生で聴いたときは、性別や年齢も関係なく木遣り師の方々が堂々と御幣(おんべ)を掲げ、甲高い声を張り上げるその迫力と独特な唄い方に興味を持った。また、木遣りを調べるためには、その担い手である保存会について詳しく知ることも不可欠であると考えた。そこで、大規模な下社の御柱祭の中で木遣りが果たす役割、他地域との差異、そして保存会での木遣りの伝承保存の現状、取り組み、木遣りへの思いなどについて主に実際に見聞したことをもとに考察していく。第一章では、下社御柱祭の概要について述べる。第二章で木遣りを歌詞と旋律の面から検討したうえで、続く第三章では木遣りを支える人々についてまとめていく。

第一章　諏訪大社下社御柱祭の特徴

本章では諏訪大社下社そのものについてや、御柱祭の流れをまとめている。

第一節 下社について　担当:長谷川七海

下社は八坂刀売神(やさかとめのかみ)を主祭神として、建御名方神(たけみなかたのかみ)・八重事代主神(やえことしろぬしのかみ)とともに祀っており、春宮・秋宮の二つがある。

・下社春宮

建物の配置は秋宮ともに本殿はなく(諏訪様式)、奥に拝幣殿と片拝殿があり拝幣殿の正面に神楽殿がある。さらにその奥に宝殿があり、宝殿奥に御神木の杉の木がある。幣拝殿正面の彫刻がとても精巧で見事である。

・下社秋宮

神社中心部の配置は配置も構造も春宮と同じであるが、正面の神楽殿には青銅製の大きな狛犬がありまた彫刻なども趣が異なる。下社の中心とも言われ、春宮より神楽殿の規模がより大きく境内社も多く、また宝物殿などがある。拝殿内部の「竹に鶴」などは代表作で、拝幣殿と神楽殿は県宝となっている。春宮と合わせ建物の多くは国の重要文化財にも指定されている。拝幣殿の奥には御神木のイチイの木がある。

第二節 下社御柱祭の流れ　担当:吉野ひかる

◎仮見立て、本見立て、伐採

　上社の御柱山は八ヶ岳西麓にある御小屋山である一方、下社は鷲ヶ峰西麓の東俣国有林に位置する御柱祭の前年に伐採を行い、搬出方法は氏子間で協議をして決定する。この搬出を「奥山出し」ともいう。

◎山出し

下社の山出しは、上社の山出しから四日後に行われる。

・棚木場(たなこば)

下諏訪町大平にある下社山出しの開始地点。上社のように一斉には曳き出しを行わず、初日に春宮四、春宮三、秋宮二の順で、二日目は秋宮四、春宮一、春宮二、秋宮三、秋宮一の順で始まる。

・萩倉の大曲(はぎくらのおおまがり)

大きいカーブのため全体が見渡せない難所であり、一気に通り抜けるために木遣り師たちの唄で息を合わせるポイントともなっている。

・木落し坂

最大の難所である木落し坂は、最大斜度三十五度の坂が百メートル続いている。曳行開始と同じ順番で行われ、最も太い秋宮一之柱が最後になる。御柱館よいさに訪問した際、実際の木落しを映像を用いて体験できる装置に乗ってみたが、そこでの感覚と実際に木落し坂の上から見下ろした光景はかなり違い、想像していたよりもずっと急勾配の坂に思わず恐怖感を覚えるものであった。

・注連掛(しめかけ)

山出しの最終地点。坂を下った御柱はその日のうちに、小高い丘の注連掛に安置され、一か月後の里曳きを待つ。

◎里曳き

下社の里曳きは上社の里曳きの後、七日目前後に設定され、注連掛に安置していた八本の御柱が春宮へ向けて出発する。また、秋宮から春宮へは、朱塗りの御輿とともに御柱行列が御柱の曳行に先立って先導し、町内で賑わいをみせる。旧中山道を通り、春宮境内へ曳きつけられた春宮の御柱は、先端を三角錐に整える「冠落し」を行った後、氏子たちの手によって建御柱が執り行われる。一方秋宮の御柱は、初日を下馬橋(げばばし)の前で終え、二日目に下諏訪の町中を抜けて難所の坂を登っていく。その後秋宮境内に入り所定の位置に辿り着いた御柱は、春宮同様、冠落としと建御柱の儀へと移り、最後を飾る。

第二章　下社の木遣り

下社の木遣り唄は、「神事の木遣り」と「曳行の木遣り」の二つに大きく分けられる。前者は「綱渡りの唄」とも呼ばれ、木遣りを始めるにあたって全国の山の神様をお迎えする際に唄われる。また後者は曳行中に、氏子たちの士気を高めるなどの目的で唄われる。本章ではこれら二種類の木遣りから代表的な唄を選び抜き、歌詞や記譜、下諏訪町木遣保存会の方のお話などを踏まえたうえでその特徴を分析していく。なお、本章の執筆にあたっては、2017 年 12 月 17 日に伺った下諏訪町木遣保存会の方々のお話を参考にしている。

第一節 歌詞について　担当者：五十嵐美佳

1. 唄い出しとかけ声

	唄い出し	上/下の句	掛け声
曳行の木遣り	「ヤー」	(略)	「コーレーハサンノウェー、ヨイサ、ヨイサ、ヨイサ」
神事の木遣り	「ヤアーレエー」	(略)	「ヤレヨーイサ、エーヨイテーコショ、エーヨイテーコショ」

曳行の木遣りでは、初めに「ヤー」、上の句、そして下の句の「お願いだ」の後に「コーレハサンノウェー　ヨイサ　ヨイサ　ヨイサ」というかけ声が入る。意味は明らかではないが、「これはサンノウへ」、すなわち下社秋宮のある山王台へ御柱を運ぶことと関係しているのではないかと保存会の方はおっしゃっていた。

ただ、保存会の方によると、何よりも御柱を曳くタイミングを合わせる「せーの」のような役割が大きいという。一方神事の木遣りでは、唄い出しで「ヤアーレエー」と音を伸ばし、歌詞を唄い終えた後に「ヤレヨーイサ　エーヨイテーコショ　エーヨイテーコショ」

と唄う。

一人の木遣り師が「エーヨイテーコショ」と唄うと、その後他の木遣り師が全員で声をあわせて同じように唄う。こちらも昔は神事の木遣りでも御柱を引っ張っていたため、力を込める合図であったなどの諸説はあるものの、言葉自体に特に決まった意味はない。

2. 曳行の木遣りの歌詞

曳行の木遣りは、基本的に上の句(七音節)＋下の句(五音節)の十二音節から成るものである。唄われる場面は、曳行中と建て御柱の場面である。

2-1. 曳行中の木遣り

保存会によると、曳行中は木遣り師がその場所や状況に合った歌詞を選んで唄うという。

上の句	下の句
山の神様	お願いだ
氏子の皆様	お願いだ
力を合わせて	お願いだ
協力一致で	お願いだ
ここは木落し	お願いだ
これより曳出し	お願いだ

保存会の方に伺った話によると、曳行の木遣りの中で最もオーソドックスな歌詞が、「山の神様(上の句)お願いだ(下の句)」であるという。上の句において「〇〇の〇サマ」や「〇〇テ（デ）」といった末尾に同一の語や類似の響きをもつ語が見られる。似た響きの音をもつ文字を選択し、韻を踏もうとする傾向があることがうかがえる。基本的に新たな木遣り唄がつくられるということはない。ただ、木遣り師が曳行の際にその場面に合わせた即興の歌詞というのはしばしば唄われるという。さらに、宴会の席に呼ばれるとその会の名前を入れるように頼まれて唄うなど、その場限りの木遣りはつくられているというが、その歌詞がこれから先も根付いていくということはないという。

2-2. 建て御柱の木遣り

境内に御柱を立てる建御柱の際に唄われる。

上の句	下の句
建て御柱だで	お願いだ
建て方の皆様	お願いだ
冠落しだで	お願いだ

「冠落し」とは、建て御柱を行う前に、斧取りとよばれる者が御柱の先端を三角錐に切り落とす儀式である。上記に限らず、他にも曳行中の木遣りの中で、建て御柱に合う歌詞なら唄って良いとされている。

3. 神事の木遣りの歌詞

神事の木遣りは、基本的に歌詞は決まったものを唄い、絶対に即興を加えることはない。全て歌詞の終わりに「ヨーイサ」が付く。以下場面ごとに歌詞をみていく。

3-1. 山の神様をお迎えするときの歌詞

棚木場に一年間安置されている御柱を抜き出すときに、それぞれの柱で必ず唄われるものである。この場面で唄われるものは、「綱渡りの木遣り」とも呼ばれる。

1. 奥山の大木　里に下りて神となる　ヨーイサ
2. 綱渡り　ヨーイサ
3. 男綱女綱の綱渡り　ヨーイサ
4. 元から末(うら)まで綱渡り　ヨーイサ
5. 伊勢神明　天照皇大神宮　八幡大菩薩　春日大明神　山の神が先達で 花の都へ曳きつける　ヨーイサ
6. 三ヶ耕地の若い衆　力を合わせて頼むぞな　ヨーイサ

「奥山の大木　里に下りて神となる　ヨーイサ」は、曳行が始まる際に一番初めに唄われるものである。歌詞に見られる「綱渡り」とは、曳行にあたって曳き子に綱を渡していくことからきているのではないかと、推測ではあるが考えられる。また、「男綱女綱」の「男綱」とは御柱に向かって左側の曳き綱で、「女綱」とは御柱に向かって右側の曳き綱である。「元から末(うら)まで綱渡り」とは、曳き綱が、御柱に近く最も太い方から元綱、中綱、末(うら)綱と呼ばれていることから、元綱から末(うら)綱まで、曳き子に綱を渡すことを意味していると考えられる。

「伊勢神明…花の都へ曳きつける　ヨーイサ」は、日本の大きな神様に御柱祭の始まりをお告げし、山の神様の先導で里に曳きつけることを唄っている。

3-2. 山の神返しの歌詞

山出しの最終地点において、その日のお祭りが終わった後に、山に神様をお返しするときに唄われるものである。

1. 恋に焦がれし　花の都へ曳きつけ　山の神これまで　ご苦労だ　元の社へ　返社なせ ヨーイサ　返社なせ　ヨーイサ[6]
2. 恋に焦がれし　花の都へ無事に曳きつけ　山の神これまで　長の道中御苦労だ　元の社へ 返社なせ　ヨーイサ
3. 恋に焦がれし　花の都へ無事に曳きつけ　万万歳　ヨーイサ
4. 山の神これまで　ご苦労だ　元の社へ返社なせ　ヨーイサ
5. 氏子の皆様　長の道中ご苦労だ　無事に曳きつけ万万歳　ヨーイサ
6. 千秋楽でおめでとう　ヨーイサ

「花の都」とは、具体的にどこを示しているのか疑問が残る。しかし、仮説として、この後の曳行が「里曳き」と呼ばれるため、出発地点の「山」に対して、ざっくりと「里」を示すのではないかと考えられる。「千秋楽でおめでとう」は、建て御柱の直前、最終場面に唄われるものである。

4.　二之宮である小野神社木遣り(さくり)との比較

同じ諏訪系の神社ということで、小野神社の短い木遣りであるさくり（本報告書 41 ページ参照）と歌詞が共通するものが多いが、節の数や唄われ方は異なる。

小野神社	一節目(上の句)	二節目(上の句)	下の句
	山の神様	どうかご無事で	お願いだ
	氏子の皆様	力を合わせて	お願いだ
	うらからもとまで	力を合わせて	お願いだ
諏訪大社下社	一節(上の句)		下の句
	山の神様		お願いだ
	氏子の皆様		お願いだ
	もとからうらまで		お願いだ

上の表中では、小野神社の一節目の歌詞「山の神様」「氏子の皆様」が下社の上の句の歌詞と共通する。また、「うら(もと)からもと（うら）まで」は、両神社で歌詞の語順が異なるだけである。さらに小野・矢彦神社の木遣り(さくり)は二節目があるが（次章で言及）、下社の木遣りは二節目がない。そのため、下社は一節の中に力を込めて、力強く甲高く唄われるのが特徴である。

6 この木遣りの音源は CD トラック 4 に収録する。

第二節 唄われ方　担当者:吉野ひかる

本節では、木遣りを記譜によって視覚的な理解を試みた後、保存会の方が唄われた木遣りを、実際に聴いた中で考えられる唄い方の特徴を考察していく。

写真 3: 木遣り師の方々。2017 年 12 月 17 日 宮田紀英撮影

まず、木遣りを唄う際の姿勢をまとめる。木遣り師は御幣と呼ばれる、先端に木札や「かんなくず」とよばれる薄く削られた木屑などの装飾がなされた棒を左手で持ち、頭上にまっすぐと掲げる(写真参照)。また、松本の各社のように唄いながら御幣を回すなどの動作はしない。「お願いだ」の唄い方は保存会によって異なり、上社のように一人で続けて唄うところもあるが下社では全員で唄うようになっている。その際、全員が両手を上げることによってタイミングを合わせている。

続いて、神事と曳行の木遣りを譜面に表したうえでその特徴を検討していく。なお、記譜にあたっては、どちらも下諏訪町木遣保存会の方々が、過去の御柱祭の映像をスクリーンに流しつつ実演してくださったものを参考音源として使用している。また、実際の五線譜の音程は考慮していないため、音部記号(ト音記号など)は示していない。ここでは音の高低と長さのみに重点を置き、発音があるところを大きい丸、母音を伸ばしている間に明らかに音程の変化がみられるところを小さい丸で表記している。

◎曳行の木遣り

採録 : 田中　採譜:吉野

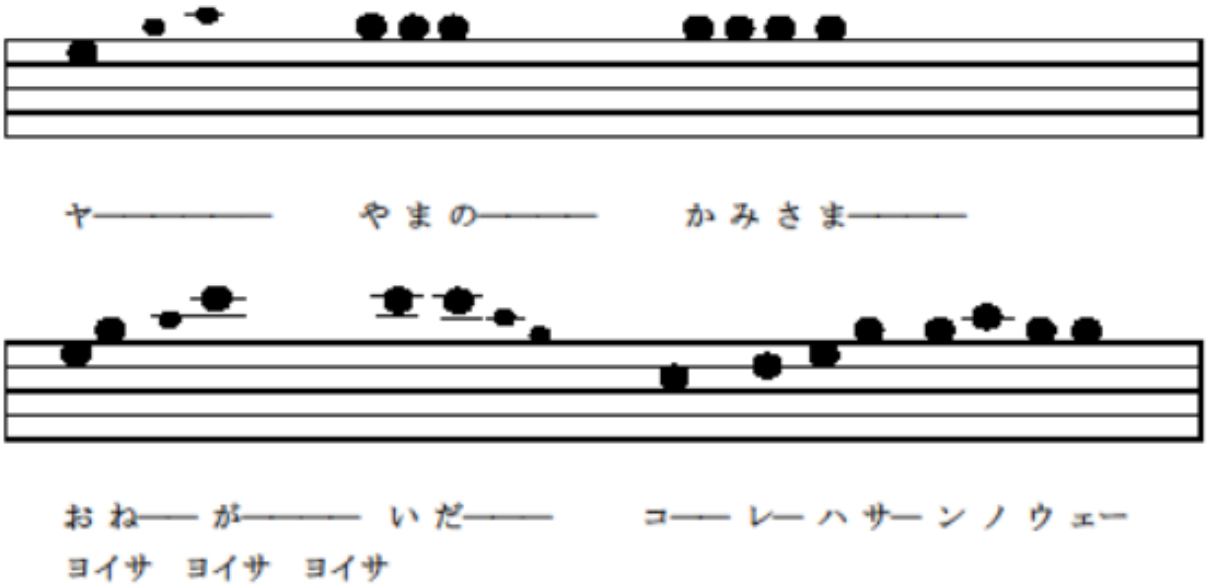
日時 : 2017 年 12 月 17 日　15 時 10 分ごろ

場所 : 御柱館よいさ

歌詞 : ヤー　山の神様お願いだ　コーレハサンノウェー　ヨイサ　ヨイサ　ヨイサ

備考 : 下諏訪町木遣保存会の小河原進氏(六十一歳、男性)による木遣り。三十五秒。この木遣りの音源は CD トラック 5 に収録する。

譜 2



まず音程に関して、曳行の木遣りは氏子たちの士気を上げ、タイミングを合わせるために天に抜けるような甲高い声で唄われる。全員で声をそろえる「お願いだ」の節回しは、ある程度統一されているものの、出せる音域には個人差があるため、各々が異なる音程で唄っていた。特に女性が唄うとなるとやはり男性よりも音程が明らかに高くなるため、音程の差がより明確に出ているように思われた音を丁寧にそろえるというよりは、やはり全員で神様に声を届けるという意識の方が強いように感じられた。

◎神事の木遣り

採録:田中　採譜:吉野

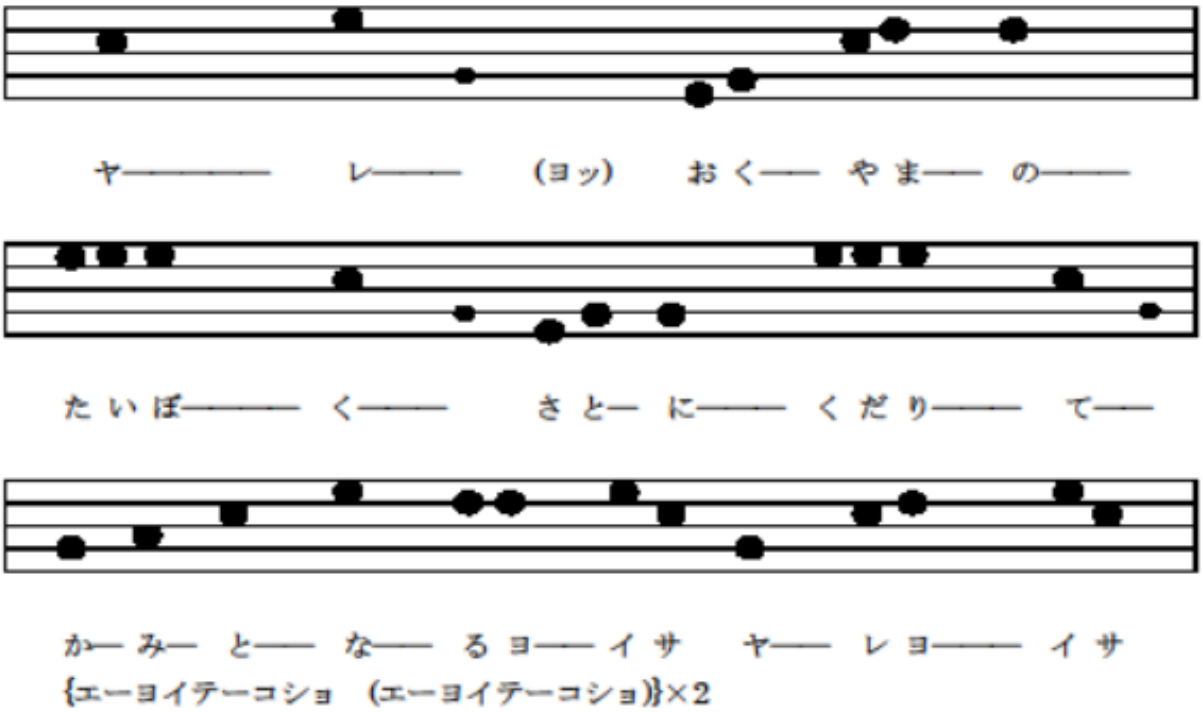
日時:2017 年 12 月 17 日　15 時ごろ

場所:御柱館よいさ

歌詞:ヤアーレエー　奥山の大木里に下りて神となるヨーイサ　ヤレヨーイサ　{エーヨイテーコショ(エーヨイテーコショ)}×2

備考:下諏訪町木遣保存会の宮坂明宏氏(五十四歳、男性)による木遣り。五十四秒。この木遣りの音源は CD トラック 6 に収録する。

譜 3



大きく天に抜けるような高い声という印象が強い諏訪の木遣りだが、下社の神事の木遣りは曳行の木遣りと比べると全体的に低い音程で唄われる。唄い終わりのかけ声の「エーヨイテーコショ」から両手を上げ始め、「コショ」の部分で少し上に突き出すような動作をする。これ以外にも様々な木遣り師の方々が唄われている音源を聴いたが、保存会の中では音だけで誰が唄っているかすぐわかるともおっしゃっていたように、節回しや音程にはかなり個人差があった。曳行の木遣りと比べると長い歌詞であるが、音の高低に関して「ヤアーレエー」「奥山の大木」「里に下りて」「神となる」…という分け方をすると、それぞれの出だしで低めに入り、フレーズの中間で最高音に到達した後、終着点としてまた音が下がるという山型のような形が繰り返されている。

第三章 木遣りに関わる人、物　担当：戸田伊城

私は今回の調査を通じて、様々な木遣りや、そこに関わる人々、物事が現在どのような状況にあるのかということを学んだ。中でも保存会の方々にお話を直接伺うことができたことは大変貴重な体験であり、保存会の方々が木遣りをどのように捉えているのか、どのような熱意で取り組んでいるのかということを詳しく知ることができた。この章では、その保存会の内の一つ、下諏訪町木遣保存会を中心に木遣りに関わる人や物の具体的な現状をまとめた。なおまとめにあたっては、2017 年 12 月 17 日に

行った諏訪大社下社訪問における保存会の方々へのインタビューや下諏訪町木遣保存会公式 HP、下諏訪町木遣保存会公式 Facebook を参考にした。

第一節　保存会

下諏訪町木遣保存会には現在会員が百八名おり、その内子どもが二十五名、女性は十名程度が所属している。女性が参加し始めたのは戦後で、1950(昭和 25)年の御柱祭以降である。また年齢層は、一番若い方で保育園、一番高齢な方は去年八十八歳というように、非常に幅広いものとなっている。一番の目的であり課題となっていることは木遣りの伝承保存であり、そのために様々な活動を行っている。以下、その主な活動を紹介する。

主な活動

1. 御柱祭で木遣りを唄う

「木遣りなくして御柱はなく、御柱なくして諏訪はなし、木遣りこそ御柱の華である」とも言われており、御柱祭において非常に重要な役割を担っている。甲高い声で一日中唄うため、それに耐えられるように、毎週日曜日の夜、春宮境内の神域を借りて練習を行っている。練習の際は歌詞カードのようなものは使用せず、繰り返し唄うことで歌詞を覚えている。

2. イベントへの参加

木遣りをより多くの方に知っていただけるように、下諏訪町木遣保存会では様々な活動を行っている。以下、下諏訪町木遣保存会公式 Facebook も参考にしながらその主な活動をまとめた[7]。

2016 年　軽井沢で行われた G7 のレセプション、植樹祭

2017 年　1 月 27 日　　『ながの銀嶺国体』の開会式

2017 年　10 月 14、15 日　　伊勢神宮神嘗祭

2018 年　8 月 1 日　　お舟祭り(予定)

毎年秋頃に行われる全国木遣りサミットの開催および参加

7　下諏訪町木遣保存会公式 Facebook(https://ja-jp.facebook.com/shimosuwakiyari/)、2018 年 1 月 31 日閲覧。

以上二つの事柄からわかったことは、「木遣り」に対して、木遣り師の方々が非常に強い熱意を持っているということである。まず私が驚いたことは、御柱祭が開催される年でなくとも、練習を毎週行っているということである。他の神社と比べても、このような頻度で練習を行っているところは少ないのではないだろうか。また、木遣りの伝承・保存のために、子どもや若者向けに様々な活動を行っているということが分かり、非常に感心した。

第二節　衣装と道具

木遣りを唄う際に身につける衣装についても神社ごとに様々であり、大変興味深いものである。下諏訪町木遣保存会では以下の服装を正装としている。[8]

白のハイネック、手甲、鉢巻き、腰帯、法被、腹掛、股引、草履、地下足袋、白手袋、御幣(おんべ)

写真 4: 2017 年 12 月 17 日おんばしら館よいさにて撮影

御幣(おんべ)は神主が持つ御幣(ごへい)の代わりとされており、お祭りやそれに付随する神事を神主の代わりに行う、という意味がある。また鉢巻きは神職の方が被る烏帽子の代わりとされており、そのため後ろではなく前で結んでいる。

これらの衣装はあくまで「作業着」として身につけている。

昭和初期にはワイシャツにネクタイ、法被に革靴を身につけることがお洒落とされており、衣装も時代ごとに変化してきている。

上に掲載した写真を見ると、大人だけでなく子ども用の衣装もしっかりと作られているということがわかる。また、2018 年 2 月 10 日に信州大学で行われた「木遣り」報告会においては、下諏訪町木遣保存会の方々が衣装を着て参加されており、あくまで「作業着」だとしながらもその衣装に誇りをもっているということがうかがえた。

---

8 下諏訪町木遣保存会公式 HP（http://www.kiyari-shimosuwa.com/costumeitem.html）、2018 年 1 月 31 日閲覧。

第三節　ラッパ隊について

御柱祭において木遣り師とともに重要な役割を担っているのがラッパ隊である。今回は 2016 年の御柱祭でラッパ隊長を務められた下諏訪町消防団の佐藤重正氏に連絡をとり、メールでのインタビューに協力していただいた。以下に記載するのは、その内容をまとめたものである。

1. 組織や日々の練習について

下諏訪町消防団ラッパ隊は、現在下諏訪町消防団の中にある七個の分団から選出された四十五名で構成されている。その分団の他にも、女性消防隊、音楽隊という組織が存在し、その中に所属する女性隊員も一部参加している。奥中は論文の中で、

> 諏訪地方では、富士見町の消防団では昭和 30 年に「ラッパ班長」が、諏訪市では昭和 29 年に本部役員としてのラッパ手が、昭和 32 年までに「ラッパ長」という役職が存在していたこと確認できる。[9]

としており、ラッパが古くから使われていたということがわかる。練習は月に三、四回のペースで行っており、その内容は消防団活動での号令伝達、士気高揚、広報活動に向けたものが主となっている。これらの練習は警備の傍ら行っているため、御柱祭に向けた練習をあまり多く行うことはできない。しかし、地区によっては半年以上前から練習を行っているところも存在する。また、長野県消防協会には『ラッパ教本』という楽譜集があり、それを基にして毎年行われるラッパ吹奏大会に向けての技術の向上を目標としている。御柱祭で演奏される曲は、その教本内の曲や、戦前から吹かれていた進軍ラッパ、各地区で独自に作曲した曲など様々である。また、柱ごとにもバリエーションが存在する。

2. 御柱祭でラッパ隊が果たす役割

佐藤氏によると、御柱祭におけるラッパ隊の最も重要な役割は、氏子たちを元気づけ、お祭りを盛り上げることにあるという。また奥中(2016)によると、そのような重要な役割を持つラッパ隊が御柱祭に参加し始めたのは 1932 年頃であり、ラッパが使われて始めてから既に百年近く経っていることになる。御柱祭本番では、下諏訪町消防団ラッパ隊の隊員が、基本的に曳行中にのみ演奏を行い、隊員以外の人がそこに参加するということはない。しかし、地域によっては女性や子どもなど多くの人が参加しているところも存在する。また、ラッパ以外にも打楽器が用いられる場合があり、特に長い曲になるとドラムマーチをいれる場合もある。地域によってはラッパを吹かずにホラ貝を吹くところも存在する。

---

9 奥中康人「長野県諏訪地方におけるラッパ文化の形成に関する研究」『静岡文化芸術大学研究紀要 17 巻』、2017 年、pp.65 - 86 。

以上のように、御柱祭においては木遣りと同様にラッパも非常に重要な役割を担っており、御柱祭とは切っても切り離せない関係にあるということがわかる。また、同報告会に参加していただいた佐藤氏は、「ラッパもしっかりと後世に残していけるように頑張りたい」というようなことを仰っており、木遣り師の方々の「木遣り」に対する向き合い方と同様に、「ラッパ」というものに対して誇りと熱意を持っているということがわかった。

おわりに　担当:戸田伊城

今回このような報告書を作成するにあたり、私たちは下諏訪町木遣保存会の方々からお話を伺うだけでなく、直接木遣りを聴かせていただく機会にも恵まれた。実際に聴いてみると、他社とは異なるその特徴的な「甲高い木遣り」に圧倒された。御柱祭という特別な環境の下で聴くと、また異なった感想を抱くのかもしれないと思った。また、保存会の方にお話を伺っていると、松本市内の神社だけでなく同じ諏訪大社である上社とも違いがあることがわかった。さらに、御柱祭以外にも様々なイベントに参加や、Facebook を使った情報の発信、そして子どもたちとともに次の御柱祭に向けて日々の練習に取り組むなど、保存会の方々の木遣りに対する熱意や、後世に残そうという意志の強さをうかがい知ることができた。

今回のこの報告書も、単なる研究・調査にとどまらず、木遣りをより多くの方に知っていただく一つのきっかけになれば良いと思った。

参考文献

上田正昭『図説　御柱祭』太洋社、1998 年、152～158 頁。

奥中康人「長野県諏訪地方におけるラッパ文化の形成に関する研究」『静岡文化芸術大学研究紀要 17 巻』、2017 年、pp.65 - 86 。

諏訪地方観光連盟　御柱祭観光情報センター「信州諏訪御柱祭」
<http://www.onbashira.jp/about/onbashira/>(2018 年 1 月 31 日閲覧)

ちのステーションホテル「天下の大祭…信濃国一之宮「諏訪大社」・御柱祭のご案内」
<http://www.cs-h.co.jp/mihasira.htm#top>(2018 年 1 月 31 日閲覧)

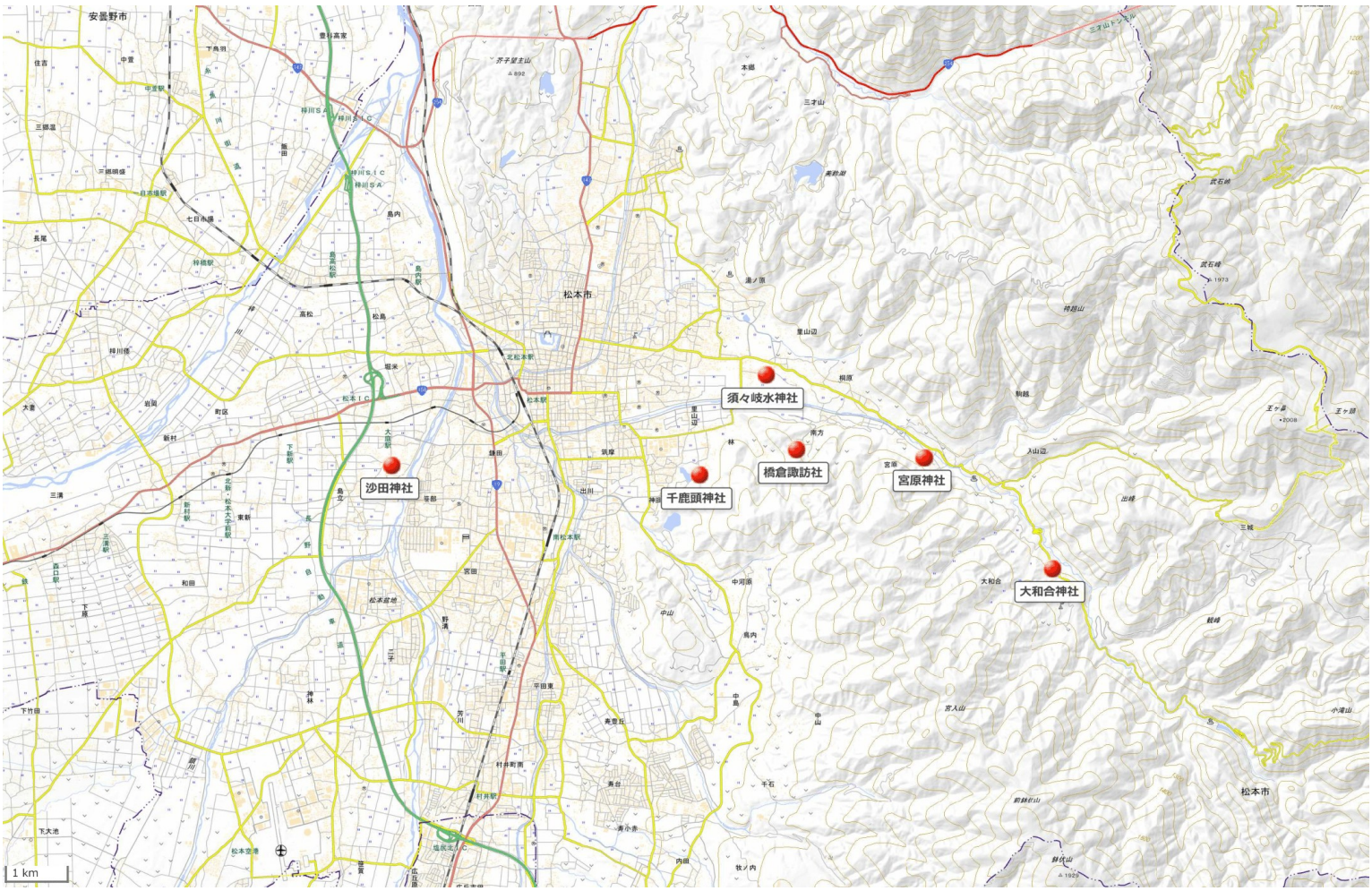
「下諏訪町木遣保存会公式 Facebook」
<https://ja-jp.facebook.com/shimosuwakiyari/>(2018 年 1 月 31 日閲覧)

「下諏訪町木遣保存会公式 HP」
<http://www.kiyari-shimosuwa.com/costumeitem.html>(2018 年 1 月 31 日閲覧)

写真 5: 下社を訪問した際の様子。2017 年 12 月 17 日

写真 6: 木落坂にて。2017 年 12 月 17 日

松本市内で御柱祭を行う神社の位置



国土地理院発行地図を使用して作成

記録と人口から見る神社と御柱

沢木幹栄

第一章　記録から見る神社と御柱

ここでは、松本地方の神社を中心に文献記録を探ってみたい。松本周辺の神社が最初に記録に現れるのは『日本三大実録』で、貞観九年（八六七）の条に信濃国の「梓水神」と「須々岐水神」が従五位下に官位が上げられたことが出ている。「梓水神」は『東筑摩郡松本市塩尻市誌第二巻』で沙田神社に比定されている。「須々岐水神」はもちろん今の須々岐水神社であろう。当時に神階が記録されるほどの規模であったことが窺える。

『日本三大実録』は清和、陽成、光孝の三代、三十年間の記録であり、たまたまその期間に神階の移動があったために上記の二社が記録されたが、ほかの神社はここに記録がないから二社より格が落ちるということにはならないことにも注意したい。

次に松本地方の神社の名前が出るのは『延喜式』（九二七年成立）の神名帳で、筑摩郡では岡田神社と阿礼神社と並んで沙田神社の名前がある。

江戸時代になると『信府統記』（一七二四年成立）に「薄宮大明神」と「千鹿頭大明神」それに「小野大明神」の来歴等がかなりのスペースを割いて述べられている。「薄宮大明神」は須々岐水神社であろう。

これによれば、千鹿頭大明神は昔は「大社」であったが、天正年間（一五七三～九二）に神殿が焼け、その後は「小社」となった。御柱の神事は昔から七年に一度、卯の年の四月卯酉の月（日の間違い？）に立てる。小笠原家の先祖が林城にいたときは「産神」（産土の神？）で、御柱は大神事として執り行った。寛永年間（一六二四～四四）松平直政が領主だったときまでは御柱料として三十石が寄附されたが、堀田政盛の代になってから五俵（一俵は地方・時代によって変動はあるが、一石の半分以下）ずつになったとある。

七年に一度であれば、卯の年だけでなく、酉の年も行うと言わなければならないのだが、酉の字が落ちているのは写し間違いだと思われる（原本は失われて写本だけが残っている）。現行と同じく卯の年、酉の年に行われていたことがこの記事から分かる。

また、「小笠原家の先祖が林城にいたときは御柱は大神事として執り行った」とあるので、小笠原氏が武田信玄によって林城を追われる天文十九年（一五五〇）以前から御柱が行われていたことが分かる。松本地方の御柱がいつから行われていたかについての貴重な証言である。

『信府統記』以後の資料では『伊那郡神社仏閣記』（一七四四年成立）がある。ここに小野神社矢彦神社についてかなり詳しく述べられている。これによれば、別当寺である神光寺のほか、社司である大祝（ほうり）部の小野氏、下級の神官である下禰宜が七軒、宮雀八乙女が八軒となっていて神官の組織が大がかりなものであることがわかる。『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』は「諏訪大社に匹敵する」としている。小野神社矢彦神社は千鹿頭神社に似てもともと一社であったが、ある時期に二社に分かれた経緯がある。ただ御柱は千鹿頭の場合と異なり、二社別々に（ただし同日に）行う。

『伊那郡神社仏閣記』では更に「小野大明神の御柱は筑摩郡畑村之御林より出る、矢彦大明神の御柱は横川入より出、上伊那高遠領より五百人出立渡す」とある。五百人が参加する御柱は現在より賑やかなものであったに違いない。諏訪大社以外の江戸時代の御柱についての貴重な証言である。

「神楽歌」が記載されている。

都まて聞へて久し小野の森
　　八彦の宮は飛よれの神
日は照ると笠着て参れ二の宮へ
　　小笹の霧は雨にまさると

これが、現代の小野神社・矢彦神社の「木遣り」と関係があるのか興味があるところである。

江戸後期には菅江真澄が一時期信濃に滞在して、沙田神社（「砂田神社」と表記）、須々岐水神社（「薄大明神」として『来目路（くめじ）の橋』で）、小野神社（『委寧能中路（いなのなかみち）』ただし、神社名はなし）についての記録を残している。そのうち沙田神社には一七八三年の神無月（十月、現行では沙田神社の御柱立ては九月に行われる）に御柱立てを見物に行き、かなり詳しい描写を『委寧能中路』に残している。里曳きについては記述がないし、また残念なことに木遣りについても全く触れていない。この時代に木遣りが唄われていなかったのか、唄われていたけれど菅江が興味を持たず記録しなかったのか、あるいはたまたま木遣りが唄われているところに居合わせなかったのかは不明である。

安政五年（一八五八）には『安曇筑摩両郡村々明細調書上帳』が編纂された。これは当時の村（現在の町会にほぼ当たる）の石高、人口、寺社名を記したものである。この中では須々岐水神社は薄大明神、沙田神社は砂田明神、千鹿頭神社は千鹿頭大明神、宮原神社は宮原大明神、橋倉諏訪神社は諏訪大明神、大和合神社は大和合大明神として名前が挙がっている。

明治大正の御柱についての記録は主に信濃毎日新聞で探索中であるが、活字になったものでは見つかっていない。信濃毎日新聞の見出し検索でたどれる最古の松本地方の御柱の記事は昭和七年四月五日のものである。短いので全文を引用する。

千鹿頭神社御柱山出し　昨日賑やかに

松本市外（はずれ）中山村千鹿頭神社の御柱山出しは快晴に恵まれた三日賑やかに挙行された。二本の御柱は神田、埴原、和泉各区の青壮年にひかれて早朝木遣音頭も勇ましく山を繰出し沿道は松本地方の見物人で埋まって午後4時無事に神田区の千鹿頭山麓にひきつけた。

これによれば、御柱は現在のように神田地区だけでなく、旧中山村全体の行事だったこと、木遣りのことを木遣音頭と言っていることが分かる。中山村の神田地区だけが昭和十八年に松本市に編入されたので、そのときから御柱を単独で行うことになったと思われる。（中山村の残りは昭和二九年に松本市に編入された）

また木遣りのことを木遣音頭と言っていることから、当時も現在と同じく書き下したときに何行にもわたるような長い曲であったことがわかる。

この年は申年だったが、山出しは酉年の御柱立ての前年だったことがわかる。現行では御柱立ては五月の連休中に行われるが、『信府統記』では四月とあり、戦前まではそうであったと考えられる。

過去の木遣りについて文献から分かることは今のところ多くない。しかし、昭和初期より前のことについてもし新たな事実が判明するとすれば、それは文献を通してであろう。今後も文献を探索する努力を継続したい。

第二章　氏子の人口から見る神社と御柱

松本地方の御柱を見ると、神社によってその規模が大きく異なる。それはおそらく氏子の人口と関係があるはずだ。そこで、各神社の柱ごとの氏子の人数を書き出してみた。材料として用いたデータは平成二年の松本市の町会の人口と平成一八年の塩尻市の町会の人口、平成二三年の辰野町小野地区の人口と安政五年の統計である『安曇筑摩両郡村々明細調書上帳』である。

松本市の統計で平成二年、塩尻市の統計で平成一八年、辰野町の統計で平成二三年のものがこれらの町市のサイトから得られる最も古いデータなのだが、これを使用するのは宅地化が進行するなか、時代が下るほど農村社会だったときの人口から乖離すると考えたからである。

以下に神社名、柱、現在の町会名、現代の人口、安政五年の人口の順で記す。

須々岐水神社

一位柱	薄町、下金井、荒町、西荒町、兎川寺	2909	754
二位柱	上金井、藤井、湯ノ原、新井	3150	1021

沙田神社

一位柱	三宮、中村	738	177
二位柱	永田、町区	568	368
三位柱	小柴、大庭	1072	388
四位柱	堀米、荒井	2648	659

宮原神社

一位～四位柱　宮原、舟付、駒越、千手、中村、寺所、竹ノ下、包石

621　652

橋倉諏訪神社

一位～二位柱	橋倉	148	201

千鹿頭神社

二位柱　三位柱	林	631	301
一位柱　四位柱	神田	1870	

（神田は松本藩領ではないので、安政のデータはない）

大和合神社
一位柱～二位柱　　1247　1012

小野神社
一位柱～四位柱　塩尻市北小野　　2153

矢彦神社
一位柱～四位柱　辰野町小野　　2284

北小野の人口は『安曇筑摩両郡村々明細調書上帳』には記載されていない。現在の辰野町の小野地区と塩尻側の北小野は人口がほぼ同じである。なお、小野と北小野は行政上の境界をはさんでいるが実際はこの境界は市街地の中を通っており、二つの地域は一体化している。小中学校も組合立（塩尻と辰野が共同で運営）で、同じ学校に通う。地域社会としては一つになっているようだ。

沙田神社の四位柱は曳き手の人数も多く派手であるように見えたが、江戸時代からこの柱は氏子が多かったのだ。沙田神社は木遣師が多い印象だったが、氏子の人口から考えると江戸時代からそうだった(江戸時代から木遣りが唄われていたとしての話だが)のかもしれない。

橋倉諏訪神社は御柱を維持するのに苦労しているようだが、ここは江戸時代から氏子が少なく、神社の建物もこぢんまりとしている。

このように江戸時代の人口を考え合わせることで、往時の御柱の規模も想像できるように思うがどうだろうか。

【参考文献】

『東筑摩郡松本市・塩尻市誌第二巻上』東筑摩郡松本市・塩尻市郷土資料編纂会、1973 年。

「信府統記」『新編信濃史料叢書第六巻』信濃史料刊行会、1973 年。

「委寧能中路」『新編信濃史料叢書第十巻』信濃史料刊行会、1974 年。

「来目路の橋」『新編信濃史料叢書第十巻』信濃史料刊行会、1974 年。

「伊那郡神社仏閣記」『新編信濃史料叢書第十四巻』信濃史料刊行会、1976 年。

「安曇筑摩両郡村々明細調書上帳」『新編信濃史料叢書第十四巻』信濃史料刊行会、1976 年。

笹本正治『すばらしい松本』信濃毎日新聞社、2001 年。

【参考 url とデータ】

松本市市政情報　地区町会別人口・世帯数＜http://www.city.matsumoto.nagano.jp/shisei/oshirase/toukei_jinkou_inf.html＞から 平成 2 年～9 年 chiku2.1.1_9.1.1.xls（2018 年 3 月 17 日閲覧）

塩尻市行政情報　統計　地区別・区別・年齢 5 歳別 1 歳別住民基本台帳人口＜https://www.city.shiojiri.lg.jp/gyosei/tokei/index.html＞ から jyuukijinkoH180401.xls（2018 年 3 月 17 日閲覧）

辰野町オープンデータ＜http://www.town.tatsuno.nagano.jp/opendata.html＞ から「人口・地区別推移」opendata_jinko.xls（2018 年 3 月 17 日閲覧）

小野神社・矢彦神社 木遣り考察

―歌詞・節回しを中心に―

船田紗希

宮田紀英

田中大暉

はじめに　担当:船田紗希

私たちは 2017 年 5 月 3 日、4 日に開催された小野おんばしら里曳祭に参加をした。私たちは矢彦神社を中心に見学を行い、2017 年 12 月 21 日には矢彦神社小野木遣保存会会長の青木一男さんに直接お話を伺い、資料の提供にもご協力いただいた。

松本市内の神社の木遣りや諏訪大社の木遣りについても勉強をするうちに、矢彦神社の木遣りが独特な節回しを持っていることが分かった。また木遣りの種類や、動作、おんべの呼び方など御柱祭全体から、矢彦神社の御柱祭は松本市内の神社と諏訪大社の御柱祭両方の要素を持っているように感じた。この章では矢彦神社小野木遣り保存会の木遣りを中心に考察を行う。まず小野・矢彦の御柱祭について概観し、歌詞・節回しの面から矢彦神社の木遣りの特徴を述べる。また松本市内の神社や、諏訪大社の木遣りとの比較も行う。

なお、今回の報告書作成にあたっては、小野神社の木遣りについてはあまり聴くことができなかったため、本章では矢彦神社の木遣りを中心に扱うことを付記する。

第一章　矢彦神社御柱祭について　担当:宮田紀英

第一節　矢彦神社について

矢彦神社は松本盆地と伊那谷の中間に位置する小野地域に位置している。小野一帯は古来より憑の里(たのめのさと)や小野郷と呼ばれているが、現在は二分され、北小野は塩尻市、南小野は上伊那郡辰野町に属している。これは 1590(天正 18)年に毛利氏と石川氏がこの地域を巡って争った名残であり、郡境が引かれた後も小野一帯の結びつきは強い。矢彦神社は辰野町に属するが、これは塩尻市内の飛び地(エクスクラーフェン)となっている。隣接する小野神社は塩尻市に属する。

写真 7: 矢彦神社幣拝殿　2018 年 2 月 2 日 撮影:宮田紀英

神社の成立は 6 世紀中頃といわれ、その後は盛衰を繰り返しながらも連綿とその歴史が紡がれてきた。中世社格制度では信濃國二之宮とされ、小野神社とともに諏訪大社に次いで有力な神社とされた。近代社格制度では諸社(府県社、郷社、村社)の中でもっとも格上の県社とされ、県から奉幣を受けた。

矢彦神社は主殿に主祭神の大国主命(おおくにぬしのみこと)と事代主命(ことしろぬしのみこと)、副殿に建御名方命(たけみなかたのみこと)と八坂刀賣命(やさかとめのみこと)を祀っている。大国主命は建御名方命の父、事代主命は建御名方命の兄であり、副殿の二神はそれぞれ諏訪大社上社と下社の主祭神である。建御名方命が諏訪に入ろうとした際、諏訪の土着神である洩矢神に阻まれ、その間に小野にとどまり治世にあたったという。ここからは諏訪信仰との深い結び付きが伺える。また南殿に天香語山命(あめのかごやまのみこと)と熟穂屋姫命(うましほやひめのみこと)、北殿に神倭磐余彦天皇(かむやまといわれひこのすめらみこと)と誉田別天皇(ほんだわけのすめらみこと)が祀られる。

写真 8: 矢彦神社の鳥居 (2017 年 5 月 3 日　撮影:船田)

第二節　2017 年矢彦神社御柱祭の日程

矢彦神社の御柱祭は前年の秋(地区によっては夏)に行われる注連掛け(しめかけ)祭から始まり、5 月上旬の建御柱まで続く。以下に、一之柱と四之柱を担当した小野地区の今回の御柱祭の日程を示す。

行事名	日付
本見立て・注連掛け祭[10]	10月30日
綱より[11]	11月6日
斧入れ祭[12]	11月27日
山出し[13]	3月5日
里曳き(さとびき)[14]	5月3～4日
建御柱[15]	5月5日

以下はグループで見学することのできた2017年5月3～5日の里曳きと建御柱の詳細な日程(パンフレットによる)である。

里曳き・建御柱の日程

	一之柱	二之柱	三之柱	四之柱
5月3日	(8:00～) 安置所→辻地蔵→上街道→ 第2安置所(～12:00)	(8:15～) 安置所【一里塚】→国道 →第2安置所【ファミリーマート】(～12:00)	(8:15～) 安置所→大踏切・国道 →第2安置所【積水プラ】(13:20～)	(9:00～) 安置所→辻地蔵→上街道→第2安置所(～12:00)
5月4日	(8:00～) 第2安置所→中学校入口 矢彦神社(～11:00)	(8:00～) 第2安置所【ファミリーマート】→小野駅 →矢彦神社 (～11:30)	(8:00～) 第2安置所【積水プラ】 →小野駅→矢彦神社 (～12:00)	(8:00～) 第2安置所→中学校入り口→矢彦神社(～12:30)
5月5日	(8:00～) 建御柱	(10:00～) 建御柱	(12:00～) 建御柱	(14:00～) 建御柱

曳行ルートの途中にはいくつか休憩スペースが設けられており、お酒やお菓子、食べ物などが無料で振る舞われていることもある。これは曳行に携わる人々のみならず観光等で訪れた外部の人々もいただくことができる。以下に5月4日の四之柱の曳行行程を掲載する(五分刻みの大まかな行程であり、必ずしも正確ではない)。木遣りについては後述する。

10本見立て・注連掛け祭:代表委員が予め下見して見当をつけた(見立てた)木を御柱委員が確認し、持ち主の許しを得て注連縄を張り神木とする儀式のこと

11 綱より:御柱毎に藁や玉縄を用いて縄を束ね太縄をよること

12 斧入れ:斧を神木に入れる行事。式後、木遣りが唄われ伐採すること

13 山出し:伐採された神木、すなわち御柱を里に設けられた安置所へ曳行すること

14 里曳き:安置所に置かれた御柱を神社の境内まで曳行すること

15 建御柱:御柱を境内の定められた場所へ建立すること

四之柱の曳行行程

行事	時刻	行程
曳行開始	8:00	(渋滞により見学できず)
木遣りと休憩、福まき	8:30～8:50	木遣り一回と子ども木遣り二回
子ども木遣りと休憩	9:20～9:30	テントでおつまみと酒等の飲み物が振る舞われる
子ども木遣りと休憩	9:45	子ども木遣り三回
境内南西角着、休憩	10:30～11:00	休憩後、方向転換
境内着	12:45	前の柱の到着が遅れ、一時間以上境内横にて待機

写真 9: 十字路を曲がる様子　(2017 年 5 月 4 日正午ごろ　撮影:宮田)

第三節　矢彦神社の御柱祭の特徴

御柱祭は正式には「式年造営御柱大祭(しきねんぞうえいみはしらたいさい)」と呼ばれる。すなわち、本来ならば神社内の各社殿を建て替えるところを御柱の建て替えで代えているのである。その起源は大海人皇子が天武天皇として即位した 673(白鳳 2)年とされている。式年造営の周期は数え年で七年に一度とされており、干支の酉年と卯年に祭りが催される(2017 年は酉年であった)。これらを踏まえると今回は第二百二十五回目の御柱祭である。

また、小野神社と同期日に行われるため、二つの神社の御柱祭を総称して「小野御柱祭」と呼ばれている。「人を見るなら諏訪御柱、綺羅(美しい衣装)を見るなら小野御柱」と呼ばれるように、外見の華やかさや飾りの鮮やかさが他の御柱祭と比較した際の特徴として挙げられる。

御柱は他の多くの神社と同様に四本であり、一、四之柱は小野地区、二之柱は飯沼地区、三之柱は雨沢地区がそれぞれ担当する。四本の柱ともモミの木を用いており、他の神社同様一之柱が五丈五尺(約十六.七メートル)と最も長く以下は五尺ずつ短くなる(五尺落ち)。なお、小野神社では全ての柱でマツの木を用いる。

その他、当日見ることのできた特徴的なものを二つ挙げる。三之柱を担当する雨沢地区には「友愛団」という青年団があり、団員は奇抜な化粧をした「雲助さん」として地区の行事に参加している。「雲助さん」は木遣りを唄ったり長持ちを持って「長持ち唄」や「甚句」を鳴きながら練り歩き、御柱祭に参加している。また、木遣りの後や曳行中にラッパを演奏するラッパ隊が全ての柱についている。その歴史については不明だが、曳行する人々の心を高ぶらせ鼓舞する目的があるとされる。このラッパ隊は辰野町消防団のラッパ班によって構成されている。2017 年においては第二十九回長野県消防ラッパ吹奏大会で準優勝を果たすなど、非常に高い評判を得ている。

写真 10: 鳥居の前で木遣りを唄う雲助(動画より）（2017 年 5 月 3 日 11 時 30 分　撮影:宮田）

第二章　木遣り・保存会についての概要　担当:宮田紀英・船田紗希

本章を執筆するにあたっては、先述の小野木遣保存会会長の青木一男さんから頂いた資料をもとにしている箇所が多々あるので、ここに記す。

まず、いただいた CD には「信濃国二之宮　木遣り唄 CD」という名称が付けられており、付録の紙には 2005 年に LCV によって制作された「憑の里木遣り唄」と 2011 年に制作された「休戸耕子供連用 CD」を元にしていると記されている。よって 2017 年に現地で唄われた最新の木遣りではないが、メロディや節回しの比較に適していると判断したため、これをもとにした考察も行う。便宜上この CD を以下の文中では『木遣り唄 CD』と称する。

いただいた歌詞集としては、『小野木遣保存会　木遣り唄集』が一冊、タイトルのついていないもの二冊の計三冊がある。これを参考にした考察もすることとする。便宜上この木遣り唄集を以下の文中では『歌詞集』と称する。

第一節　木遣りの動作　担当:船田紗希

木遣り師はさくりを唄う際、おんべを右手に掲げまっすぐ立って唄う。木遣りを唄う際には柱の上に乗る。最後に氏子たちのかけ声を誘う場面では、氏子をあおるように節に合わせて両腕を前に差し出す動作を三回行った。曳行開始の際には周りの氏子たちに呼びかけるように、周りを見回しながら唄っている場面も見受けられた。しかし松本市内の神社のように、おんべを回したり、足を踏みかえたりする大きな動作はなかった。氏子に呼びかける木遣り師に対して氏子は「ヨイテーコショ、ヨイショ、ヨイショ、ヨイショ」というかけ声を返す。その際にはかけ声に合わせ木遣り師と同じ動作を繰り返す。木遣り師、氏子ともに、どちらかと言えば諏訪大社の動作に近い。

甚句を唄う際にもおんべを右手に掲げ、柱の上に乗って唄う点は変わらない。しかし甚句の際にはおんべをゆっくりと左右に揺らして唄う姿が見られた。青木さんからお話を伺った際にも、現在保存会では甚句の際にはおんべを左右に揺らして唄うように教えているとのことだった。以前はもっと観客を魅せるような動きがあったという。甚句にのみ左右に揺らす動きが付くのは、松本市内の神社の踊りのような動作（采配を回しながら唄う動作）と関係があるのかもしれない。かけ声やおんべの扱い方など、上社の氏子である筆者にとっては馴染みのある光景で、御柱祭の雰囲気にもすぐ馴染むことができた。

第二節　木遣りの種類について　担当:宮田紀英

矢彦神社の木遣りは、その長さと役割によって二つに分類できる。「さくり」と「甚句」である。

「さくり」は三十秒程度の短い木遣りである。諏訪大社の神事の木遣りのように、神に捧げる木遣りであるというのはもちろん、ここでは氏子の士気を上げる目的も担っているのではないかと考えられる。里曳きでは曳行する準備が整った後で、木遣り師が柱の上に立ってさくりを唄い、最後のフレーズの後の「ヨイテコショ、ヨイショ！」で実際に御柱が動き出していたことから、ここでは氏子同士のリズムを整える目的もあると考えられる。

「甚句」は七五調のフレーズをつないで唄われる。矢彦神社の保存会では冒頭に「さてみなさまよどなたにも　不調法なる　わたくしが　一つお話いたします」のフレーズが必ず唄われる。休憩の際など、主に氏子の耳を楽しませる目的で唄われる。甚句を唄うことを甚句を「鳴く」というが、以後では便宜上「唄う」で統一する。

また、地区の子どもたちが唄う木遣りを「子ども木遣り」という。甚句とさくりの両方が唄われる。ほとんどの歌詞は通常の木遣りと共通だが、中には子ども木遣りに特徴的な歌詞もあり、「明神様の鶏は　親孝行と鳴きまする　親は大事だエンヤラサ」のような唄がある。

第三節　小野木遣保存会における木遣り

矢彦神社御柱祭では三つの木遣保存会がそれぞれで活動を行っている。一・四之柱では小野木遣保存会(小野地区)、二之柱では飯沼木遣保存会(飯沼地区)、三之柱では雨沢木遣保存会(雨沢地区)が木遣りを唄い継いでいる。同じ神社の木遣りではあるものの、それぞれの木遣保存会で歌詞や節回しが異なる。これについては次章以降で詳しく解説する。

前述の通り小野地区は一、四之柱の二柱の建立を担当する。『歌詞集』によると、注連掛けから建御柱まですべての行事で木遣りが唄われる。それぞれの行事に特徴的な木遣り唄の歌詞があり、特に山出しや里曳きでその数が多い。以下に、『歌詞集』に掲載されていた各行事に特徴的な唄の数を示す

表：『歌詞集』より、各行事に特徴的な唄の数

行事	唄の数
綱より	四(甚句二,さくり二)
注連掛	七(甚句四,さくり三)
斧入れ	八(甚句四,さくり四)
山出し	十二(甚句八,さくり四)
里曳き	十三(甚句九,さくり四)
建御柱	四(甚句四)
全祭(全ての行事で唄われうるもの)	二十四(甚句十六,さくり八)

『歌詞集』によると、甚句の中にも複数の木遣りの種類がみられる。以下にその詳細を示す。なお、この分類は他の保存会にも共通しているようである。

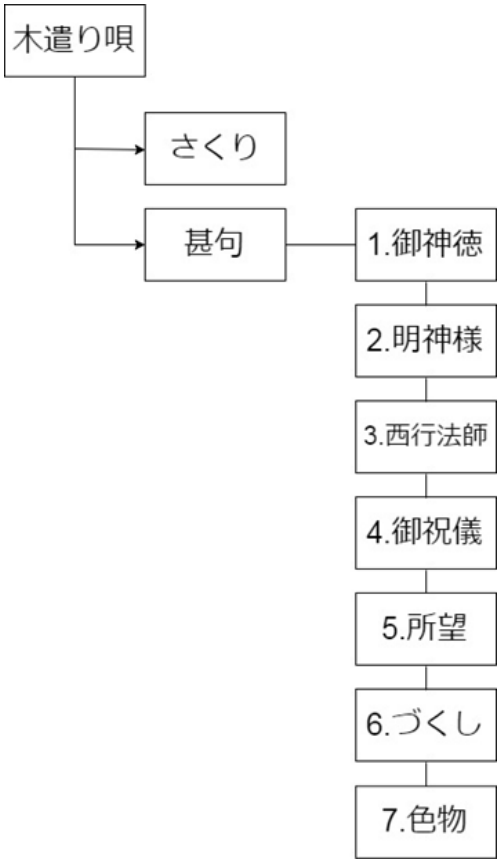


図 1: 矢彦神社の木遣り分類表(『小野木遣保存会　木遣り唄集』をもとに筆者作成)

1.**御神徳**（神歌木遣り):

多くの木遣りがこの神歌木遣りに分類される。歌詞の内容は柱についてや御柱の祭についての唄、小野・矢彦の風土や神社の様子を唄ったものがある。

2.**明神様**(皓告(こうこく)口説木遣り):

明神様のことを唄いこんだ木遣り唄。

3.**西行法師**(どうつき木遣り):

西行法師のことを唄いこんだ木遣り唄。名古屋甚句が由来か(後述)。

4.**御祝儀**(洒落口説木遣り):

詳細は不明。

5.**所望**(小唄口説木遣り):

「所望、所望(しょもしょも)」と子どもたちが木遣り師に唄をリクエストした際、それに応えるために唄われる木遣り。

6.**づくし**(づくし木遣り):

「焼物尽くし」や「郷土の名物尽くし」など、ある共通点を持ったものを並べ立てて歌にした木遣り。御柱祭のことや郷土について唄われることが多い。

7.**色物**(ばれ口説):

色ごとに関する唄と推測できる。『歌詞集』に収録された数が少なく、詳細は不明。

以下では実際に見学した里曳きについて記述する。里曳きでは他の行事と同じく休憩の間に木遣り師が一人ずつ御柱の上に立って木遣りを唄う。子どもが一人で御柱の上に立って唄う場面も見られたが、これは例外的であるとみられ、通常の子ども木遣りでは休憩中に子どもたちが道路脇などに整列して唄っていた。これは大人の指示、時には指揮のような合図のもとに行われ、連続で数曲唄われることもあった。鋭角の交差点など難所ではさくりが盛んに唄われ、また四之柱に於いては三之柱が境内へ入るのを待っている間に木遣りを唄う木遣り師が多く見られた。

写真 11: 柱の上で木遣りを唄う木遣師(動画より) (2017 年 5 月 4 日 8 時頃　撮影:宮田)

写真 12: 子ども木遣り(動画より) (2017 年 5 月 4 日 8 時 40 分　撮影:宮田)

第三章　木遣りの歌詞　担当:宮田紀英

第一節　小野木遣保存会(小野地区)の木遣りの歌詞

筆者が現地で聴くことができた木遣りのうち採集できたものをいくつか取り上げ、歌詞の特徴を考察したい(第一章の簡易日程表も参照いただきたい)。

歌詞 1: 8:30 の休憩中に聴かれた木遣り(甚句,御神徳) ※前半記録できず

・・・二之宮の
憑の森にお輿入れ
エー　氏子繁盛だ　エンヤンサー

歌詞 2: 同じく 8:30 の休憩中に子どもよって唄われた木遣り(小野,さくり)

エー　氏子のみなさま　力を合わせて　お願いだ

歌詞 3: 9:45 に唄われた子ども木遣り(甚句,明神様)

さて皆様よ　どなたにも
不調法なる私が　一つお話致します
明神様の鶏は　親孝行と　鳴きまする
親は　大事だ　お願いだ

歌詞 4: 9:45 に唄われた子ども木遣り(さくり)

エー　山の神様　どうかご無事で　お願いだ

歌詞 5: 境内横で待機中に唄われた木遣り(甚句,小野づくし)　※前半記録できず

・・・の色は移れども
出る国の有名人
妹子も小町も道風も
エェー 小野は繁盛だ　エーィヤーサー

以上に示した歌詞 1 から歌詞 5 のうち、歌詞 2 と歌詞 4 がさくりである。歌詞 2 はこのとき子ども一人によって唄われていたが、ここに限らず多くの場面で大人たちによっても唄われており、休憩終わりや境内南西の十字路などいわゆる難所でも披露されていた。歌詞の通り、氏子へ協力を呼びかける木遣りである。歌詞 4 は子ども木遣りで唄われたもので、子ども木遣り衆が整列したところへ大人から「山の神様」と声がかかると、全員がそれを承知して唄い始めた。里曳きの他の場面ではこの唄は聴かれなかった。『歌詞集』に掲載されている木遣りにはこの「山の神様」について触れられているものが複数ある。その一つをここに引用する。

歌詞 6: 注連掛の木遣り（甚句,御神徳）

矢彦の一の(四の)御柱の

今日はめでたい注連掛けで

駒沢山の神様の

ご加護をお願いいたします

エー 山の神様 お願いだー

歌詞 6 より、小野地区で唄われている「山の神様」は駒沢山の神であることがわかる。駒沢山は JR 小野駅から西に約四キロの地点にある標高一二九八．三メートルの山で、一、四之柱の御柱はいずれもこの山の山腹から切り出している。なお、これが矢彦神社のご神体であるというような旨の文献にあたることはできなかった。

歌詞 1 は甚句のうち御神徳であるが、『歌詞集』ではこれと一致する木遣りを見つけることができなかった。「憑の森」というのは矢彦神社の境内のことを指すと考えられる。小野・矢彦神社の境内にまたがる社叢(しゃそう、鎮守の森)は 1960 年 2 月 11 日に長野県天然記念物に指定された約三十六平方メートルに及ぶ広大な天然林かつ混交林で、約二百五十種に及ぶ豊富な針葉樹、広葉樹の大木が茂っている。「お輿入れ」という表現からは御柱が矢彦神社に嫁入りするという構図が浮かび上がる。『歌詞集』にはこれを裏付けるような山出しの唄が掲載されている。

歌詞 7: 山出しの木遣り(甚句,御神徳)

御柱様の申すには
駒沢山にて百余年
長らくお世話になりました
今日の良き日に山を出て
休戸の地にて一休み
お名残惜しくはありますが
矢彦様が恋しくて
信州信濃の新蕎麦も
わたしゃ貴方の傍がいい
山の神様さようなら
憑の森まで連れてって
エー 氏子の皆様 お願いだー

歌詞 7 の歌詞中、「休戸の地」は山出しを終えて里曳きを待つ安置所の地名である。新蕎麦は晩秋の季語であり、3 月に行われる山出しの木遣りで唄われるのは興味深いが、ここでは語呂と韻が重視されているとも見られる。また矢彦様が「貴方」と称されている点、自らを「わたし」と称していることから、御柱が女性であると考えられる。

歌詞 3 は明神様の木遣りで、『歌詞集』には掲載されておらず、『木遣り唄 CD』に収録されている。にわとりが歌詞に出てくるのは酉年であることと関連しているとみられる(兎年に関連付けられたとみられる「因幡の白うさぎ」の木遣り唄も『歌詞集』に収録されている)。親孝行を奨励する教育的な木遣りで、比較的新しい歌詞ではないかと思われる。

歌詞 5 は小野づくしの木遣りで、小野姓を持つ歴史的人物が三人取り上げられている。『歌詞集』には全く同じ木遣りこそ掲載されていないが、類似のものが確認できた。当日の木遣り師は歌詞カードのようなものを持ちながら唄っていた。

第二節　他二保存会との比較

『木遣り唄 CD』には三種の二之柱の木遣りが収録されていた。なお、聴き取りが困難な箇所に関しては黒丸(＝●)で示している。

歌詞 8: 山出しの木遣り（飯沼,甚句,御神徳）

この御柱(みはしら)の申するに　私の名前はモミという
昭和の初めに生を受け　天下じゃ名高い飯沼の
梨ノ木沢にて　育てられ
昨年十月十日にゃ　矢彦の宮に見初められ
田中さんのご寄進で
十一月吉日　この家で
伊那谷一の杣(そま)さんや
氏子や杣衆で化粧して
さても見事な御柱に　知らねて一月山出しにゃ
長者の●●●●　あとにして
エイトコラサで　曳き出せば
遥かに見える蓼科が　富士にも勝る姿見せ
二日三日の山出しにゃ　飯沼谷をば縦断し
所々でお神酒(おみき)を　頂戴し
氏子やお客に守られて
私の●●●●　●●●●に
無事に　到着致されど
後は里曳き待つばかり
どうか五月の連休にゃ
都合をさしくれおいでやす
アー　頼みまするよ　エンヤンサー

歌詞 9: 木遣り（飯沼,甚句,西行法師）

昔々のその昔
西行法師の坊さんが
初めて都に上るとき
熱田の森にて腰を掛け
これほど涼しき森はなし
これほど涼しき森に矢を
エー　誰が熱田とつけましたか　エンヤンサー

歌詞 10: 木遣り（さくり）

アー どうか一重の お願いだ

歌詞 8 は歌詞 7 と同じく、御柱の言葉であり、山出しを終え安置所に置かれたときに唄われるものだと考えられる。多くの固有名詞が登場するが、自らの地区「飯沼」の名を取り入れていることは注目に値する。これを聴いただけで二之柱であるとわかる上、自分の地区への誇りを感じられるからである。杣(そま)とは木を育てて伐採するところやその木、またはそこで伐採を行う者のことを指すが、ここでは後者の意味で使われており、氏子とほぼ同義であると見られる。五分を超える長い音源であるが、歌詞上に小野地区との際立った差異は見られない。最後のかけ声がエーでなくアーであることは書き留めておく。これは歌詞 10 の冒頭でも同様である。歌詞 10 のさくりで最も特徴的なのは一段で唄われることである。これは雨沢地区にも共通する。

歌詞 9 は西行法師の木遣りで、名古屋甚句のある歌詞が起源だと思われる。熱田神宮 HP の「二十五丁橋」より歌詞を引用する。

> 「ア～　宮の熱田の二十五丁橋で　エ～　ア～　西行法師が腰をかけ　東西南北見渡して　これほど涼しい
> この宮を　たれが熱田と　ヨ～　ホ　ホ　ア～アア　名をつけたエ～トコドッコイ　ドッコイショ」[16]

また、雨沢、小野の各地区では以下のように唄われる。

歌詞 11: 木遣り（雨沢,甚句,西行法師）

昔々のその昔
西行法師の坊さんが
初めて都に上るとき
熱田の森にて腰を掛け
こんな涼しい森はない
エー　誰が熱田とつけましたか　エンヤンセー

16「二十五丁橋（にじゅうごちょうばし）｜初えびす 七五三 お宮参り お祓い 名古屋 ｜ 熱田神宮」< https://www.atsutajingu.or.jp/jingu/about/keidai/31.html >（2018 年 3 月 17 日閲覧）

歌詞 12: 木遣り（小野,甚句,西行法師）

西行法師の坊さんが

初めて都に上るとき

熱田の森にて　腰を掛け

こんな涼しき森はない

エー　誰が熱田と名をつけましたか　エンヤンサー

短い唄ではあるものの各地区により違いが見られる。二つの柱で共通の歌詞が見られるものが多いことから、もともとは同じ歌詞だったと推測されるが、これは検証を要する。そもそも、一見矢彦神社に関連のなさそうな西行法師の木遣りがどうしてここで披露されているのか、その起源についての詳細は全く見られない。

最後に『木遣り唄 CD』に収録されていた雨沢地区のさくりを二つ掲載する。

歌詞 13: 木遣り（雨沢,さくり）

エー　元綱ウナウナ（浦々とも聴き取れる）　お願いだ

歌詞 14: 木遣り（雨沢,さくり）

エー 力を合わせて お願いだ

また、氏子のかけ声がそれぞれの地区で異なるので、表に示す。なお、これらは CD の音源と現地で採集した音源両方による。

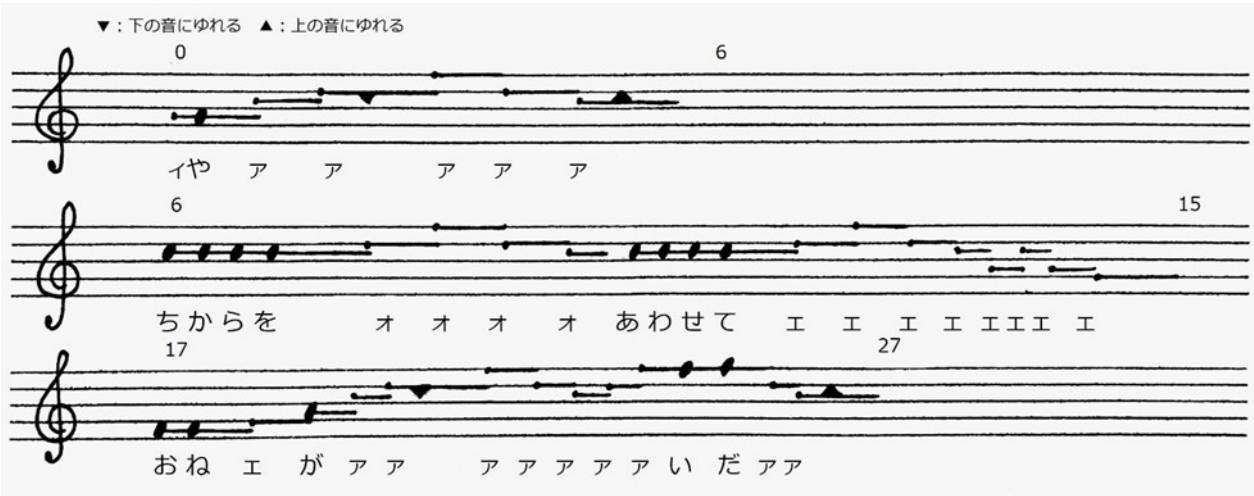
	小野地区	飯沼地区	雨沢地区
さくりのフレーズ間のかけ声	なし	なし	あり（ハイ！）
氏子が唄に合流するタイミング	エーの途中や最後のフレーズ(エンヤンサー,お願いだ)	最後のフレーズ	唄の途中では合流しない
かけ声	ヨイテコショ、ヨイショ、ヨイショ、ヨイショ	アーヨイテコショ、ヨイショ	ヨイテコショ、ヨイショ、

第四章　木遣りの節回し…矢彦神社と他神社の木遣り 担当:船田紗希・田中大暉

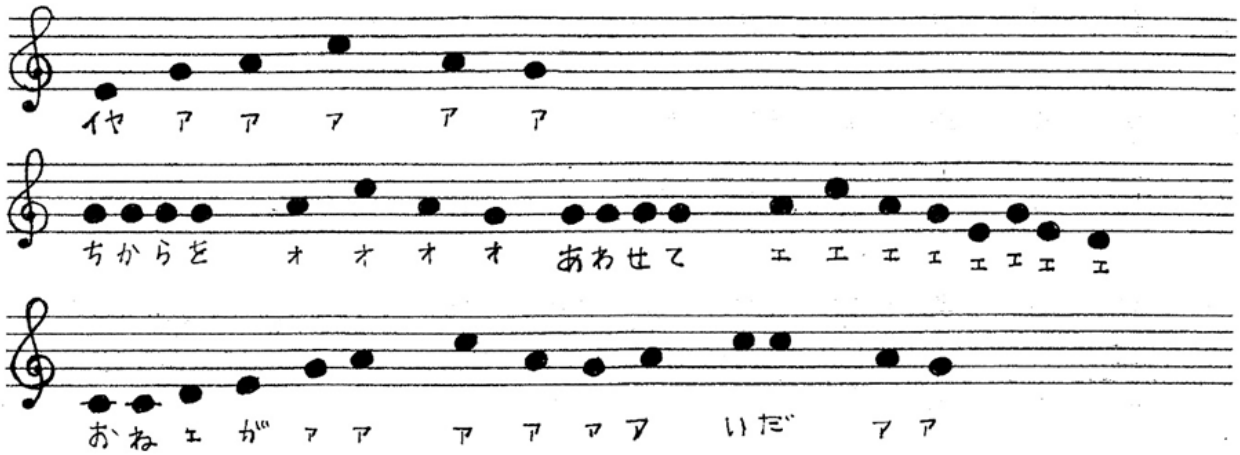
第一節　さくり…矢彦神社と諏訪大社　担当:船田紗希

本節では諏訪大社の木遣りと矢彦神社小野地区の「さくり」を比較する。上社のほうがフレーズがはっきりしていることから、比較に当たって上社の木遣りを選択した。諏訪大社上社の木遣りについては詳しくは 7 ページを参照していただきたい。また、上社の木遣りは付録 CD のトラック No.1、No.2、No.3 に、矢彦神社の「さくり」はトラック No.7 に収録されている。聞き比べながら本章を読んでいただければと思う。

譜 4: 諏訪大社上社　女性の木遣り



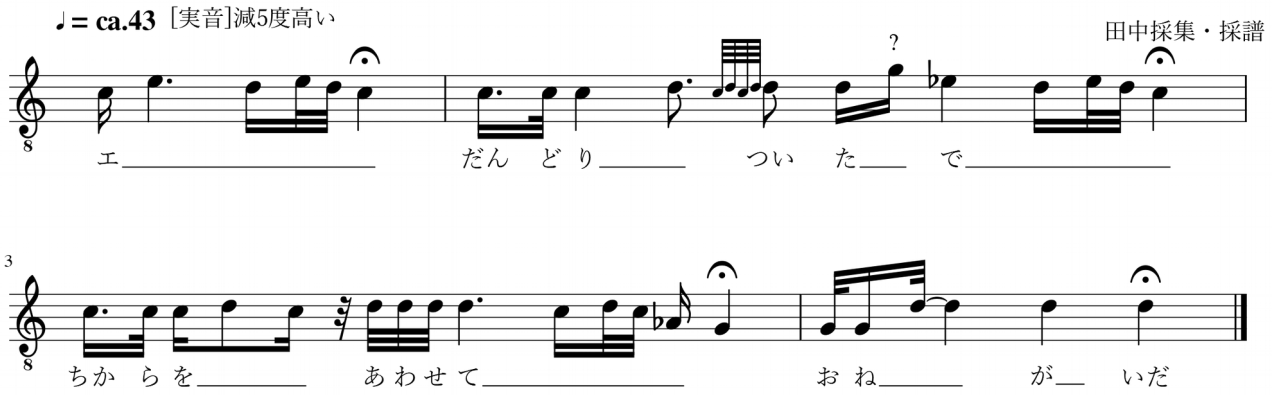
譜 5: 諏訪大社上社　譜 1 の旋律を男性が唄ったもの



上社の木遣りは二十〜三十秒ほどの短いものだ。上社の調査報告書によると、女性においては特に「ラ」の音から唄い始めることが多く(譜４参照)、男性の木遣り師は「ミ」もしくは「ファ♯」の音から始める人が多いという。「ミ」から唄い始めた場合、最低音は「ド」となり、最高音はオクターブ上の「ド」になる。譜５は筆者が譜４の木遣りを男性が唄った場合の音階に書き直したものだが、こちらを参照していただきたい。

最後のフレーズには、最低音と最高音の両方が含まれており、最低音から最高音へと音が上がっていく構成になっている。ここが一番盛り上がるフレーズでもあり、このあとには、氏子たちがかけ声をかけたりラッパが入ったりする。

譜 6: 矢彦神社さくり(採集・採譜:田中)



唄い手：木遣り師 鷲津清人さん

矢彦神社のさくりも上社の木遣りと同じで、二十〜三十秒の長さだ。諏訪大社との違いの一つとして、矢彦神社の木遣りは歌詞がワンフレーズ分多いことが挙げられる。このことは、小野木遣り保存会会長の青木さんによれば、「二段に鳴く」というそうだ。諏訪大社は一段に鳴いているということになる。小野・矢彦神社内でも一段か二段かは地区によって違いがあり、小野神社の保存会、矢彦神社飯沼地区、雨沢地区の保存会では、諏訪大社と同じように一段に鳴く。

この楽譜では、上社の木遣りの最低音である「ド」から唄い始めている。低めの音程で唄われるという点は、松本市内の神社と共通している。矢彦神社の木遣りでもやはり一番の盛り上がりは、最後のフレーズである。その後には「ヨイテーコショ、ヨイショ、ヨイショ(ヨイサ、ヨイサと言っている人もいるように聞こえた)」という氏子のかけ声が入る。

矢彦神社の木遣りの最大の特徴は最後の部分で、陽旋法から陰旋法に転じることだ。筆者が聴いた印象では、陽旋法には明るい印象を、陰旋法には暗い印象を受ける。

上の楽譜で言えば、冒頭の「エー」ではド・レ・ミの三音によって唄われているのに対し、「だんどりついたで」からは、ド・レ・ミ♭を中心に唄われる。ミを短二度下げて唄うという、いわば「転調」をすることによって、独特な奥の深さや味を感じさせる。この箇所に陰旋法の印象を強く受ける

のは、それまでミ♮で唄われていた音程がミ♭に転じることにより、レ・ミ♭間に短二度音程を生じるためである。

「力をあわせて」と唄う箇所においても、同様にラ♭の音程で唄われることにより、ソ・ラ♭間に短二度音程を生じ、陰旋法を強く印象づける。このような短二度音程の多用は、矢彦神社の木遣りに極めて特徴的なものである。

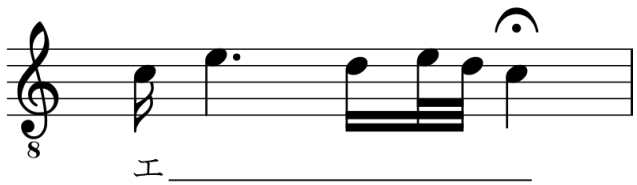
また最後の「お願いだ」という歌詞の部分だが、楽譜の木遣りでは唄い手だった木遣り師のみが唄っていたのに対し、他の場面では氏子が一緒に唄っていることもあった。石川（2015）によれば、諏訪大社では神事の際に歌われる木遣りは一人で唄われるが、曳行の木遣りの場合には全員で唄われるという。矢彦神社内でその間にどういった差異があるのかはわからない。曳行前の緊張した場面でなく、休憩の間など一緒に唄う余裕がある時には一緒に唄っているというような印象を受けた。

諏訪大社と矢彦神社の木遣りを概観したが、諏訪大社の木遣りと矢彦神社のさくりの節回しには一定の共通点があるように思う。楽譜をもとにそれぞれのフレーズに注目して比較していきたい。

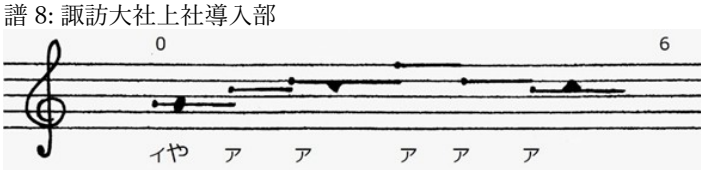
まずそれぞれの神社の木遣りの使用音を確認する。諏訪大社上社は最高音と最低音の差が八度あり、矢彦神社は七度ある。最低音と最高音の差はどちらもほぼ同じだが、音域は諏訪大社のものの方が高い。

田中の卒業論文（2017）を参考にし、それぞれ、「イヤー」、「エー」の部分を導入部とし、「力を合わせて」「段取りついたで」を上の句一段目とする。諏訪大社のものにはないが、「ちからをあわせて」を上の句二段目とし、それぞれの「おねがいだ」を下の句と分類して、分析を行いたい。

譜 7 矢彦神社導入部



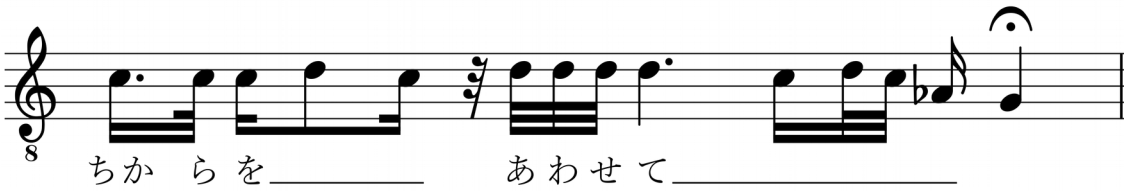
譜 8: 諏訪大社上社導入部



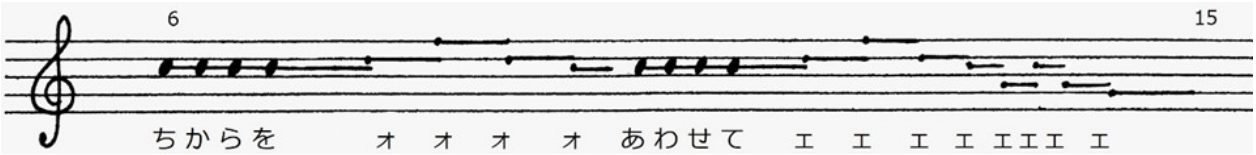
導入部ではそれぞれかけ声のようなものが唄われる。矢彦神社のかけ声が「ミ」から一度下がり再びミへと上がってから、三度下がるのに対し、諏訪大社は途中で音が下がることなく最高音まで上がり、最後はドまで下がってフレーズが終わる。

・上の句

譜 9: 矢彦神社上の句二段目



譜 10: 諏訪大社 上社 上の句



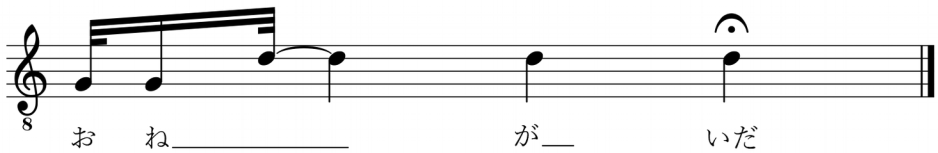
下の句に向けて盛り上がるフレーズであるため、矢彦上の句二段目（譜 9）を諏訪大社上の句一段目（譜 10）と比較したい。

「ちからを」の部分では矢彦神社は、「を」の部分で二度上がり元の音程に戻る。諏訪大社も同じく「を」の部分で音が変わるが、初めの音から四度上の最高音まで上がり元の音程へと戻る。いったん音が上がってから下がる点は共通している。

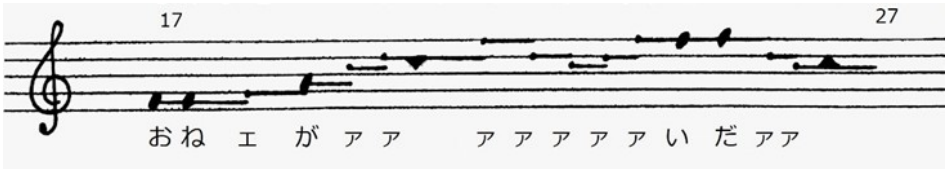
「あわせて」の部分では、矢彦神社は節回しが陰旋法（ラ♭・後述）となっている。諏訪大社のこのフレーズは音程が非常に細かく変わり、最高音ファへ上がった後七度下のソへと下行する。この部分は、最後のフレーズに向けて音程が大きく下がるという点が共通している。また、ドから唄い始め、ソで唄い終えるという点も共通であり、類似した旋律であることがわかる。

・下の句

譜 11: 矢彦神社下の句



譜 12: 諏訪大社上社下の句



また、最終フレーズ「お願いだ」だが、どちらもワンフレーズ内で大きな上行を見せる（譜 11）。矢彦神社 下の句では「おね」の部分で一気に跳躍する。諏訪大社上社下の句でも、最高音へと上行する点は同様だが、矢彦のものと比べると装飾的であり、徐々に上がっていく（譜 12）。矢彦神社の旋律はソ-レの五度音程であるが、諏訪大社上社のものにおいても、唄い始めの音程と唄い終わりの音程を見ると、ファ-ドの五度音程を核としている。これを踏まえるに、矢彦神社の下の句の五度跳躍は、諏訪大社の下の句の旋律の簡略版といえるのではないだろうか。

また、諏訪大社の木遣りは高い声で唄われ、張り詰めた緊張感が漂っているように感じる。また、装飾が多く、繊細なものである。楽譜を見てもらえばわかる通り、音程が非常に細かく変わる。実際の唄には楽譜に起こしきれない細かい節回しが存在し、情報量がとても多い。より「ため」を使いながら唄っているような印象を受けた。

それに対して矢彦神社の木遣りは低い音域で唄われ、安定感を感じさせる。諏訪の張り詰めた感じに比べると、ゆったりとした空気が感じられる。また諏訪大社は音が変わる回数が多いのに対し、矢彦神社は装飾が少ない。そのため繊細さというよりは真っ直ぐな力強さと安定感を感じさせる。矢彦神社の方が歌詞をワンフレーズ多く唄っているにもかかわらず、木遣り全体の長さは同じなのは、音が変わる回数が矢彦の方が少なく唄いやすいからだと考えられる。

諏訪大社の木遣りは非常に高い音で唄われるうえ音程が細かく変わり、習得もひときわ難しい。木遣り師の専門性が高いと言えるだろう。また、高い音によりパッと聞いた時に何と唄っているのか聴き取れない場合がある。諏訪大社の木遣りにはある意味でのアクセスのしづらさが存在している。普通の人が簡単に習得できなかったり、聞き取るのに少し時間がかかったり、アクセスしづらいという特徴は木遣りの儀式的な性格を他の神社と比較してより強めているように思う。

矢彦神社の木遣りは低い音程で唄われ、歌詞が比較的聴き取りやすい。本格的な木遣り唄の習得に時間がかかることは承知しているが、諏訪大社の木遣りに比べると節回しも覚えやすい。何度か聞くと口ずさむことができるようになる。諏訪大社の木遣りがよりかけ声に近いのに対し、矢彦神社のさくりは一般的な「歌」に近い印象がある。音程も出しやすい低めの音で、上手い下手は別として声に出して歌うこと自体に難しさは覚えない。そしてそのアクセスのしやすさ、距離の近さには親しみがわくように思う。

それぞれに違う個性があるのはとても興味深く、面白いことだと感じる。

第二節　甚句…矢彦神社と松本市内の神社　担当:田中大暉

甚句

諏訪大社の木遣りと「さくり」の類似については、前節において述べた。本節では、矢彦神社において聞かれたもう一つの木遣りである「甚句」を考察した。

その結果、「さくり」が諏訪大社の木遣りと類似していることとは対象的に、「甚句」は沙田神社や橋倉諏訪社など、松本城近辺の神社の木遣りとの類似点が多いことに気がつく。

本節では、典型的な甚句の例として、矢彦神社一之御柱の六十歳ほどの木遣り師の方が唄われた甚句を典型として考察する。下に引用するのは、2017 年 5 月 3 日御柱里曳き祭において唄われたものである。歌詞は以下の通りで、考察の便宜のため、横に行数を示した。採譜例は譜 13 として記載している。また、この木遣りは付録 CD トラック No. 8 に収録している。

---

①さて皆様よどなたにも

②不調法なるわたくしが

③ひとつお話いたします

④青垣巡らす小野矢彦

⑤信濃の国は二之宮で

⑥幾千万年神さみし

⑦ソホウ榊のご神木

⑧東に真向かう大鳥居

⑨千古の池には鶴が舞い

⑩万古の池には亀潜む

⑪七年ごとに巡りくる

⑫式年祭の祭礼は

⑬国の鎮めの基（もとい）なり

⑭白鳳二年の天武朝

⑮数えて今年の酉年は

⑯二百と二十と五回目で

⑰四本の御柱曳き建てて

⑱エー　守らせ給えや　エンヤラサ

譜 13

♩= ca.47

田中採集・採譜

さて みな さま_ よ_____ どな_た___に も ぶちょう___ ほう_な__る_ わた_く__し___が
(合いの手：オイ) (オイ)

ひとつ_____おは_ な_し___ いた_ し__ま す あおがき____ めぐ_ ら_す_ おの_ や_ひ___こ
(オイ) (オイ)

しなのの くに は_ にの_ み__や で いくせ_ ん__ まん_ ね_ん_ かみ_ さ み____し
(オイ) (オイ)

ソホウ____さか_ きの____ ごし_ ん ぼ く ひがしに____ まむ_ かう_ おお_ と り__い
(オイ) (オイ

せんこの いけ_ には___ つる_ が__ま い まんこ の__ いけ_に___は_ かめ_ ひそ____む
(オイ) (オイ

ななねん____ごと_ に_____ めぐ_ り__き た しきねん____ さい_の_____ さい_れい____は
(オイ) (オイ

くにの____ しづ_めの___ もと_ い__なり はくほう____ にね_ん___の_ てん_むちょ___う
(オイ) (オイ

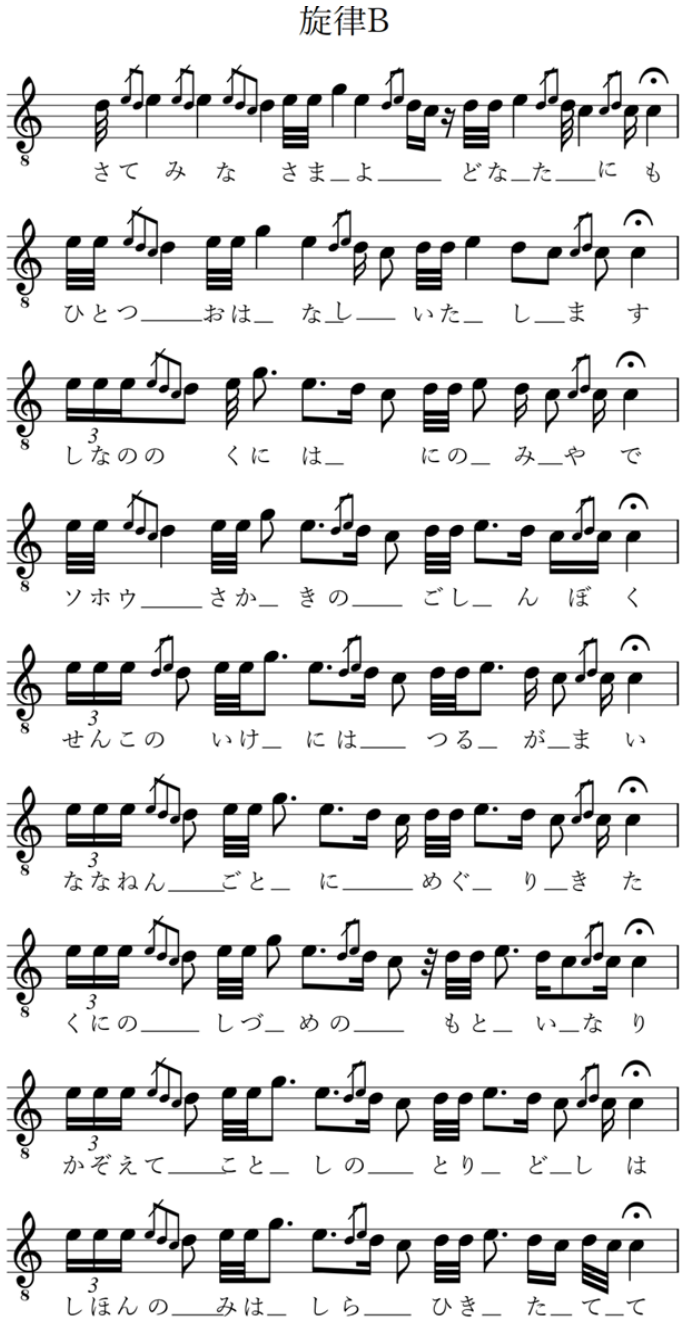
かぞえて____こと_ しの___ とり_ ど__し は にひゃくと____ にじゅ_う と_ ごか_いめ____で
(オイ) (オイ

しほんの____みは_ し ら___ ひき_ た__ て_て エ_____ まもらせ_たまえや_____
(オイ)

エ ンヤ ラサ

三分以上にわたる長い唄であるが、これを採譜した結果、「甚句」は、二つの旋律を交互に繰り返しながら七五調の歌詞を連ね、長くなっていくことがわかった。また、唄い終わる際には、それまでとは異なる旋律を唄い、唄が終わることを明示しているものと考えられる。つまり、矢彦神社の「甚句」は三つの旋律から構成されていることがわかった。本節では、交互に繰り返されている旋律をそれぞれ旋律B、旋律Cとし、最後の旋律を旋律Dとして考察する。

旋律Ｂ・旋律Ｃを繰り返し、最後に旋律Ｄを唄って終える形式は、沙田神社（本報告書 69 ページ参照）など松本城近辺の諸神社の木遣りと類似している。「さくり」が諏訪大社の木遣りと類似していることとは対象的である。



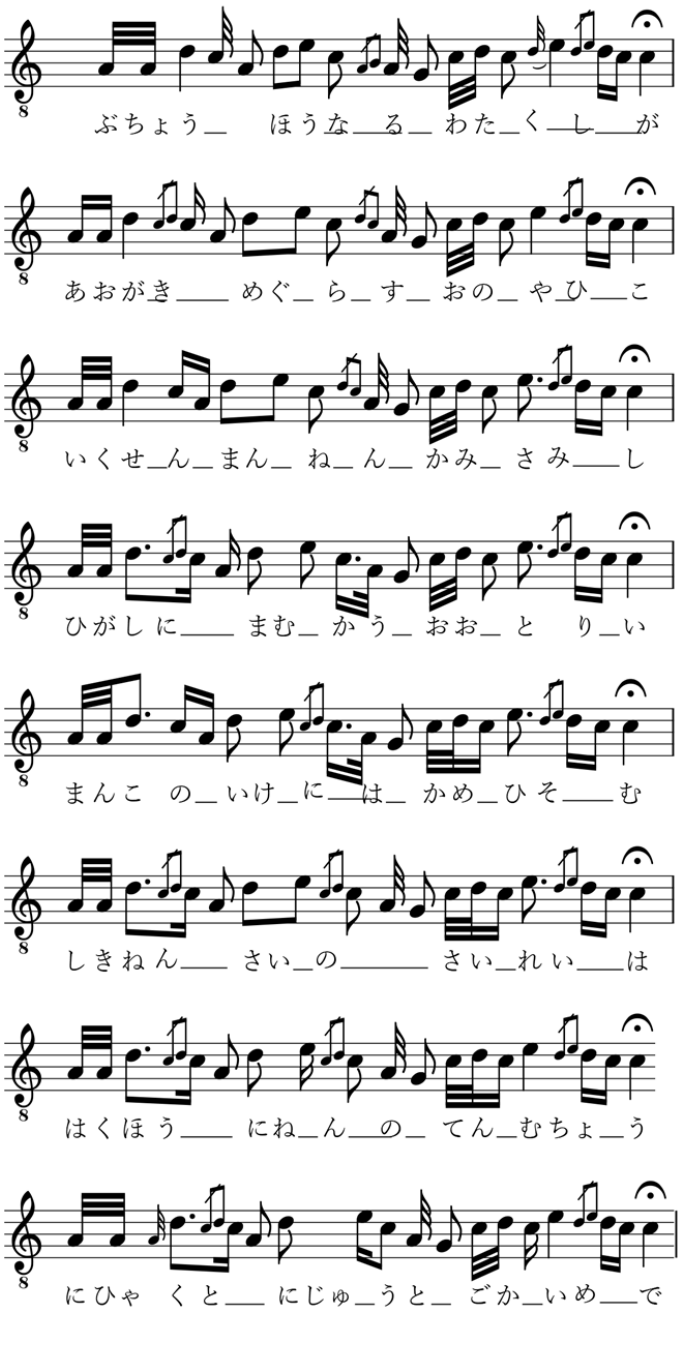
なお、矢彦神社の甚句を旋律Ｂ・Ｃ・Ｄの三つに分類したことについては、沙田神社の木遣りの旋律Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅのそれぞれの箇所に対応させたものである。つまり、沙田神社での木遣りの冒頭に相当する旋律と、唄い終わったあとにかける旋律的な掛け声は、矢彦神社の「甚句」には見られないものである。

旋律Ｂ

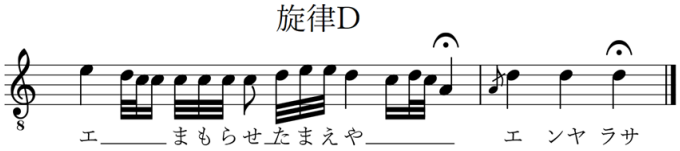
筆者が 2017 年 5 月 3 日の矢彦神社御柱里曳き祭で耳にした矢彦神社一之御柱の甚句は、全てが「さて皆様よどなたにも 不調法なるわたくしが ひとつお話いたします」の定型句で始まる。「さて皆様よどなたにも」まで唄われると、周囲から「オイ」と合いの手がかかり、唄い手も一呼吸置くため、ここで一区切りと考えた。基本的にド-レ-ミの三音のみで唄われるが、「さま」でソに跳躍し、旋律の頂点を形作る。

ここで、この「甚句」における「③ひとつお話いたします」、「⑤信濃の国は二之宮で」、「⑦ソホウ榊のご神木」、「⑨千古の池には鶴が舞い」など、奇数行の歌詞の旋律を並べると、左の譜面のようになる。これらを眺めると、同様の旋律によって唄われていることがわかる。従って、これらを旋律Ｂと分類した。

旋律C



旋律D



旋律C

「さて皆様よどなたにも」が唄われた後に「オイ」の合いの手が入り、一呼吸あった。その後「不調法なるわたくしが」と唄われたところでまた「オイ」の合いの手が入り、一呼吸あくため、ここでまた一区切りだと考えた。

旋律Bに比べて低い音程から(楽譜上ラ)唄い始め、全体的に低い音程で唄われるが、音域は広く、より装飾的になっている印象を受ける。

ここで、この「甚句」における「②不調法なるわたくしが」、「④青垣巡らす小野矢彦」、「⑥幾千万年神さみし」、「⑧東に真向かう大鳥居」など、偶数行の歌詞の旋律を並べると、次頁の譜面のようになる。これらを眺めると、同様の旋律によって唄われていることがわかる。従って、これらを旋律Cと分類した。

旋律D

ここまで、旋律Bと旋律Cとを交互に繰り返すことによって「甚句」の長大な歌詞が唄われていることを確認した。

しかし、唄い終える際には、旋律Bとも旋律Cとも異なる旋律を唄い、唄い終えている。これを旋律Dとした。

この旋律は、「たまえや＿＿」と引き伸ばしながら装飾的に下行し、ラに落ち着く。「エンヤラサ」は、周囲の氏子もあわせて斉唱し、押し込むような動作とともに力強く唄い終えるものである。この後は「ヨイテーコショ」という掛け声に繋げられる。

まとめ

これを見ると、矢彦神社の「甚句」は、沙田神社や橋倉諏訪社など松本城近辺で唄われている木遣りに類似する構造を持っていることがわかる。それは、旋律Ｂ・旋律Ｃを繰り返して唄い、旋律Ｄによって終わるという構造である。

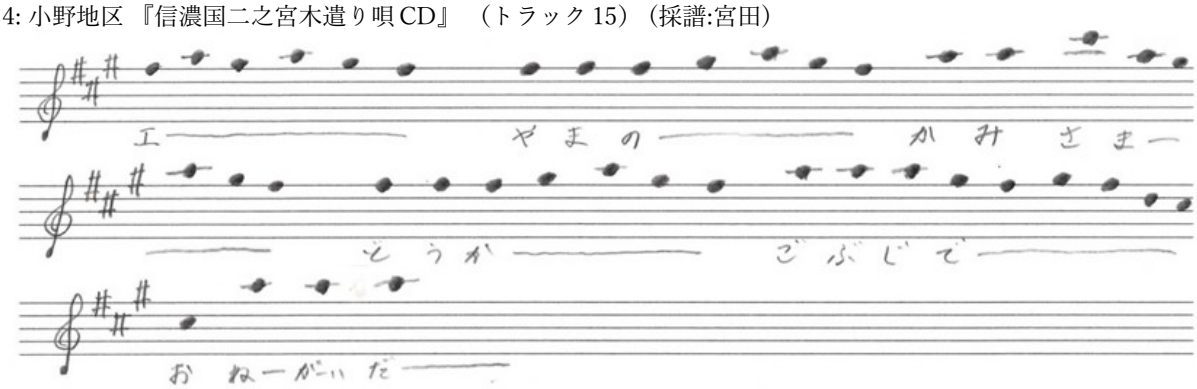
「さくり」とは全く異なる構造によって唄われる「甚句」は、いかなる起源をもち、どのような唄に影響されながら生まれたものなのか。興味深いところである。

第五章　木遣りの節回し　担当：宮田紀英

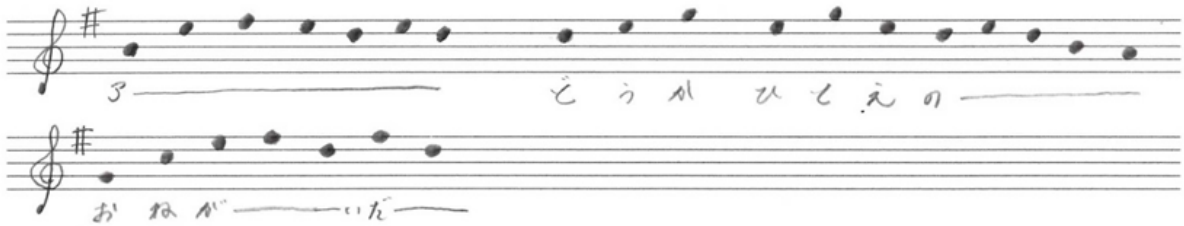
…矢彦神社小野木遣り保存会と雨沢地区木遣り保存会・飯沼地区木遣り保存会

さくりは短い木遣りでありながら地区によって特色が見られるため、メロディの考察の資料として扱うこととする。まず三地区のさくりの譜例をそれぞれ以下に示す。

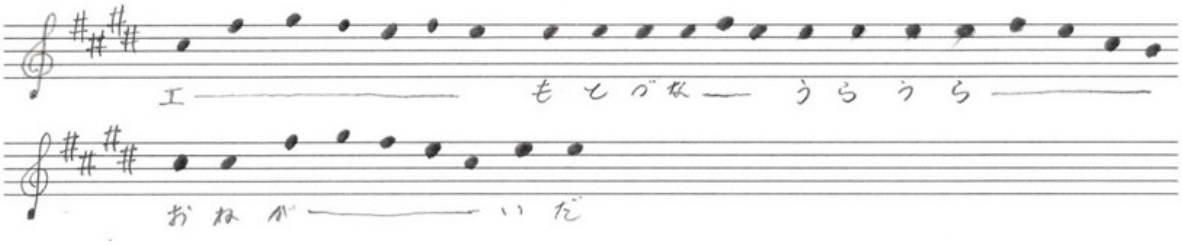
譜 14: 小野地区 『信濃国二之宮木遣り唄CD』 （トラック 15）（採譜:宮田）



譜 15: 飯沼地区 『信濃国二之宮木遣り唄CD』 （トラック 17）（採譜:宮田）



譜 16: 雨沢地区　『信濃国二之宮木遣り唄 CD』　（トラック 18）（採譜:宮田）



考察の便宜上、田中(2017)に倣い、唄を三〜四つのセクションに分ける。また、それぞれのセクションの音源における秒数もカッコ内に併記する(単位は s(秒,second)、小数点第二位以下四捨五入)。

	導入部	上の句一段	上の句二段	下の句
小野地区(譜 14) 27.8s	エー (5.0s)	山の神様 (7.2s)	どうかご無事で (8.9s)	お願いだ(6.7s)
飯沼地区(譜 15) 21.0s	アー (6.9s)	どうか一重の(7.9s)	—	お願いだ(6.2s)
雨沢地区(譜 16) 21.5s	エー (6.6s)	元綱うらうら(8.0s)	—	お願いだ(6.9s)

[導入部]いずれの地区でも最初の一音が最も低く、次の音にかけて高くなる。飯沼地区の音程をすべて二度ずつ上げると雨沢地区のメロディとなるのは興味深い。両地区の音域は完全五度、小野地区は短三度である。すなわち飯沼・雨沢両地区の音程の幅は広い。ここで特筆すべきは、最高音で留まる時間の長さである。飯沼地区が 0.5 秒(導入部全体の 7%)、雨沢地区が 0.4 秒(同 6%)であるのに対し、小野地区では 2.5 秒(同 50%)と非常に長く伸ばす。これらの特徴により、飯沼地区と雨沢地区は似通って聴こえ、小野地区は特異に聴こえる。雨沢地区では息継ぎをせずすぐに上の句へ移行する。

[上の句一段]いずれの地区においても七音節(雨沢地区のこの唄は字余り)である。ここでも小野地区は特徴的に聴こえる。句の最初の音と最高音を比較すると、小野地区では完全五度、飯沼地区では完全四度、雨沢地区では長二度であり、小野地区の音程が広いことがわかる。また小野地区では上の句一段の後半部で最高音に達する。小野地区は上の句がもう一段があるため、それを意識したメリハリのあるメロディとなっていると考えられる。また、最後の一音を長く伸ばし最後に大きく下げるというのが共通してみられる特徴である。この箇所でも飯沼地区の音程を二度上げたものが雨沢地区の音程となる。

[上の句二段]二段にさくる小野地区の木遣りのみにみられる七音の句である。上の句一段の終止音と同音で始まる。句の前半部分は一段目と同じメロディである。後半部は、一段と比べて音程の上下が少なく、また最後の一音の下がり幅が広く、飯沼・地区の一段と似たような印象を受ける。ただし、それらに比べると唄う時間は一秒ほど長くなっている。

[下の句]どの地区でも五音節の句である。飯沼・雨沢地区では上の句の終止音と異なる音から始まり、連続性が見られない。両地区のメロディとも導入部のアレンジとなっていて、似通った旋律で進行する。飯沼・雨沢地区では「おねがいだ」の「が」の部分で句内の最高音に達し、その後少し下がる。小野地区では全く異なった形態を取る。すなわち、上の句二段の終止音と同音で始まり、そのあとはファ♯の音が一定に続く。

ゼミ内で四之柱の映像を共有した際、「矢彦神社の木遣りのメロディはなんとなく暗い感じがして特徴的だ」という意見が複数あがった。小野地区では暗く、味わい深い印象を受けたのに対し、飯沼地区は小野・雨沢双方に類似した印象、雨沢地区では明るい、朗らかな節回しのように聴こえた。

[総括]さくりのメロディは飯沼・雨沢地区と小野地区で大きく異なる。小野地区のさくりでは上の句が二段あることに加え、メロディの類似度が他二地区と比べて低い。また小野地区のさくりは一段と暗い感じがする。同じ神社内で甚句・さくりの二つの大きな分類があり、その中でも更に地区ごとに節回しが若干異なっていることは、大変興味深い。異なった印象をうける背景には、音階などの要素の差異があると推測される。

おわりに　担当:宮田紀英

私は音楽の素養もなければ神社のこともよく知らない。それでも昔から近所の神社の祭りにはよく行ったし、お囃子は楽しく聴いていた。大学で雅楽部に入部した旧友の話もよく聞いていた。そんな最中、4月に「御柱ゼミ」が開かれるという旨のメールを受け取った。なんとなく興味があったので参加する意向を折り返し伝え、23日に沙田神社の里曳きを見に行った。想像以上に大きい祭りだったので驚いた。そのおよそ十日後に小野・矢彦神社を見学することになっていたので、そちらも参加した。渋滞に巻き込まれ曳行開始には間に合わなかったが、駐車場から見えた御柱に一目散に駆けつけ、その様子を追うことになった。初夏を感じさせるような汗ばむ陽気の中で、酒を飲みながら御柱を曳行する氏子たちを見ていると、自分が外部の人間であることがつくづく残念に感じられるほど楽しそうにみえた。御柱といえば諏訪大社だと思っていた自分の考えがここでほぐれていった。信濃国二之宮の小野・矢彦神社の氏子たちは皆がそれぞれに誇りを持って御柱を曳行するし、木遣りを唄う。神社

によって、更には柱を曳行する地区によって御柱の形態は様々だし、その多様性は特に木遣りに顕著に現れていた。世界の流れはなんとなく単一指向になっている気がするが、私はこの祭りから学べることが多いと思った。

今回報告書を編集しながら、取材する力の大切さをひしひしと感じた。私の録音はほとんどすべて頭が切れてしまっており、かつ録り逃しが多い。しかも現地で私は完全なる見物客と化し、氏子たちに話しかけることもろくにできなかった。あとでどんなに良いまとめをしようとしても、当日得たものが少ないのではどうしようもない。当日に向けた準備や事前学習、更には当日の現地での努力を怠ってはならないのだと、ゼミが集大成に入っていくにつれ強く思うようになった。今後も現地で唄を採集する機会があれば、今回のことを教訓にして努力していきたい。

2 月 10 日の全体報告会で矢彦神社の「さくり」が諏訪大社方面の木遣りに、「甚句」が松本城周辺の木遣りに似ているという話があがって驚いた。たしかに地理的にも憑の里の由緒的にも、ここが木遣り唄の要所となっているという話はあり得るし、それを結論付けるために更に多くの諏訪地方の小宮、また隣接している小野神社の木遣りを調査する必要性があるのではないかと感じた。また、西行法師の甚句がなぜ矢彦で唄われているのか個人的にとても気になった。その上これと類似したものが沙田でも唄われていることが報告会でわかった。このように、疑問点が多くなるばかりで、今後大いに研究の余地がある分野だと感じられた。

参考文献

辰野町誌編纂専門委員会編『辰野町誌　近現代編(1990)』辰野町誌刊行委員会。

辰野町誌編纂専門委員会編『辰野町誌　歴史編(1990)』辰野町誌刊行委員会。

石川俊介「諏訪大社御柱祭の文化人類学的研究：祭礼の存続と民間信仰」名古屋大学博士論文、2015 年。

信州・両小野地区振興会「憑の里【だのめのさとだより】」
<http://www.shiojiri.info/~ryouono/onbashira/>(2018 年 1 月 6 日閲覧)

信州・両小野地区振興会「H29 小野おんばしら」
<http://www.shiojiri.info/~ryouono/H29Onbashira/>(2018 年 1 月 6 日閲覧)

長野県上伊那地域振興局総務管理課「い～な　上伊那」
<http://blog.nagano-ken.jp/kamiina/>(2018 年 1 月 9 日閲覧)

「辰野町消防団公式ホームページ」
<http://www.town.tatsuno.nagano.jp/baren/>(2018 年 1 月 6 日閲覧)

沙田神社

岩渕真理絵

木下和幸

関島ゆりな

宮田英紀

田中大暉

はじめに　担当:岩渕真理絵

今回御柱祭、特に木遣りに注目して調査することになり「支度を見るなら三之宮」と呼ばれる、きらびやかなイメージのある沙田神社の木遣りにはどのような特徴があるのかということに注目して調査を進めていった。また、筆者らは2017年9月24日(日)の里曳き祭の日に一之御柱、三之御柱、四之御柱に同行することができたため、柱ごとの差異にも着目しながら沙田神社の御柱祭の特徴を明らかにしていきたい。

報告書執筆にあたって、三之御柱で木遣り師として活動されていた北野義友氏、三之御柱の御柱主任総代の上條英雄氏の協力を得ることができ、特に第三章においてはお二人から聞いた話しを元に文章を作成している。

第一章　沙田神社

第一節　沙田神社について　担当:田中大暉

沙田神社は長野県松本市島立三宮、奈良井川の西岸に面して鎮座し、三之宮と呼ばれている。

律令制下の開田による条理的遺構の二町四方の四坪の升の上にのって立地しており、開発当初からの古社と推定されている。往時は広大な境内地を有していたが、現在では縮小されているという。

延喜式神名帳に記載のある式内社であり、筑摩郡三座(岡田神社・沙田神社・阿礼神社)のうちの一座に比定されている。沙田神社社殿略記には「孝徳天皇の御宇大化五年六月二十八日この國の國司勅命を奉じ初めて勧請し幣帛を捧げて以って祭祀す」とあり、創建を大化5年に求めている。

『古事記』『日本書紀』に見える沙土煑尊(すいじにのみこと)を原祀神とする。平安時代中期以降、彦火火出見尊(ひこほほでみのみこと)と豊玉姫命(とよたまひめのみこと)が合祀された。現在は彦火火出見尊を主祭神とし、左相殿に沙土煑尊、右相殿に豊玉姫命を祀る。

武藤(1999)によれば、沙土煑尊を原祀神とする神社は日本で唯一である。沙土煑尊を祀った理由については、沙土煑尊は泥土や砂土が固まって大地が形成される過程の神であることから、葦が生い茂った湿地帯であった古代の奈良井川西岸と、神話で語られる葦原中国のイメージが重ねられ、沙土煑尊が祭神として選ばれた可能性があるという。また、地元の方によれば、沙の字はサンズイに少ないと書くところから、氾濫することが多かった奈良井川の治水を願ったものであるという。

三之宮を産之宮とかけて境内摂社に子安社があり、彦火火出見尊の母神である木花開耶姫命を祀る。

小笠原氏の信仰厚く、小笠原氏の紋である三階菱を神紋とする。例大祭は9月26日、27日。

御柱祭については、文徳天皇の853(仁寿三)年に始まり、清和天皇の859(貞観元)年より卯年と酉年に行われるようになったといわれる。諏訪大社より一年遅い卯年と酉年に行われる。「支度見るなら三之宮」といわれ、氏子たちの華やかな衣装で知られている。

島立から西に十五キロメートルほどはなれた島々谷の入り口に鷺沢山があり、その山に奥社がある御柱の見立ては古くは鷺沢山で行っていたが、江戸時代から波田の山林で行うようになる。四本が内定すると本見立の式と称して、神主・氏子総代らが現場で修祓(お祓い)し、立木に注連縄をかける。山出しの前々日に四方じめの式と称して神主が氏子の村の境に注連縄を張り、前日に本伐りが行われる。四月中卯または酉の日に「山出し」が行われる。島立の西約十二キロメートルの波田地籍の山林から御柱となる木を切り出し、島立の旧村境まで曳行して秋の「里曳き(さとびき)」まで安置する。

9月下旬の例大祭の日に御柱の里曳きと建立式が行われる。建立では、社殿の四隅に一之御柱から時計回りで建立される。

一之御柱は三宮・中村、二之御柱は永田・町区、三之御柱は小柴・大庭、四之御柱は堀米・荒井の地区が担当する。これらの地名は木遣り唄にもしばしば現れ、「小柴あっての大庭で 大庭なければ小柴は立たぬぞ」など地区の協力を呼びかける歌詞もある。

第二章　里曳き祭

本章では筆者らが曳行に同行した2017年9月24日(日)の沙田神社里曳き祭における一之御柱、三之御柱、四之御柱の行程について報告する。なお、当日曳行に携わっていた人数の正確な数値は不明であるが、「平成28～29年度　沙田神社御柱祭会議　図面綴」内「沙田神社御柱山出し祭曳行配置図【曳行時】」によると、一之御柱では二百五十人、二之御柱では二百人、三之御柱では二百人、四之御柱では三百人が関わっていたと思われる。曳行ルートについては以下の図を参照されたい。

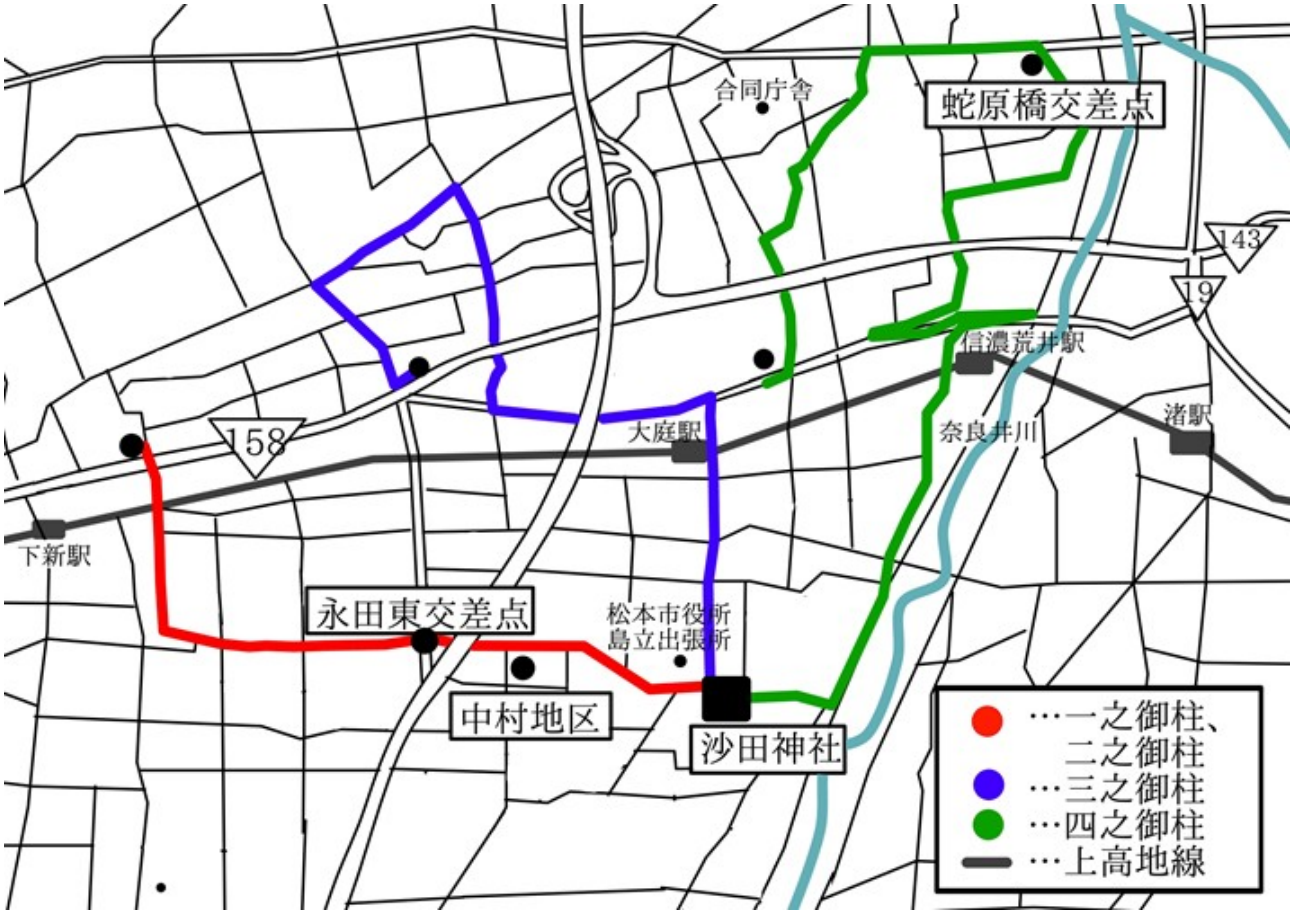


図 2: 沙田神社　里曳き祭曳行ルート　(2018 年 1 月 31 日　作成:関島)

第一節 一之御柱　担当:関島ゆりな

一之御柱は 7 時 20 分に安置場所を出発予定になっており、筆者が合流したのは 8 時 45 分頃であった。永田東交差点を通過後、9 時 40 分頃から中村地区で酒の振る舞いが行われた。人々が談笑している中で、三之宮を唄うもの、色情を唄うもの、子ども木遣りなどの木遣りが次々と披露された。10 時 10 分に曳行が再開され、神社前に到着したのは 10 時 40 分頃。到着後は再び子ども木遣りが行われた。休憩後 12 時 30 分から曳き入れを開始し、完了すると木遣り師や氏子たちの喜ぶ姿が見られた。その後は柱の上で次々と木遣りが披露されている。13 時過ぎには建立前の冠落としが行われ、その切った柱の上でも木遣りを行っていた。13 時 25 分頃からクレーンを用いて建立を完了させ、土搗(どうづき)唄を唄いながら地固めを行った。そして 14 時過ぎのくす玉割りをもって、今回の沙田神社御柱祭一之御柱の里曳および建立が終了した。

次に、一之御柱のラッパ隊について報告する。曳行開始の合図の笛が鳴った後、柱の上の先頭に立つ者が「せーの」と声をかけ、木遣り師たちと氏子たちが交互に「ヨーイショ」と言うと柱が進み出し、数秒後にラッパ隊の演奏が始まる。一之御柱についていたのは六名ほどで、うち一人は女性で

あった。記録できたものでは二種類の旋律が確認できた。周りに民家がない一直線の道を進む場面では、長くて凝った旋律のものが吹かれていた。後述する四之御柱とは違い、神社への曳き入れの際には演奏が行われなかった。

写真 13: 一之御柱曳行中　(2017 年 9 月 24 日　撮影:関島)

第二節　三之御柱　担当:田中大暉

2017 年 9 月 24 日の沙田神社御柱里曳き祭での三之御柱は、国道 158 号の空き地に安置されていた。氏子の方々は 7 時に安置場所に集合し、7 時 15 分には神事が行われた。7 時 30 分には写真撮影などが行われ、子ども木遣りによる「松竹梅」が唄われた。8 時には安置場所を出発した。

国道 158 号町区東の交差点を右折し、8 時 45 分には筑摩高校前で休憩が取られ、酒の振る舞いなどが行われた。ここでも木遣りが多数唄われ、御柱の上に立って唄う氏子の方や、路上で祝儀を出した方に対して「〇〇様より祝儀でた」とお礼の木遣りを唄う氏子の方も多かった。

9 時には小柴交差点を通って国道 158 号を横断し、9 時 15 分に小柴旧 158 号交差点を通過、10 時には大庭丁字交差点を通過し、10 時 35 分から 40 分の間に大庭踏切を横断する。

曳行の合間には複数回休憩をはさみ、そのたびに多数の氏子による木遣りが披露された。木遣りは御柱の上に立って唄う人のほか、路上で唄うお礼の木遣りも複数人があちこちで同時に唄うため、曳行の休憩時には常に木遣りが唄われているほどの状況があった。また、周辺の住人による酒や野菜の振る舞いも行われ、地区の名産であるきゅうりを振る舞うご家庭もあった。

11時に所定の場所に曳きつけると、木遣りの奉納が行われた後休憩となり、12時30分まで昼食休憩をはさんだ。

12時30分には曳行を再開し、12時45分には大庭両島交差点を通過して、沙田神社へと向かった。この間の距離は五百メートルほどであるが、途中何度も休憩をはさみ、休憩のたびに木遣り唄が唄われた。この頃になると間もなくとなった曳き入れを踏まえ、「ラストスパート頼むぞよ」などの木遣りも聞かれた。13時40分には神社への曳き入れを開始し、北西の鳥居から曳き入れて社殿の後ろを通り、所定の位置まで到着した。

御柱の建立はクレーンで行った。御柱が直立すると、その周りを地固めするために土搗き唄が唄われた。木槌を打ちながら御柱の周りをゆっくりと一周すると建立は完了し、仕掛け花火やお菓子のバラマキなどが行われた。

第三節 四之御柱　担当:木下和幸、宮田紀英

四之御柱の里曳および建立について報告する。四之御柱は安置場所を8時頃に出発した。8時15分頃堀米交差点に差し掛かり、国道158号線を北に横断した。筆者が四之御柱に到着したのは8時34分で、ちょうど休憩中だった。8時40分に出発するが、数分後、細い路地の曲がり角で曲がりきれず、曳行を中断する。試行錯誤している最中、御柱が民家の垣根に衝突する。曳行が再開したのは約十分後であった。それからは、合同庁舎前に続く太い道を横断する。9時2分にはお礼木遣りが唄われたが、このときは、同時に別のところでも唄われていた。住宅が多い場所だったからであろう。

9時24分、蛇腹橋交差点手前のスペースで休憩が始まった。お酒やオードブルなどが振る舞われた。この休憩中にも、お礼木遣りが9時28分に唄われていたが、ほかにも数多くの木遣りが唄われていた。9時40分ころ休憩が終了し、御柱をスイッチバックして交差点より用水路に沿い南下する。このあと、二回のスイッチバックがなされ、10時32分、荒井交差点にたどり着き国道158号線を南へ横断した。10時40分、十字路に差し掛かると西へ進み、10時55分、午前の曳行が終了し、昼休憩になった。

12時45分より午後の曳行が開始された。13時20分に上高地線に差し掛かる。列車の通過を待ち踏切を渡ったのちに休憩。この休憩では老人ホームの前でラッパ隊の演奏がなされ、拍手喝采が起こる。休憩が終了したのは13時45分のことだった。14時5分、橋の下を渡りきったところで再び休憩。御柱の奥側と手前側で木遣り師以外の方の木遣りが披露される。手前側では八本披露されていた。

14時32分、沙田神社東側の鳥居に達する。鳥居を抜け境内に入るとき、三之御柱の方々も応援に駆けつけていた。14時49分、車輪を外した御柱の先端を階段の上に乗せる。そりを敷いて引き上げや

すくしていた。そして、御柱の先端が階段の上、末端が下にあるという御柱が斜めの状態で木遣りが唄われた。ここで唄ったのは木遣り師と御柱の先端に立ってリードしてきた方一人である。14 時 53 分、14 時 55 分、14 時 56 分……と大体一～二分に一本のペースで唄われていた。15 時 8 分、階段を上るが、そりが壊れ御柱が傾き中断する。15 時 14 分、曳行が再開される。

15 時 20 分、建立場所に到着し曳行が終了する。「四之御柱」の立て札や縄が外される。クレーンの到着まで木遣り師も木遣り師ではない人も代わる代わる木遣りを唄う。15 時 55 分、クレーン到着。しばらくして根の切断が行われる。クレーンによって建立されたのは、16 時 37 分のことだった。17 時ころ、土搗唄が唄われ、全ての工程が終了する。

写真 14: 四之御柱曳行中。2017 年 9 月 24 日　撮影:木下）

ラッパ隊は八名で、松本市消防團の法被を着ている人が多かった。ラッパ隊は御柱の動きとは別の動きをしていたときがあり、これは曳行ルートを先取りするためだと考えられる。県道沿いで 8 時 58 分に聴かれたものは、御柱と少し離れたところで六名が一列に並んで演奏していた。このときは、パートが恐らく三つに分かれていた。二部の声部からなるメロディーと、そのかけ合いとなるメロディー(声部は一部)である。9 時 51 分のものは、メロディーが多少異なり、最後だけ真ん中の人が演奏せず軽く指揮をして演奏を終わらせていた。途中にあった老人ホームでも御柱から独立して演奏している。そして、神社への引き込みの時は、御柱の氏子が発するかけ声に負けないくらいの大音量で演奏していた。

第三章　木遣りについて

本章は、2017 年 7 月 31 日、沙田神社の三之御柱で木遣り師として活躍されていた北野義友氏を大学へお招きした際に伺った話と、三之御柱の御柱主任総代である上條英雄氏へメールで木遣りに関する質問をした際の回答を元に構成されている。

第一節　沙田神社の木遣りと木遣り師　担当:岩渕真理絵

『信州三之宮 式内沙田神社 御柱祭』において木遣りはこのように説明されている。

> 本来、即興を旨とし、その時、その場の光景・状況を即座に唄います。もちろん唄い継がれてきた名文句もあり、中にはユーモラスな内容のものもあります。ときに感動を、ときにお笑いを呼ぶ御柱祭の名物です。[17]

沙田神社の木遣りの特徴として、諏訪で唄われる木遣りより歌詞が長いこと、木遣りが唄われる際の動作が豊かであることなどがあげられるだろう。これについては本章の第三節、四節で詳しく触れたい。沙田神社の木遣りは「聴かせる木遣り」(2017 年 7 月 31 日、北野さんの言葉より)と言われているが、上記の特徴もそう言われる理由となっているのではないかと考える。そして、この木遣りによって曳き子の士気を鼓舞したり安らげたりといったことがなされる。また、木遣りは御柱祭のときだけに唄うものではなく、昔は結婚式や会社の新年会、工事の竣工式など、また松本あめ市、国宝松本城四百年まつり、松本市市制施行百周年記念のイベントなどでも唄われていた。そのような特別な場では、通り一遍の歌詞ではなく、そのときに合わせて文句を作って唄う。沙田神社の木遣り師になるためには、子供の頃から伝統を継承するために子供木遣として練習に参加するところから始まる。御柱祭が行われる神社の中には木遣保存会に所属しなければ木遣り師になれないところもあるが、沙田神社の場合は木遣保存会への所属は必須ではない。各柱の木遣り師と木遣保存会は別の組織であり、例えば三之柱においては六十人前後木遣り師が存在するが、その中で木遣保存会に所属する人は少ない青年を中心に希望をすれば誰でも木遣り師になることができる。しかし四之御柱の木遣り師だけは特別であり、誰でもなれるわけではない。その特別さは衣装にも表れており、四之柱の木遣り師の中でわらじを履いて着る法被は百万円以上もする。特別である明確な理由は不明であるが、昔四之御柱は山辺地区から木遣りの指導をしてもらい、お礼に法被を持たせたという話がある。木遣りの指導を受けたことがある、という点が四之御柱が特別とされる所以かもしれない。練習は町会ごとに日程を組み、公民館で行われる。数回、二つの柱の町会が合同で練習を行うが、四つの柱が一同に集まって練習ことはない。

17『信州三之宮式内沙田神社 御柱祭』沙田神社御柱祭記録集編集委員会、2006 年、六頁

第二節　採譜から見た木遣り考察　担当:田中大暉

本節では、採譜の面から木遣りについて考察し、いかなる特徴が見いだせるかを述べる。

典型的な木遣りの例として、沙田神社三之御柱の木遣り師である北野さんが唄われた次の木遣りを例にとって考察した。その結果、沙田神社で唄われている木遣りは、五つの旋律から構成されていると考えるに至った(節末・図)。以下には、その五つの旋律を旋律Aから旋律Eとして考察する。

また、便宜上歌詞の横に行数を示した。なお、比較しやすいよう、譜面は調号のない形に改めた。実際の音はここに示した譜面のものよりも長二度高い。

この木遣りは、三之御柱が午前の曳行を終え、昼食休憩に入った際の木遣りである。「木遣りの奉納をします、合いの手をお願いします」とのアナウンスがあってから、木遣り師は三之御柱の横に立ち御柱に向いて木遣りを唄った。

唄い手はスーツ姿に采配を持って唄った。「白雲たなびく鷺沢より」などの一節が唄われるたびに周囲の氏子から「オイ」の合いの手がかかった。最後の一節である「めでたく建立」になると少し力を込め、若干語句が詰まるようにして唄い、「エンヤラサ」と唄うと、周囲の氏子たちは「サーノエンヤラサ」と斉唱し、拍手が起こった。なお、この木遣りの譜面は譜17に、音源はCDトラック9に収録する。

---

①　さあやるぞよ

②　白雲たなびく鷺沢より

③　かりて祀りし沙田は

④　氏子護って千余年

⑤　格式高き式内で

⑥　その名聞こえて世に高く

⑦　一が諏訪なら二が小野と

⑧　三は島立三之宮

⑨　今年は酉年巡りきて

⑩　七歳一度の御柱

⑪　花の四月に山を出で

⑫　稔りの秋に里を曳く

⑬　今日はめでたい里曳きで

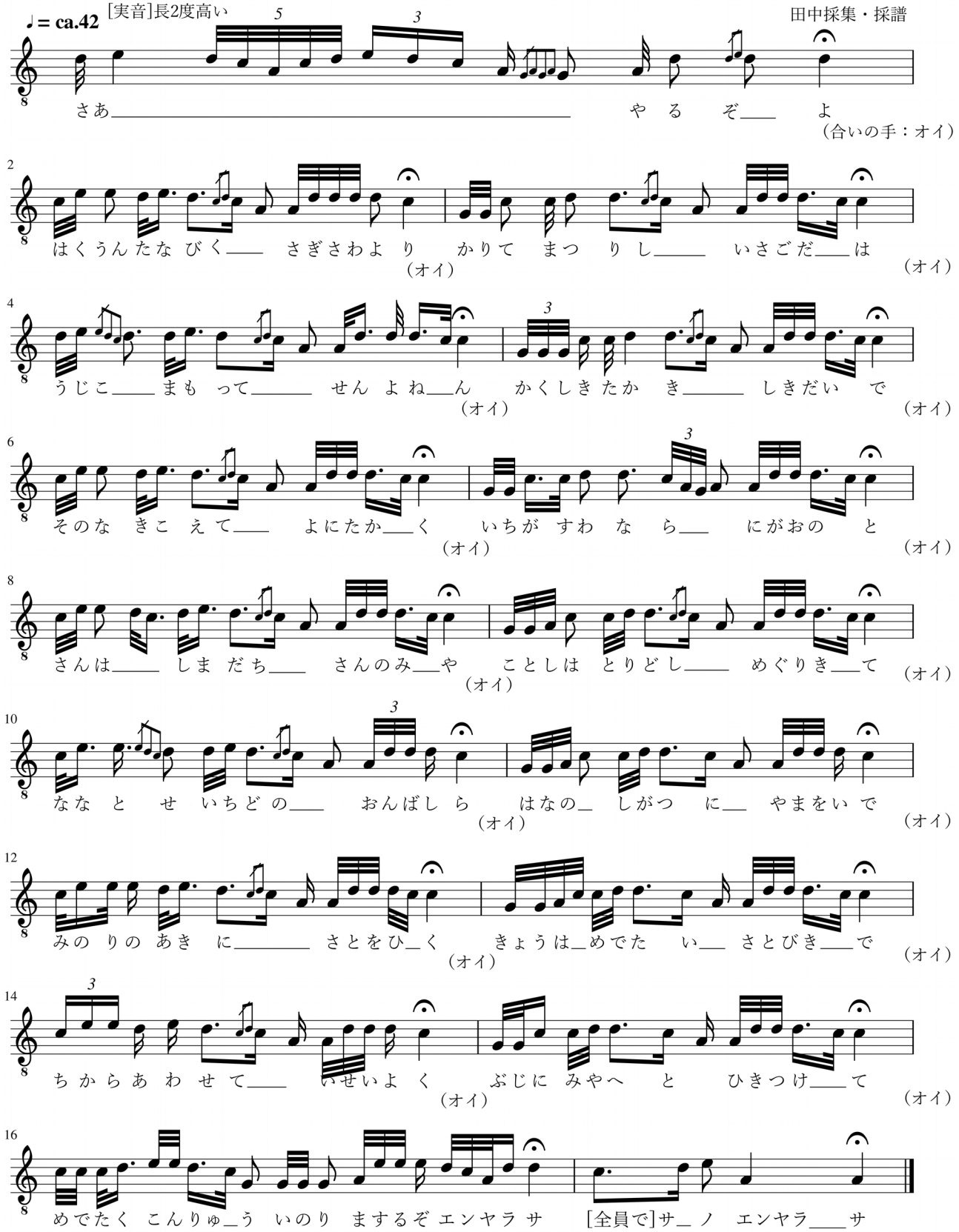
⑭　力合わせて威勢よく

⑮　無事に宮へと曳きつけて

⑯　めでたく建立祈りますると　エンヤラサ

⑰　サーノ　エンヤラサ

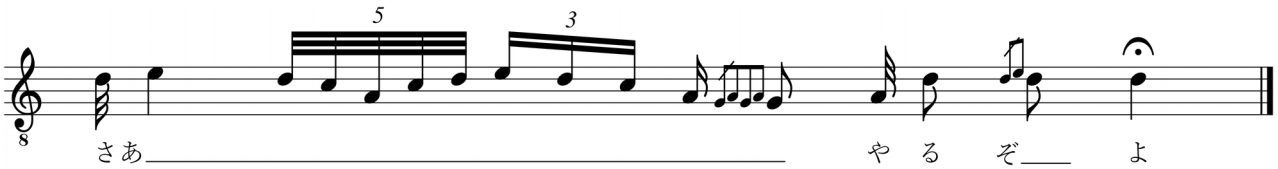
譜 17 木遣り「白雲たなびく鷺沢より」



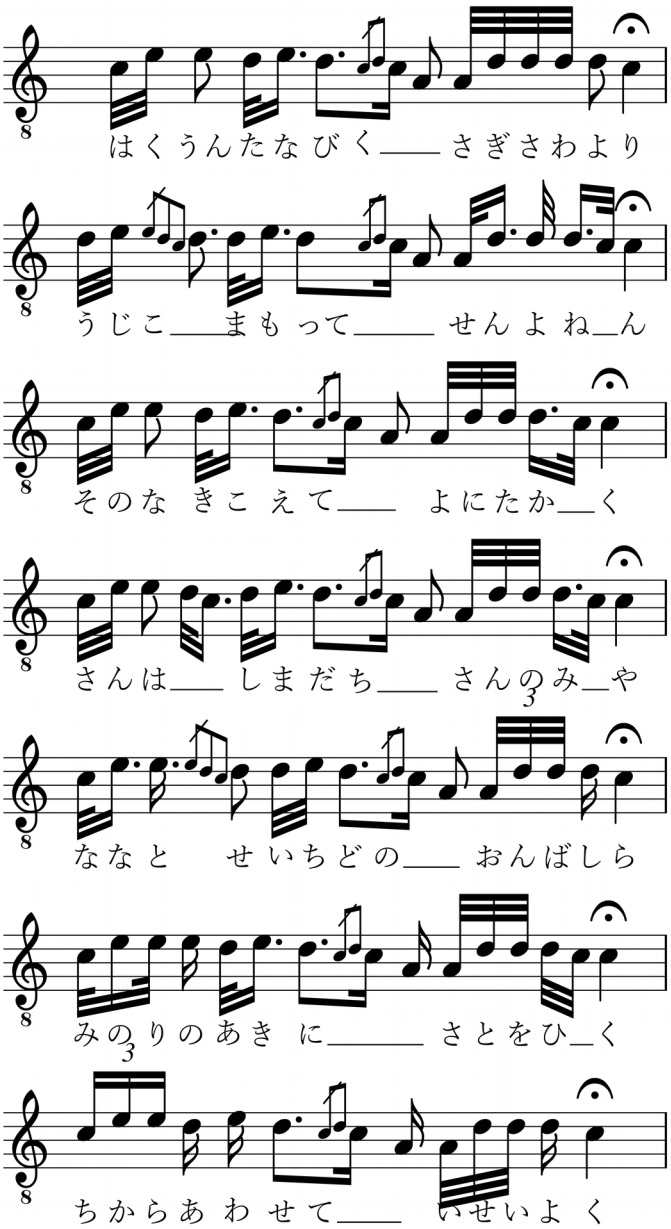
沙田神社の木遣り唄は、五つの旋律から構成されると考えられる。それぞれの旋律を旋律A、旋律B、旋律C、旋律D、旋律Eとし、以下に述べる。

（採集年月日:2017年9月24日　採集・採譜:田中）

旋律A



旋律B



旋律A

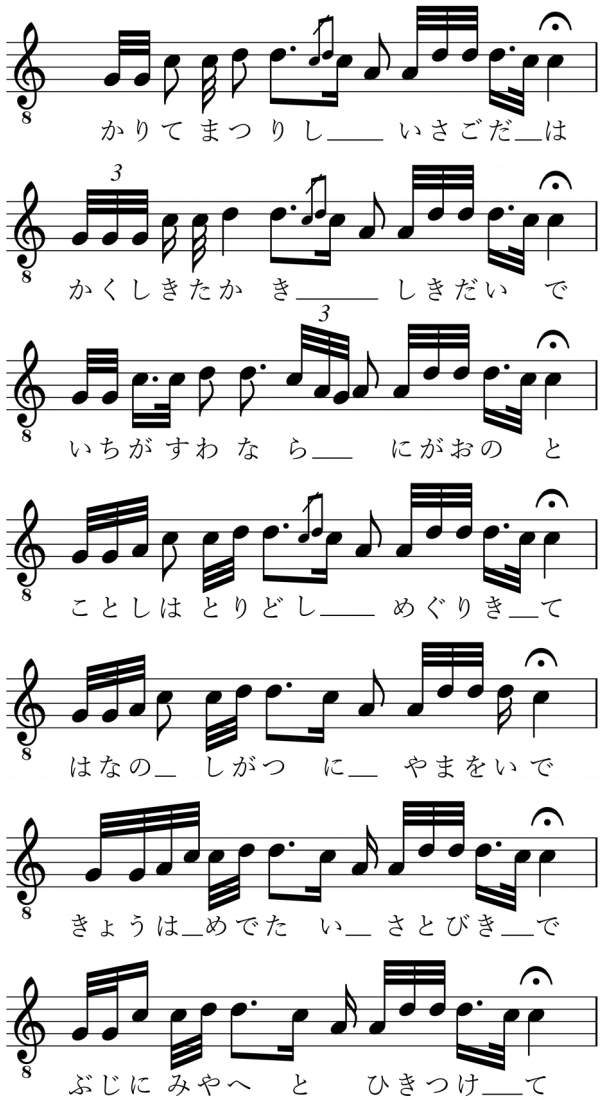
①行目である「さあやるぞよ」は、レから始まり、「さあ＿＿＿」と引き伸ばしながら上下して一旦ソで一段落あるようにも感じられる。「やるぞよ」はラからレまで跳躍し、「ぞ」において装飾的にミを挟みつつレで唄い終える旋律である。この旋律は旋律Aとした。

旋律B

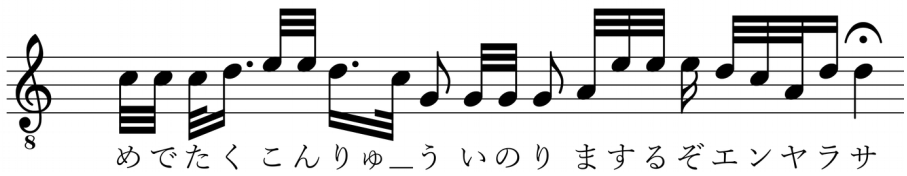
①行目「さあやるぞよ」が唄われた後は、②行目「白雲たなびく鷺沢より」と続く。最初の七音節である「白雲たなびく」では、ドから唄い始め、若干急ぎ気味に「白雲たな」まで唄った後、「び＿く＿」と伸ばしながらラまで下行する。次の5音節「鷺沢より」はラからレまで跳躍し、若干急ぎ気味に唄った後、「よ＿り＿」と伸ばしながらドに下行する。

ここで、この木遣りの②から⑭までの偶数行の旋律を並べると、左のようになる。これらを眺めると、②の旋律と共通性が高い。したがって、これらを旋律Bと分類した。

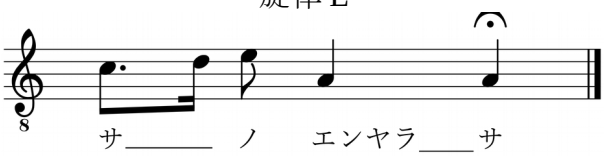
旋律Ｃ



旋律Ｄ



旋律Ｅ



旋律Ｃ

「②白雲たなびく鷺沢より」の後には「③かりて祀りし沙田は」と続く。最初の七音節である「かりて祀りし」では、ソから唄い出され、若干急ぎ気味にレまで上行した後、「り＿し＿」と伸ばしながらラまで下行する。次の五音節「沙田は」においては、ラからレまで跳躍し、若干急ぎ気味に唄った後、「だ＿は＿」と伸ばしながらドに下行する。

ここで、この木遣りの③から⑮までの奇数行の旋律を並べると、左のようになる。これらを眺めると、③の旋律と共通性が高い。したがって、これらを旋律Ｃと分類した。

旋律Ｄ

②行目から⑮行目までは、旋律Ｂと旋律Ｃを交互に繰り返し、歌詞を変えながら唄われた。しかし、⑯行目においては、それまでにない旋律を唄うことによって、唄がそこで終わることを明示している。したがってこれを旋律Ｄとした。

旋律Ｅ

旋律Ｄが唄われると、「エンヤラサ」に応える形で周囲の氏子たちと旋律Ｅを斉唱し、木遣りを唄い終える。歌詞は「サーノエンヤラサ」で固定されており、他の歌詞になることはなかった。旋律は柱ごとに若干の差異があるようにも思われるが、ほとんど同様の旋律である。

これらの特徴をまとめると、下図のようになる。

(図) 沙田神社の木遣りのイメージ

<table>
<tr><td rowspan="5">歌詞</td><td rowspan="5">さあやるぞよ</td><td>白雲たなびく鷺沢より</td><td>借りて祭りし沙田は</td><td rowspan="5">めでたく建立祈りまするぞエンヤラサ</td><td rowspan="5">[全員で]サーノエンヤラサ</td></tr>
<tr><td>氏子護って千余年</td><td>格式高き式内で</td></tr>
<tr><td>その名聞こえて世に高く</td><td>一が諏訪なら二が小野と</td></tr>
<tr><td colspan="2">(…略…)</td></tr>
<tr><td>力合わせて威勢良く</td><td>無事に宮へと曳きつけて</td></tr>
<tr><td>旋律</td><td>A</td><td>B</td><td>C</td><td>D</td><td>E</td></tr>
</table>

まとめ

沙田神社の木遣りは、五つの旋律から構成されているように思われる。それらを旋律Ａから旋律Ｅとして分類すると、まず「さあやるぞよ」という歌詞の旋律Ａから唄い出す。

次に、旋律Ｂ・旋律Ｃを交互に繰り返し、七五調の歌詞を連ねる。旋律Ｂ・旋律Ｃが繰り返されることによって、木遣りは長くなっていく。歌詞の前半を若干急ぎ、後の二音を引き伸ばす傾向に関しては、采配を回す動作との関連があるようにも思われる。

唄い終わる際には旋律Ｄを唄い、「エンヤラサ」と唄う。

「エンヤラサ」が終わると、周囲の氏子たちと旋律Ｅによって「サーノエンヤラサ」と唄う。この箇所は、歌詞は「サーノエンヤラサ」で固定されている。周囲の氏子たちも采配を同様に回す。

沙田神社の木遣りは、旋律Ｂと旋律Ｃを繰り返して唄い、歌詞の最後の行では旋律Ｄを唄い、その後全員でかけ声をかけて唄い終えるという点において、矢彦神社の「甚句」と類似する。唄われる音域については、あまり高い声で緊張感をもって唄うというわけではない点においても同様である。曳き子たちの気合を入れるために緊張感に満ちた唄い方というよりは、余興的に楽しむための唄という印象を受ける。

旋律Ｂが高く唄われ、旋律Ｃが低く唄われることによって対比関係をなす点においても、矢彦神社の「甚句」と共通点を持つように思われる。ただし、矢彦神社のものと比較すると沙田神社の旋律Ｂは旋律Ｃと同じ最高音で旋律の頂点をつくる唄い手が多い。若い唄い手ほどこのように特徴があるような印象を受けた。

第三節　歌詞からみる木遣りと土搗唄(どうづきうた)　担当:岩渕真理絵

本節では、沙田神社の御柱祭で唄われる木遣りの歌詞に着目したい。ここで記載する歌詞は全て2017年9月24日(日)の御柱祭で録音してきたものである。なお、実際には氏子一同によって歌詞の合間に「オイ！」や、最後に「サーノ エンヤラサー」といったかけ声がかかるが本節の歌詞考察においては省略する。また、歌詞を完全に聞き取れなかった部分もあり、不明瞭な点は●で表記する。

まずはじめに取り上げる木遣りは、祝儀をいただいた際に唄われるものである。

【一之御柱】

さあやるぞ ただいまご祝儀いただいて なんとまあ お礼を申そうか

氏子一同の喜びは 七重のひざをば八重におり

＊＊家のご繁盛をお祈りしますぞ エンヤラサ

【三之御柱】

さあやるぞよ ただいま＊＊様よりは たくさん御祝儀いただいて

沙田様にはお喜び 氏子一同は尚の事

何のまあお礼もできゃせぬが 沙田様へとひきよせて

お家の繁栄お祈りしますぞ エンヤラサ

【四之御柱】

さあやるぞよ　今日はめでたい里曳きで　＊＊様よりいただいた

こんなまあ嬉しいことはない　＊＊様のばお家には　七福神が舞い降りて

家はますます栄えまするぞ エンヤラサ

この木遣りの音源はCDトラック10に収録する。

沙田神社の御柱祭では曳行中、祝儀を持って待っている人たちの前で必ず止まり、木遣りを唄う姿が何度も見られた。沙田神社の御柱祭における大きな特徴であると言えるだろう。一之御柱においては

祝儀をいただいた際の木遣りは八回採録することが出来たが、名前以外の部分の歌詞の変更は一切見られなかった。三つの柱とも歌詞は異なるが必ず祝儀をくれた人の名前を入れることと、その家の繁盛を願うことは共通している。

次に紹介する木遣りは御柱祭について唄った木遣りである。

【一之御柱】

さあやるぞ 今年は嬉しい御柱 七年(しちねん)一度の建て替えで

こんなに嬉しいことはない 沙田様もお喜び

日本 日本のお守り頼むぞ エンヤラサ

【三之御柱】

さあやるぞよ 七歳一度の里曳き祭 四本の柱を建立し

沙田様へと導くぞ これから七年その間

無病息災祈ります みんなを見守りくださいませよと エンヤラサ

【四之御柱】

さあやるぞよ 信州信濃の三之宮 七年一度の御柱

桜の四月に●●で 実りの秋に里を曳く

めでたく建立おさめなば　沙田様にはお喜び

氏子の繁栄お守りくださるぞ エンヤラサ

ここで記した木遣りは、三之御柱のものは曳行中に唄われたものであったが、一之御柱と四之御柱で唄われた木遣りはどちらも曳き入れが完了し、建立前に唄われたものである。「沙田様」への感謝を述べるなどして、建立前に改めて気合いを入れ直したり、その場を盛り上げようとしたりするための歌詞なのかもしれない。

次に紹介する木遣りは土地や地域について唄った木遣りである。

【一之御柱】

さあやるぞよ 実に島立良いところ

東に鉢伏 大河原 西に乗鞍上高地

そのあいにありますわが村は 春に野菜の名産地

夏は蛍が舞いあそぶ 秋は稲穂がなびゆく

冬はコタツで一家団欒だぞ エンヤラサ

【三之御柱】

さあやるぞよ 春は周りに桜咲く

夏は新緑青々と 秋はつつじに紅葉かな

見る者すべてを魅了する 沙田様へと華を添えるぞ エンヤラサ

【四之御柱】

さあやるぞよ 島立よいとこいつでも

春は花咲き蝶が舞い 夏は野菜の集産地

秋は黄金の穂波打ち 冬はこたつで足をあぶるぞ エンヤラサ

どの歌詞も沙田神社のある島立の四季の美しさ、素晴らしさについて言及するものである。四之御柱で唄われたものに関しては複数回唄われたことが確認できており、普段生活している土地に対する誇りを感じ取ることができる。

最後に、土搗唄(どうづきうた)の歌詞を紹介する。土搗唄は御柱建立後、地固めの儀式の際に唄われるものであり、これまで見てきた唄の中で唯一明白な拍のある唄である。地固めとは、八角形の杵に縄を巻きつけ、そこから伸びる縄を氏子たちが持ち、土搗唄を唄いながら、杵で地面を打つものである。綱の数が限られているため綱を持つことのできる氏子は限られているが、持っていない氏子たちも采配を片手に持ち、地面を打つ動作をしながら地固めに参加し、その場にいる氏子全員で土搗唄を唄う。儀式は約十分かかり、その間休むことなく土搗唄が唄われる。筆者らは手分けをし、地固めに

ついては四つの柱すべてを映像にとることができたが音声が不明瞭であったため、今回は二之御柱と三之御柱の歌詞のみ記録することが出来た。土搗唄は始まる時に「サヨダ サヨダ サヨダ サヨダ」と掛け声がかかり、唄う人の「イーヤー ●● ネドリガタ」という声がかぶさり唄が始まる。唄いきると「エーイトーコサヨーエー ドーコサーエーイトーコサヨーエー」と氏子全員で唄い、「サヨダ サヨダ…」と最初に戻る。歌詞を表記する上では省略する。

写真 15: 三之御柱地固め中。(2017 年 9 月 24 日 16 時頃　撮影:田中大暉)

【二之御柱】

昔話で話すなら　西行法師の坊様が

初めて都へ登る時　熱田の宮へと腰をかけ

こんなに涼しい森はない　誰が熱田と名をつけましたか

【二之御柱】

今年はめでたい御柱祭(みはしらさい)　七年一度の建て替えで

こんなに嬉しいことはない　沙田様にもお喜び

日本 日本をお守り 頼むぞ

この木遣りの音源は CD トラック 11 に収録する。

【三之御柱】

一に俵を振りまいて　二にはにっこり笑ってる

三に酒をば作ります　四で世の中良いように

五つ泉が湧くように　七つ悩み事ないように

八つで屋敷をたいらねて　九つで ●●を打ち立てて

十(とう)でトントン いきますようにと

この木遣りの音源はCDトラック12に収録する。

「昔話で話すなら…」の歌詞は三之御柱の地固めでも三、四回聞くことがあった。唄う人によって「都へ」「都に」、「熱田の宮」「熱田の森」と歌詞に若干の揺れが見られたものの、大意は変化することない。上條氏から頂いた土搗唄の歌詞集には「昔話で話すなら 西行法師の坊様が初めて都へ登る時 熱田の森にと腰をかけ こんなに涼しい宮はない 誰が熱田と名をつけましたか」と掲載されており、即興ではないが、口頭伝承によって受け継がれていく中で少しずつ変化していく様子が垣間見れたのではないかと思う。また、矢彦神社でも「昔々のその昔 西行法師の坊さんが 初めて都に上るとき 熱田の森にて腰を掛け これほど涼しき森はなし これほど涼しき森に矢を エー 誰が熱田とつけましたか エンヤンサー」と、歌詞が非常に酷似したものが歌われている。

「今年はめでたい…」の歌詞は、一之御柱で建立前に唄われていたものと歌詞が全く同じである。この歌詞以外にも、部分的に木遣りで唄われていた歌詞が土搗唄で唄われていたことが確認できており、リズムにおいては木遣りと異なるが、歌詞の点においては木遣りと土搗唄の間に明確な区切りをつけていないことが分かる。また、この歌詞は地固めの最後に氏子全員で唄っていた。

三之御柱で唄われた「一に俵を振りまいて…」は、土搗唄においては一に…、二に…、三に…、という型を使って唄う様子が二之御柱、三之御柱に共通して数回聞くことができた。ここに掲載した歌詞では六が抜けているが、同じ型の歌詞を二之御柱で聞いた時には「六つ無病息災に」と唄われていた。

以上のように、木遣りの歌詞の種類は大きく分けてお礼のためのもの、御柱祭についてと島立や三之宮といった土地についての三つに分類することができた。また、ここには掲載しきれなかったが、パチンコについてや子を思う親心に関することなどを唄ったやや現代風の木遣りなども一回限りではあるが聞くことができた。しかし御柱祭や土地について唄われた木遣りは、異なる木遣り師が全く同じ歌詞の木遣りを唄う場面もあり、沙田神社では即興の木遣りと既存の木遣りが混合して存在しているのではないかと思った。

土搗唄(どうづきうた)は、木遣りとはリズムが異なり、明確な拍のある唄であるという点で違いが見られるが、歌詞においては共通で使用されることがあることがわかった。西行法師についての唄、一二、三の型の唄というある程度決まった形のある歌詞がよく聞かれたことや、全員が声を揃えて唄う場面が見られたことを考えると、木遣りより即興性が低いのではないかと考える。

第四節　動作に注目した木遣りと土搗唄　担当:岩渕真理絵

この節では、沙田神社の御柱祭において大きな特徴の一つと言える、木遣りと土搗唄を唄う際の動作の豊かさについて述べたい。はじめに木遣りを唄う際の動作について述べる。一之御柱、三之御柱四之御柱において、木遣りを唄う際の動作は基本的に同じであった。以下にまとめたい。

木遣り師は「お願いします」と軽く頭をさげてから唄い始める。采配を右手に持ち、右足を前に出した状態の基本姿勢になる。唄い始めと同時に采配を内回りで三度回したあと、右足を軸に左足を前に出し、体の向きを若干変更しながら采配を外回りで算用数字の 3 を描くように腕を広げながら一周半振り、同時に左手も広げそのまま両腕を上にあげる。ここまでが木遣り師の一連の動作である。一方、氏子たちは木遣りが始まると立った状態で片手に采配を持ち、もう片方の手も采配を持つように構え待機している。唄い手が両腕をあげる動作を行うと、歌詞もちょうど区切りの良いところに差し掛かる。そのタイミングで、氏子たちは「オイ！」と掛け声をかけ、構えていた両腕を采配を突き上げるように持ち上げる。この動作を木遣りが終わるまで繰り返す。

祝儀を頂いた際に一之御柱で唄われる木遣りを例に動作と歌詞を照らし合わせてみたい。

さあやるぞ(一回)*

ただいまご祝儀いただいて(二回)* なんとまあお礼を申そうか(三回)*

氏子一同の喜びは(四回)* 七重の膝をば八重に折り(五回)*

〇〇家のご繁盛をお祈りしますぞ エンヤラサ(六回) サーノーエンヤラサー(七回)

この場合、一連の動作は計七回行われる。「オイ！」というかけ声がかかるタイミングは、*の記号が挿入されている位置であり、一連の動作が歌詞の区切れ目とほとんど変わらないことがわかる。「サーノーエンヤラサー」は氏子一同で唄うのだが、その時だけ始めの動作である采配の内回りが三回ではなく二回に減る。一回分減るのは、歌詞の長さに合わせた調節であると推測する。以上のように、基本的な動きは柱によって共通であったが、四之御柱が最も動作が大きく、明確であったように感じる。

基本的な動作は上で述べた通りであるが、唄う内容によって若干の動作の変化が見られた。三之宮を唄うもの、色情を唄うものといった木遣りは四方八方にいる観衆の人たちに聞こえるように途中で体の方向を変える様子が見られたが、祝儀を頂いた際に唄われる木遣りの時のみ体の向きを固定し、祝儀を渡した人たちに向けてのみ唄われているようであった。

次に、建立後に行われる土搗唄を唄う際の動作について述べたい。三節でも軽く触れたが、土搗唄は御柱の周りの地盤を固める地固めと呼ばれる儀式の際に唄われるものである。

今回は一之御柱、二之御柱、三之御柱、四之御柱の地固めを見ることができた。儀式の流れは柱によって大きく変わらないものの、土搗唄を唄う際の動作に柱ごとの特徴が現れていた。一之御柱では唄に合わせて杵で地面を叩きながら、テンポよく柱の周りを回るため、十周以上も柱の周りを回っていた。一方二之御柱と四之御柱は柱の側で土搗唄を唄うもののその場から動くことはなく、ひたすら同じ場所の地面を杵で打っていた。さらに四之御柱においては衣装の異なる集団が隣同士でそれぞれ地固めを行っていた。そして三之御柱では、十分かけて柱の周りを一周していた。どの柱も約十分も続くこの儀式で常に力強い土搗唄が響いており、さらに観衆も多く、儀式が終わると大きな拍手が起きた。特に三之御柱では儀式が終わるとくす玉がわれ、小さな花火が上がっていた。沙田神社における地固めの儀式と土搗唄の御柱祭における重要さは氏子たちの迫力のある土搗唄や観衆の注目度から感じ取ることができた。

地固めにおいて、なぜ柱ごとに差異が現れるのかはわからない。しかし、2018 年 2 月 10 日の「木遣り報告会」では沙田神社の木遣り保存会の方々から木遣りの際に采配を回すのはリズムをとるためだというお話を伺うことができた。ということは、これまで述べてきた動作は唄うことを支える役割を果たしていたということである。これがもし土搗唄が唄われる際にも適応されることとなれば、杵を地面に打ち付けるという動作もリズムをとるための動作なのではないか。「地固め」とは読んで字の通り地を固める儀式であるため、一之御柱や三之御柱のように地を打ちながら柱の周りを回る動作がより理にかなっているように思われる。しかし、リズムをとるために動作が存在するとしたら、時代が経つにつれ柱の周りを回るという要素が排除され、土搗唄を唄いながら杵で地面を打つ動作だけが残っていっても不思議ではないと考える。

おわりに　担当:関島ゆりな

報告書を作成するにあたって、当日は見ることのできなかったそれぞれの柱の比較をすることができた。一之御柱は専属の木遣り師がいないためか、唄い手個人の色が出ている印象、三之御柱は衣装や柱の飾りつけが華やかで木遣り師以外の木遣りも多く披露している印象、四之御柱は第三章第一節で述べたように、認められた者だけが木遣り師となれるためか振りも節回しも丁寧で、比較的ゆっくり聴かせるように唄っている印象を受けた。「支度を見るなら三之宮」というように、柱の装飾や衣

装の華やかさに加えて、柱ごとに味のある木遣りや迫力のある土搗唄など、木遣りの面から見ても「三之宮」らしさが表れているように感じた。考察を通して特に感じたのは、御柱祭を担い、支えている地域を大事にしていることである。それはお礼木遣りを見るとはっきりとわかる。ご祝儀を持っている人がいれば、たった数メートルの差であっても、自転車で不意打ちに現れたとしても、必ず柱を止めて、あるいは柱から降りてお礼木遣りを行っていた。これは動作の面の、お礼木遣りのときだけは身体を固定して、祝儀を渡した方に向けて木遣りを披露していたということからも読み取れる。また歌詞の面からも、地域の協力を呼びかけるものや、普段生活している土地に対する誇りを感じ取ることができるものが見られたことから、地域の支えなしでは御柱祭を催行できないことに対する感謝の気持ちを大事にしているように感じた。

一つ疑問として残ったのは、どうして四之御柱だけが山辺地区から木遣りの指導を受けたのか、ということだ。現在も四つの柱が集まって木遣りの練習をすることはないということだが、それは「三之宮」の地域の広さゆえなのだろうか。各柱で木遣りの色が違うと言っても、やはり四之御柱は一際木遣りおよび木遣り師を重んじている印象を受けたため、他の柱との差異が際立っていた。

また、沙田神社は四柱とも市街地の中を曳行するため、お礼木遣りの際は先述のように柱から降りて、または複数箇所で同時に木遣りを唄う姿も見られた。今回ご協力いただいた北野氏から、近所の方からの声で曳行ルートを変えてきたというお話を伺ったが、それに合わせて木遣りも臨機応変に対応することが求められているのだろう。今後も、御柱祭が伝統を守りつつどのように変化していくのか追っていきたいところだ。

参考文献

武藤清躬『式内社の神々 神のやしろの起源について』朝日新聞出版サービス、1999 年。谷川健一編
谷川健一編『日本の神々 神社と聖地 第九巻 美濃・飛騨・信濃』白水社、2000 年。
「平成 28～29 年度　沙田神社御柱会議　図面綴」式内沙田神社御柱祭実行委員会、発行年不明、上條英雄さんから頂いた資料より。
『信州三之宮式内沙田神社 御柱祭』沙田神社御柱祭記録集編集委員会、2006 年。

橋倉諏訪社

田中大暉

はじめに

松本市内では八つの神社が御柱祭を行っている。中でも入山辺地区を流れる薄川の流域では三つの神社が御柱祭を行っている。2017 年には 4 月 29 日に三社同時での御柱祭が行われた。筆者は橋倉諏訪社の御柱祭に伺い、その様子を見学させていただいた。氏子の方々が代わる代わる御柱の上に立ち、木遣りに熱中している姿が印象的であった。

ここでは、地域の方々がこぞって唄っていた橋倉諏訪社の木遣りがどのようなものであるかを探る。

第一節 橋倉諏訪社

鎮座地・由緒等

橋倉諏訪社の鎮座する入山辺地区は松本市の東にあり、地区の中央を流れる薄川の両側に町が広がっている。城跡が多く点在し、林大城・山家城・桐原城が県史跡として指定されている。

橋倉諏訪社は、入山辺地区において御柱祭を行う三社（大和合神社、宮原神社、橋倉諏訪社）の中で最も東に鎮座している。また、橋倉諏訪社の西に千鹿頭神社、北に須々岐水神社が鎮座している。

本殿背面の三階菱 2018 年 11 月 21 日撮影:田中大暉

社は本殿・幣拝殿・神楽殿からなり、橋倉町会の西寄りの山の中腹に鎮座する。社から 300 メートルほど離れたところには林城跡がある。

境内の案内板では単に「諏訪社」と称し、建南方刀美命（たけみなかたのみこと）を祭神とする。由緒については、「創立年代は不明である 金華山城主小笠原氏の守護神であったと言はれ、本殿背面に小笠原氏の紋所三階菱が刻まれている」と伝える。例祭日は 4 月 29 日である。

なお地元の方は「橋倉諏訪神社」「橋倉神社」と称することがある。本報告書では橋倉諏訪社と表記した。

御柱祭

御柱祭は卯年と酉年の数えで七年ごとに行われる。氏子は橋倉町会三十六戸からなり、城華連とよばれる青年総代が祭りを取り仕切る。氏子たちの法被には城花連とも書かれているものも見られた。

御柱祭では一之御柱・二之御柱の二本を建て替え、古い御柱は半分に切って先端を三之御柱・四之御柱とし、社の後ろに建立する。残った半分は加工して根槌や箱などに再利用するという。なお、橋倉諏訪社の御柱祭は、2000 年に「入山辺橋倉諏訪神社の御柱祭り」として市重要無形民俗文化財に指定されている。

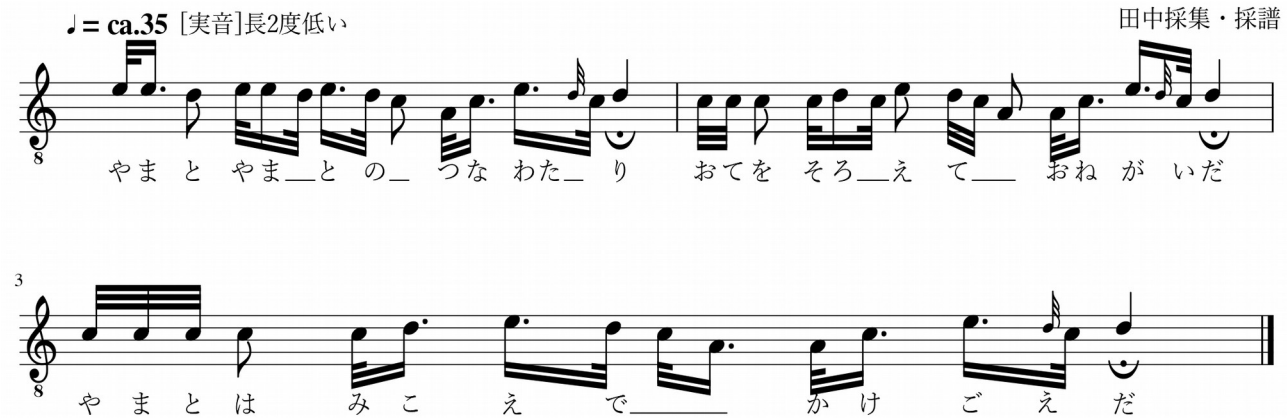
筆者が伺った 2017 年 4 月 29 日の御柱祭当日は、地区の人でなくても御柱祭を体験できるよう、地元公民館において「御柱祭体験講座」が企画されていた。午前 7 時 30 分に入山辺公民館に集合し、午前に曳行を体験し、午後は建立を見学するという内容である。筆者もこれに参加して、当日は公民館に集合した。公民館館長から日程表と采配をいただいた。御柱祭体験講座には、筆者の他には親子が一組参加していた。その方々は、同日に行われた大和合神社の御柱祭の体験講座に申し込んでおり、松本の出身であるが御柱祭を行わない地区であるため、体験講座に申し込んだと話されていた。

第二節　橋倉諏訪社の木遣り

2017 年 4 月 29 日橋倉諏訪社御柱里曳き祭

2017 年 4 月 29 日には、橋倉諏訪社の御柱祭が行われた。曳行に先駆けて、「綱渡り」の唄が唄われた。杣頭を筆頭に五人ほどが御柱の上に並び、采配を回しながら「やまとやまとの綱渡り お手を揃えてお願いだ やまとはみこえで掛け声だ」と唱えた（譜 18）。唄われたあとには、ラッパ隊によるファンファーレが演奏され、祭りの開始が印象づけられた。

譜 18:「綱渡り」（CD トラック No. 13）



入山辺の三社では、御柱祭の開始時と終了時に「やまと」を唄う習慣であり、譜 1 に類似した節回しで唄いついでいるようである。橋倉諏訪社では、譜 1 の「やまと」が唄われた後、御柱の曳行が始まり、その休憩時には木遣りが唄われた。

采配・動作

唄い手は、木遣りを唄う際に采配（さいはい）と呼ばれる棒状のものをもつ。これは、一メートルほどの竹の持ち手の先に五色の色紙をつけたものである。沙田神社の采配と比較すると、より細い竹で作られているため軽量である。唄い手は、この持ち手の端の方を持ち、御柱の上に立って大きく回すため、五色の色紙が周囲の人々の頭上を鮮やかに飛ぶ。

また、唄い手は一節唄うごとに両手を上げ、周囲を見渡すような動作をする。御柱の周囲には、青年たちがかがんで取り囲んでいるため、その人達に向かって語りかけるような動作のようにも見え、それを受けて周囲の氏子たちは「サーエサエ」という掛け声を返す。橋倉諏訪社の木遣りは、周囲の氏子たちの存在がなければ成立しない双方向的な唄のようである。

節回し

橋倉諏訪社の木遣りは、「木遣り皆様御免なよ」、二回目の場合は「木遣り皆様また御免」の文句から始まるものがほとんどであった。この唄い出しは、宮原神社の「イャーレ」という唄いだしと類似している。歌詞のところでは記載を省いたが、二行目以降の各歌詞の前には「ハー」や「ハーエ」といった掛け声のようなものが唄われる。

木遣りの節回しはそれぞれ「ハー」から始まる音域の高い旋律と、「ハーエ」から始まる音域の低い旋律とを繰り返し、高低の抑揚をつけて唄われている。また、一節唄われるごとに「サーエサエ」という掛け声がかけられる。唄い手が唄い終わる際には「イヨー」と伸ばすと、周囲も「イヨー」と応じて斉唱する。その後押し出すような動作をしながら「ヨイサ」を三唱する。

また、橋倉諏訪社の木遣りは、もっぱら御柱曳行の休憩時に唄われており、曳き出しの合図となることはなかった。

ユニークな歌詞

橋倉諏訪社の木遣りでは、様々な歌詞が聞かれた。それぞれ便宜上タイトルをつけた。

「卯酉卯酉」（CD トラック No. 14）

木遣り皆様御免なよ
卯酉卯酉に巡りくる
御柱様の建て替えも
はや本日となりました
老いも若きも幼きも
揃いの法被で勇ましく
木遣り音頭も高らかに
御柱お宮に建てるまで
怪我や口論ないように
力合わせてお願いだイヨ

「松竹梅」（ CD トラック No. 15 ）

木遣れ皆様御免なよ
今日は橋倉の御柱で
お客がたくさん来たのでよ
松竹梅の風呂たてた
ぬるいというときゃ竹にする
熱いというときゃ梅にする
お客がこんだ時ゃ松にする

「卯酉卯酉」は、御柱の曳行が最初の休憩となった際、木遣り師の方によって唄われた木遣りである。卯の年と酉の年、数えで七年ごとに御柱祭を行うことを「卯酉卯酉に巡りくる」と表現し、御柱を神社に建立するまで無事に終えられるよう祈願する内容である。

「松竹梅」の木遣りは、沙田神社でも頻繁に唄われる内容の歌詞であり、風呂を焚く・うめる、お客が多ければ待つとかけた唄である。「松竹梅」の木遣りは、同様の歌詞のものが何度か唄われていた。

橋倉諏訪社で最も多く聞かれたのは「お礼の木遣り」である。御柱は、橋倉町会を一周する間に様々なところで休憩し、そのたびにお世話になった方へお礼の木遣りが唄われている状況であった。中でも、御柱となる木を提供した家である「木元（きもと）様」に対する「お礼の木遣り」は、様々な唄い手によって大量に唄われた。

「〇〇様の御山で」

木遣り皆様御免なよ
〇〇様の御山で
蝶よ花よと育てられ
見事美しい杉こさん
お諏訪様に見初められ
今日はめでたいお嫁入り
〇〇家の皆さんおめでとう
〇〇家の皆さんありがとう
花見の清水で化粧して
氏子みんなで曳きまする
お家の繁盛を祈りますぞイヨ

「着いたところは〇〇家」

木遣り皆様御免なよ
着いたところは〇〇家
御柱青年のまとめ役
〇〇 家の皆さんありがとう
お家の繁盛を祈ります
御柱里曳き城下町
周りを見渡し社まで
無事に曳行するように
皆さん力合わせてお願いだぞよ

「〇〇さまの御山で」は、御柱となる木を提供した木元様に対する「お礼の木遣り」である。御柱が神社に建立されることを嫁入りにたとえ、木元様が大切に育てた杉の木がお諏訪様へと嫁入りするという文脈で唄われる。また、「着いたところは〇〇家」は、御柱祭の準備で活動した方に対して唄われたものである。

唄い手だけでなく、曳き子や周囲の人々も「イヨ」や「ヨイサ」とあわせるので、全員で感謝の気持ちを表現しているようである。特に木遣りを唄い終わった後の「ヨイサ」の三唱は、押し出すような動作をしながら唱えるものだが、杣頭の方によって「この家に福を押し込むようにしてヨイサをお願いしたい」と指示されることもあり、木遣りでお礼をするという意識が感じられた。

また、唄い手オリジナルの歌詞も多く聞かれた。

「とりとりづくし」（CD トラック No. 16）

木遣り皆様御免なよ
卯酉卯酉と巡りくる
今年は酉年で御柱
なので皆さん聞いとくれ
とりとり尽くしで申すれば
長野県の鳥は雷鳥で
砂丘や大山は鳥取県
サラリーマンは給料取り
若手のホープの関取は
長野県出身の御嶽海だイヨ

「一致団結」

木遣り皆様御免なよ
七年一度のお祭りで
御柱曳くのは引き綱で
今日の頼みの綱が青年
青年代表は〇〇さんで
ヨイサの掛け声勇ましく
心ひとつに気を合わせ
一致団結お願いだイヨ

「とりとりづくし」は、酉年に御柱を行うことを踏まえ、「とり」に関連する言葉をかけた唄である。雷鳥、鳥取、給料取り、関取とかけ、最後に長野県出身の御嶽海でオチをつける。「一致団結」

は、御柱が午前の曳行を半分ほど終えた際に唄われたもので、周囲の氏子たちの協力を呼びかけるものである。歌詞に個人名が盛り込まれ、唄い手と聞き手の距離感が近いことを感じる。

他にも様々な歌詞が聞かれたが、「お礼の木遣り」や「松竹梅」といった一部の木遣りを除き、同様の歌詞を二度聞くことはほぼなく、唄い手のオリジナリティーが発揮されている。

「橋倉一周」

木遣り皆様御免なよ
やまとやまとで着きまして
橋倉一周いたしたよ
無事にお宮へ曳きつけた
これよりいよいよ建て前だ
伝統名高き城華連
見事に建て前お願いだイヨ

「詐欺には気をつけて」（CD トラック No. 17）

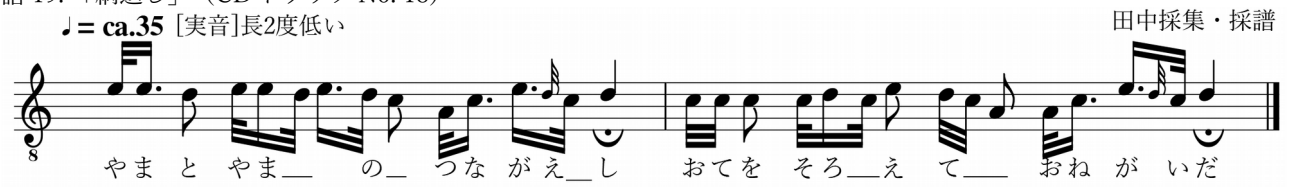
木遣り皆様御免なよ
卯酉卯酉に巡りくる
御柱様の建て替えも
はや間もなくとなりました
去年橋倉に移り住み
一つわかったことがある
坂はきついがみないい人
だから詐欺には気をつけて
安全安心でお願いだイヨ

「橋倉一周」は、御柱が橋倉町会の里曳きを終えて境内に曳き入れられ、間もなく建立となったことを踏まえて木遣り師の方が唄ったものである。

「詐欺には気をつけて」は、若い氏子の方によって唄われた木遣りである。「詐欺には気をつけて」とオチがつくと、周囲から笑いがおこり、場を盛り上げた。

御柱の建立の直前には「綱返し」の唄が唄われた。御柱の上に杣頭を筆頭に四人が並び、「やまとやまとの綱返し お手を揃えてお願いだ」と唱えた。これ以降は木遣りは唄われず、御柱祭の終了が近いことを印象づけられた。「やまと」の節回しは木遣りの節回しと類似しており、後に述べる旋律 B の前半と旋律 D の後半をあわせたような節回しになっている（譜 19）。

譜 19:「綱返し」（CD トラック No. 18）



ここまで見てきたように、橋倉諏訪社の木遣りでは歌詞のオリジナリティが高いことが特徴的である。年配の方から青年の方まで、様々な方が御柱の上に登り、それぞれの木遣りを唄った。また、その場を見て即興で唄うような木遣りも聞かれ、語りに節回しがついたような印象を受けた。

特に、「お礼の木遣り」が多く唄われている。木遣りに個人名が挙げられ、全員に注目されたところで、全員から「ヨイサ」の三唱を送るのは、地域全体がお礼を述べているように感じられる。

また、その他の木遣りも、御柱祭の場を見て唄われるものが多く聞かれた。若手も頻繁に御柱の上に立ち、木遣りを披露して笑いをとるなど、橋倉町会の絆の強さを感じたところである。

第三節 採譜から見た木遣り考察

本節では、橋倉諏訪社御柱里曳き祭において聞かれた木遣りを、主に採譜することによって考察し、橋倉諏訪社の木遣りにいかなる特徴が見いだせるかを述べる。

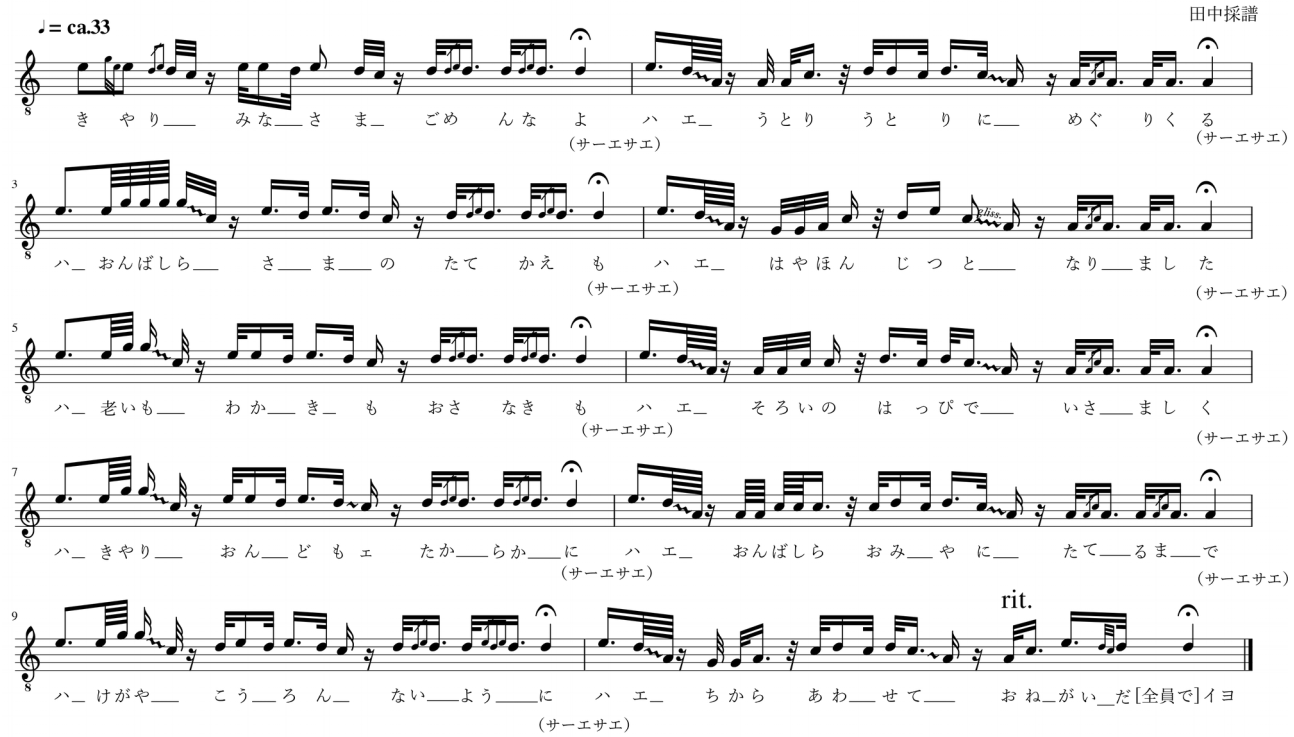
典型的な木遣りの例として、第二節で扱った「卯酉卯酉」の木遣りを例にとって考察した。その結果、橋倉諏訪社で唄われている木遣りは、三つの旋律から構成されていると考えるに至った（図）。以下では、2017 年 4 月 29 日橋倉諏訪社御柱祭で唄われた木遣りを例にとり、それを旋律 B・C・D の三つに分割することによって考察した。また、便宜上歌詞の横に行数を示した。

この木遣りは、御柱祭開始の神事が終わり、「やまと」を唄った後、木遣り師の方によって最初に唄われたものである。音源は CD トラック No. 14 に収録されている。採譜例は譜 20 に記載する。

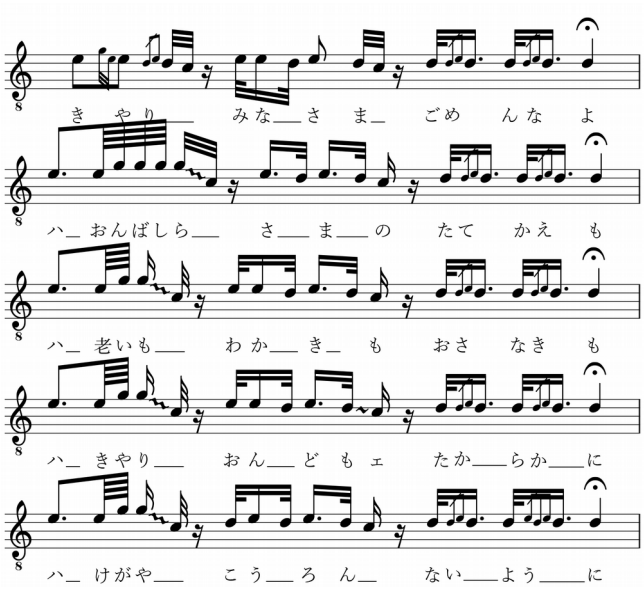
---

① 木遣り皆様御免なよ
② ハーエ　卯酉卯酉に巡りくる
③ ハー　御柱様の建て替えも
④ ハーエ　はや本日となりました
⑤ ハー　老いも若きも幼きも
⑥ ハーエ　揃いの法被で勇ましく
⑦ ハー　木遣り音頭も高らかに
⑧ ハーエ　御柱お宮に建てるまで
⑨ ハー　怪我や口論ないように
⑩ ハーエ　力合わせてお願いだイヨ

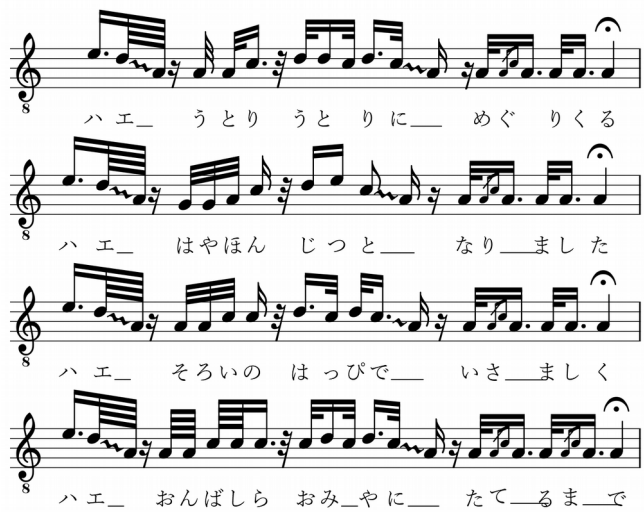
譜 20



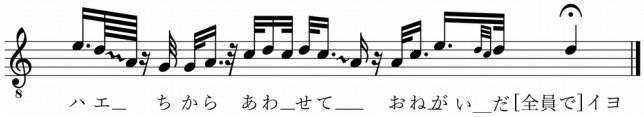
旋律Ｂ



旋律Ｃ



旋律Ｄ



旋律Ｂ

橋倉諏訪社の木遣りは、「木遣り皆様御免なよ」、「木遣り皆様また御免」の歌詞から唄い出すものが大多数のようである。

「①木遣り皆様御免なよ」が唄われると、周囲から「サーエサエ」と合いの手がかかり、唄い手も一呼吸置くため、ここで一区切りと考えた。ほぼド-レ-ミの三音のみで唄われるが、冒頭にソまでの大きな跳躍があり、後に唄われる旋律Ｃとの高低の対比関係をなしている。

ここで、この木遣りにおける「① 木遣り皆様御免なよ」「③ ハー　御柱様の建て替えも」「⑤ ハー　老いも若きも幼きも」など、奇数行の歌詞の旋律を並べると、左の譜面のようになる。これらを眺めると、同様の旋律によって唄われていることがわかる。従って、これらを旋律Ｂと分類した。

旋律Ｃ

「木遣り皆様御免なよ」が唄われた後に「サーエサエ」の合いの手が入り、一呼吸あった。その後、「② ハーエ　卯酉卯酉に巡りくる」と唄われたところでまた「サーエサエ」の合いの手が入り、一呼吸あくため、ここでまた一区切りだと考えた。

旋律Ｂに対して低い音域で唄われ、高低の対比関係をなしている。

ここで、この木遣りにおける「② ハーエ　卯酉卯酉に巡りくる」、「④ ハーエ　はや本日となりました」、「 ⑥ ハーエ　揃いの法被で勇ましく」など、偶数行の歌詞の旋律を並べると、左の譜面のようになる。これらを眺めると、同様の旋律によって唄われていることがわかる。従って、これらを旋律Ｃと分類した。

旋律Ｄ　ここまで、旋律Ｂと旋律Ｃとを交互に繰り返すことによって唄われることを確認した。

しかし、唄い終える際には、旋律Ｂとも旋律Ｃとも異なる旋律を唄い、上の譜面のように唄い終えている。従って、これを旋律Ｄとした（上譜面）。

この旋律は、「力をあわせて」までは旋律Ｃに類似する旋律であるが、「お願いだイヨ」から特徴的な旋律が現れ、唄の終わりを印象づける。「イヨ」は、周囲の氏子もあわせて斉唱し、押し込むような動作とともに力強く唄い終える。この後は唄い手の掛け声によって「ヨイサ」の三唱に繋げられる。

以上の特徴をまとめると、下図のようになる。

(図) 橋倉諏訪社の木遣りのイメージ

<table>
<tr><td rowspan="5">歌詞</td><td rowspan="5">（なし）</td><td>① 木遣り皆様御免なよ</td><td>② ハーエ　卯酉卯酉に巡りくる</td><td rowspan="5">⑩ ハーエ　力合わせてお願いだ[全員で]イヨ</td><td rowspan="5">ヨイサ、ヨイサ、ヨイサ</td></tr>
<tr><td>③ ハー　御柱様の建て替えも</td><td>④ ハーエ　はや本日となりました</td></tr>
<tr><td>⑤ ハー　老いも若きも幼きも</td><td>⑥ ハーエ　揃いの法被で勇ましく</td></tr>
<tr><td colspan="2">(…略…)</td></tr>
<tr><td>⑨ ハー　怪我や口論ないように</td><td>（なし）</td></tr>
<tr><td>旋律</td><td>なし</td><td>B</td><td>C</td><td>D</td><td>なし（掛け声的）</td></tr>
</table>

五つの旋律をもつ沙田神社の木遣りと比較すると、唄いだしに相当する旋律Ａと、唄い終わったあとの旋律的掛け声である旋律Ｅがない。

旋律Ｂ・旋律Ｃを繰り返して唄い、最後に旋律Ｄを唄って終える形式は、他の松本市内の神社の木遣りと類似するところであり、矢彦神社の「甚句」とも共通する。御柱の曳き出しの合図とはならず、もっぱら休憩時に唄われるという点も、矢彦神社の「甚句」や松本市内各社の木遣りと共通するところである。

おわりに

橋倉諏訪社の木遣りは唄い手オリジナルの歌詞が多く、その場を見て唄うものが多いようである。固定的な歌詞はほとんどなく、唄い手によって歌詞が無限に生み出されるといっても過言ではない状況があった。

また、木遣りを通じて感謝の表現をする点は、他の神社でも耳にするところであるが、橋倉諏訪社の「お礼の木遣り」では「〇〇さんありがとう」「〇〇さんおめでとう」などくだけた表現も使われ、ほとんど話しかけるようにして唄われるところが特徴的である。木遣りをある種のコミュニケーションの道具として用いているようでもあり、木遣りのあり方が地域によって全く異なることを感じる。

木遣りの歌詞では個人名も頻繁に唄われ、唄い手と周囲の氏子たちの距離が近かった。橋倉諏訪社の木遣りのあり方には、橋倉町会三十六戸の絆の強さが現れているようである。

参考文献

太田真理「須々岐水神社御柱祭関係用語集」『長野県民俗の会通信 238 号』2013 年。
「松本市文化財ホームページ 松本のたから ～受け継ぎ伝える郷土の文化財～ 入山辺橋倉諏訪神社の御柱祭り」
<http://takara.city.matsumoto.nagano.jp/city/182.html>(2018 年 2 月 8 日閲覧)

宮原神社

田中大暉

はじめに

宮原神社は、松本市入山辺地区で御柱祭を行う三社のうちの一社であり、橋倉諏訪社の東に、大和合神社の西に位置する。 2017 年には 4 月 29 日に三社同時での御柱祭が行われた。

宮原神社の木遣りでは、木遣りを唄っている横で御柱に腰掛ける子どもがいるなど、和やかな雰囲気で唄われている姿が印象的である。ここでは、宮原神社の木遣りがどのようなものであるかを探る。

第一節 宮原神社について

鎮座地・由緒等

宮原神社は松本市東部の入山辺宮原に鎮座する。入山辺地区には御柱祭を行う神社が三社あり、地区を流れる薄川の上流から順に、大和合神社・宮原神社・橋倉諏訪社となっている。三社は地理的にも近いため、御柱祭の行程や木遣りの節回しなどについては共通点が多いようである。

建御名方富命（たけみなかたとみのみこと）および菊理姫命（きくりひめのみこと）を祭神とし、大同 2 年（807 年）に坂上田村麻呂が諏訪明神の分霊を勧請したといわれる。明治 42 年（1909 年）には駒越集落の氏神である駒越神社が宮原神社に合祀された。宮原神社の祭神は宮原大明神、駒越神社の祭神は駒越大明神とよばれ、ともに諏訪明神の分霊といわれる。

氏子（祭りの担い手集団）は、薄川左岸の宮原、舟付、右岸の駒越、千手、中村、寺所、竹ノ下、包石の八集落一五〇軒からなる。柱の受け持ちは決めず、すべての柱を全員で協力して順番に行うという。

御柱祭

御柱祭は卯年と酉年の数えで七年ごとに行われる。祭りの前年には伐採から山出しを行い、建て御柱の年に里曳きと建て方が行われる。なお、宮原神社の御柱祭は、2000 年には市重要無形民俗文化財に指定されている。

御柱は薄川の右岸から二本、左岸から二本伐採される。右岸のものを千手御柱、左岸のものを宮原御柱と呼ぶ。四本の御柱のうち、もっとも太いものを一之御柱とする。一之御柱・二之御柱は太く、三之御柱・四之御柱は細い。一之御柱は坂の下から、二之御柱は宮原神社より高い位置の坂から曳く古い御柱を三之御柱、四之御柱とする神社もあるが、宮原神社ではすべての御柱を一度に新しくする。

曳行の際の掛け声は、曳き始めに「お願いだ」とかけ、曳き子たちが「ヨイサ」「ヨイサ」と曳行する。梃子棒を使う際の掛け声も「ヨイサ」である。

笹鳥居に御柱を並べる際には、根を西に向ける。笹鳥居に並べる際は、根の方から見て四之御柱、三之御柱、二之御柱、一之御柱の順になる。

地元の方によれば、建立の際に御柱をチェーンソーで削る行為は、穢れを落とすようなものであるという。根づちは今まで建っていた御柱から作られたもので、打つのは両親が揃っていて独身の男性と決まっている。

また、宮原神社の御柱祭では、ラッパによる演奏が行われる。消防団員の方によれば、ラッパの演奏を行うには、ポンプ隊かラッパ隊に所属しなければならないという。所属隊員数は約 70 名で、ラッパ隊としての実働数は約二十名であるという。マウスピースだけで音をだすため、六つの音しか出すことができないが、曲のレパートリーは行進曲、儀礼曲（三曲）、表彰曲など様々ある。

第二節　木遣り

宮原神社の木遣り

氏子の方は木遣りを唄う際に采配（さいはい）と呼ばれる棒を持つ。宮原神社では、采配のことも木遣りと呼ぶ。宮原神社の木遣りとしては、曳行の開始に先立って唄われる「大和、大和の綱渡りー。よーい声だ、わっさりと、いま一声のおやといだー」という「ヤマト」が記録されている。

ヤマトが唄われた後は、曳行に向けて出発木遣りが唄われる。これは「ィヤーレ皆様ごめんなヨーアーェー年月流れて今ここに…」とはじまり、「ハー千手の山で幾歳の ハーェー聳え立ちたる大木でハー新井家様の大木で　ハーェー宮原神社に見初められ」と御柱を褒め称える唄であり、道中の無事を祈願すると記録されている。建立完了後は「やっと大和の綱返し　よーい声だ、わっさりと、いま一声のおやといだー」と声がかけられる。この際は木遣りは逆さまに持つ。

木遣り師は、オレンジ色の法被に鉢巻きをしめ、采配を持つ。子供木遣りがあり、その人数は平成 17 年には十名、23 年には十一名、29 年には二十二名と増えてきている。

木遣りは声が響き、通ることが重要であるとされる。また、女性の木遣りも認められているが、恥ずかしいという理由で唄う人がいないという。

正規の木遣りは采配を目の上の高さに掲げ、右に二周、左に二周回して唄うものであるが、采配が重くて難しいという。足の運びは、左・右・左・右と交互に入れ替える。

御柱祭で唄われた木遣りは、歌詞は即興であるという。子供木遣りのみは歌詞が決まっており、一番から三番まである。

唄い始めは「イャーレ」で唄い始め、間に「ハー」というときはまだ続きがあり、周りの合いの手は「サイサイ」とかける。「ハーェ」というときはオチがつき周りは「イェー」と締める。

よく出るフレーズとしては、「怪我ないように」「早くお願いだ」「わっさりと」「今一声のお宿だ」「やまと」などある。土地のことを唄ったり、先に木遣りを唄った人を褒めたりすることもある。けなしや皮肉はしない。

なお、宮原神社では、平成 17 年（2005 年）から木遣り保存会が設けられている。

2017年4月29日宮原神社御柱里曳き祭

2017年4月29日には、宮原神社の御柱里曳き祭が行われた。午前7時10分に一之御柱前に集合、7時30分に宮司さんのお祓い・神事が行われた。一之御柱は、7時35分に花火とともに曳行が開始され、7時45分には休憩があった。ここでは4名の唄い手によって木遣りがあげられたほか、子供木遣りも披露された。7時55分には再度出発し、8時20分には御柱に曳行のための台車を導入した。この際にも木遣りが披露され、大人の木遣りに加え、別の歌詞による子供木遣りが披露された。8時38分ごろには再び出発し、8時45分に木遣りをはさみ、午前9時には宮原神社前に到着した。台車が外され、駒越の木遣り、子供木遣りが披露された。9時25分には「スイッチバック」を行い、9時35分には笹鳥居に曳き入れ、安置した。

また、二之御柱では、午前9時50分に「ヤマト」、木遣りが唄われ、10時に曳行が開始された。10時10分には笹鳥居に曳きつけられ、安置された。三之御柱・四之御柱は、主に子どもたちによって曳行された。一之御柱の建立は、13時35分に開始され、神事の後に根を整形し、根づちを打つ。14時10分には御柱の建立が完了し、石を入れて固めた。14時55分には地固めを行い、一之御柱の建立は完了した。15時45分には全ての御柱の建立が完了した。

今回の御柱里曳き祭では、次のような木遣りが聞かれた。便宜上タイトルを付けた。

曳行に先駆けて「やまと」が唄われたものと思われるが、今回は記録することができなかった。御柱の曳行の休憩時には、御柱の上に立ち、木遣りを披露した。次のようなものが聞かれた。

「今日は日もよし天気良し」

イャーレ皆様ごめんなよ
今日は日もよし天気よし
七年一度の御柱
宮原神社もお喜び
難場難場もあるけれど
怪我ないようにとお願いだイエ

「車づくし」

イャーレ皆様ちょとごめん
秋に唄った先生は
身振り手振りも鮮やかに
うまい文句で盛り上げた
そこで私も真似をする
づくし数あるその中で
車づくしで申するなら
くるくる回るは風車
ゴトゴト回るは石車
淀の川瀬の水車
[?]の女の口車
それに私が乗っかれば
とどのつまりは火の車イヨ

「今日は日もよし天気良し」は、子どもたちによって唄われた「子ども木遣り」である。「三番いくからな」とアナウンスがされてから、御柱の上に一列に並んだ十人ほどの子どもたちによって斉唱された。周囲の大人たちの雑談や笑い声なども聞こえ、和やかな雰囲気のうちに唄われた。

「今日は日もよし天気良し」が唄われた後、様々な唄い手によっていくつか木遣りが披露された。「車づくし」はそのうちの一つである。木遣りの歌詞では「づくし」と呼ばれるものが多く唄われるが、その中での車づくしとして唄われ、風車、石車、水車、口車とかけ、火の車とオチを付ける。

その後曳行が進み、御柱が建立となった際には、その場に合わせた木遣りが披露された。

「昨年春より始まった」（CD トラック No. 19）

イャーレ ご一同の皆様よ
昨年春より始まった
七歳一度の御柱も
ここで建立で締めくくり
氏子の怪我もなく安全に
氏子一同のお力で
無事に祭も終わります
向こう六年健康で
じき[？]ご繁栄を祈りますイエ

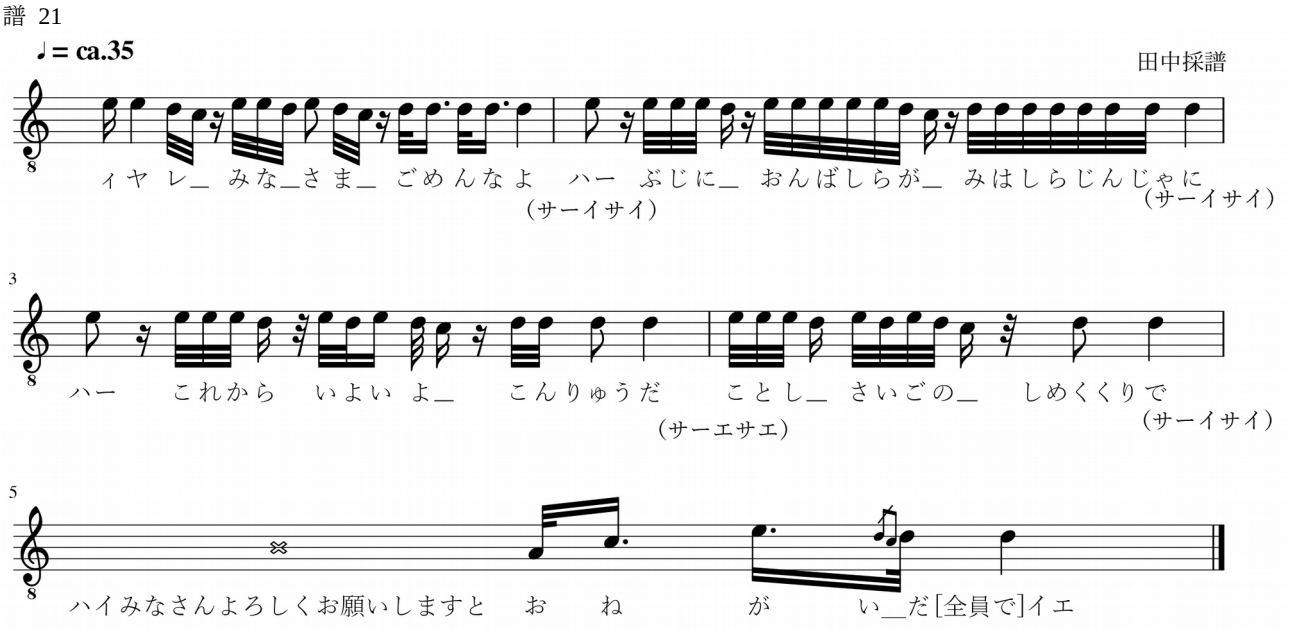
「これからいよいよ建立だ」

イャーレ 皆様ごめんなよ
無事に御柱が御柱 [？] 神社に
これからいよいよ建立だ
今年最後の締めくくりで
皆さんよろしくお願いしますとお願いだイエ

「昨年春より始まった」は、御柱の建立を目前に控え、境内に曳き入れられた御柱の上で唄われたものである。数えで七年に一度行われる御柱祭が無事に終わることを唄い、次回の御柱祭までの六年間の氏子の方々の無事を祈る歌詞である。

「これからいよいよ建立だ」では、御柱が無事に宮原神社まで曳きつけられたことを踏まえて唄われた。ほとんど語りのような唄い方であり、途中旋律がなくなり（譜面上×で記載）、「お願いだ」の旋律のみ唄って終わる。宮原神社の木遣りでは、節回しよりも歌詞の意味内容に重点が置かれているような印象を受ける。採譜は譜 21 に記載する。

譜 21



第三節 採譜から見た木遣り考察

本節では、宮原神社御柱里曳き祭において唄われた木遣りを、主に採譜することによって考察し、宮原神社の木遣りにいかなる特徴が見いだせるかを述べる。

典型的な木遣りの例として、宮原神社御柱祭の木遣りを例にとって考察した。その結果、宮原神社で唄われている木遣りは、三つの旋律から構成されているものと、二つの旋律から構成されているものとの二種類があると考えるに至った（図1、図2）。以下では、2017年4月29日宮原神社御柱祭で唄われた木遣りの中から例を採り、それぞれI、IIとして考察する。

また、便宜上歌詞の横に行数を示した。

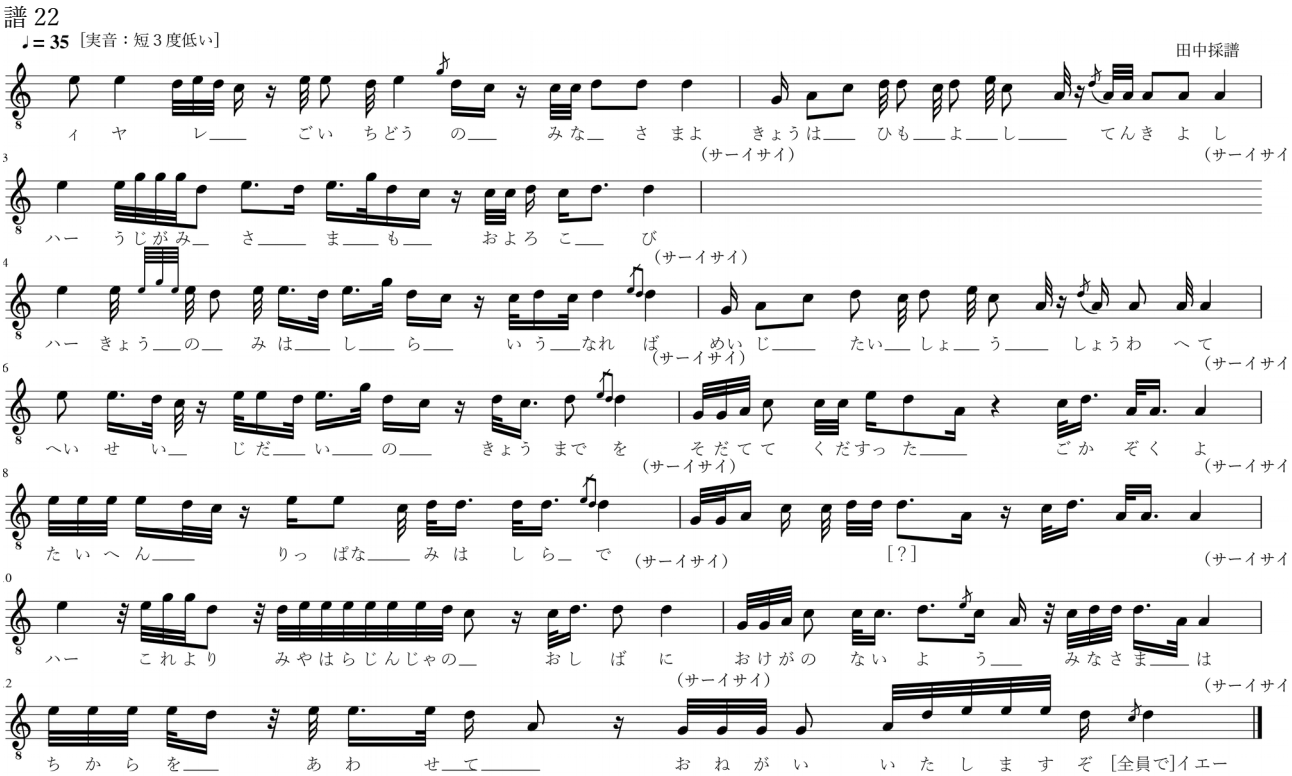
三つの旋律からなる木遣り（I）

御柱を笹鳥居まで曳きつけ、路上で休憩となった際に多数の木遣りが披露された。そのうちのひとつを例にあげて検討する。譜例は譜22に記載する。（CDトラックNo. 20）

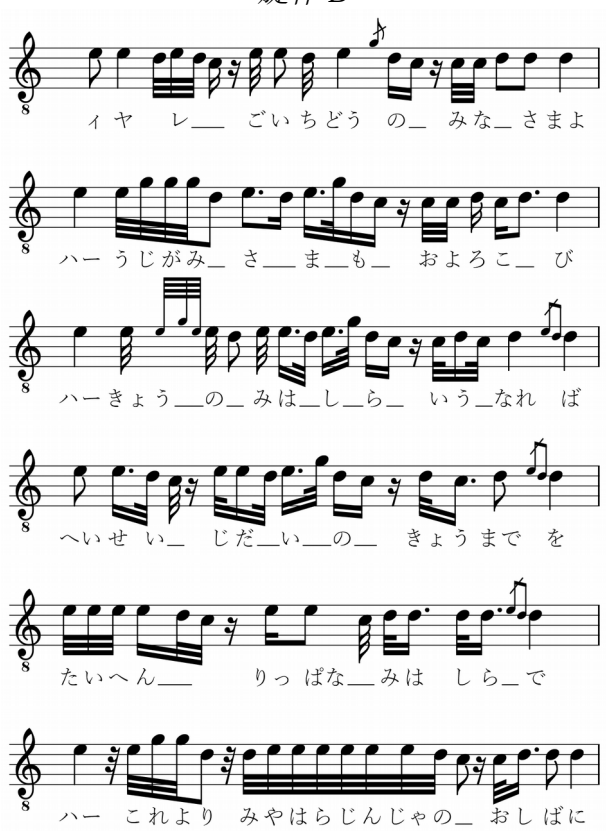
---

① イャーレ ご一同の皆様よ
② 今日は日もよし天気良し
③ 氏神さまもお喜び
④ 今日の御柱いうなれば
⑤ 明治大正昭和経て
⑥ 平成時代の今日までを
⑦ 育てて下すったご家族よ
⑧ 大変立派な御柱で
⑨ [?]
⑩ これより宮原神社のお芝に
⑪ [?] ないよう皆様は
⑫ 力を合わせてお願い致しますぞエ

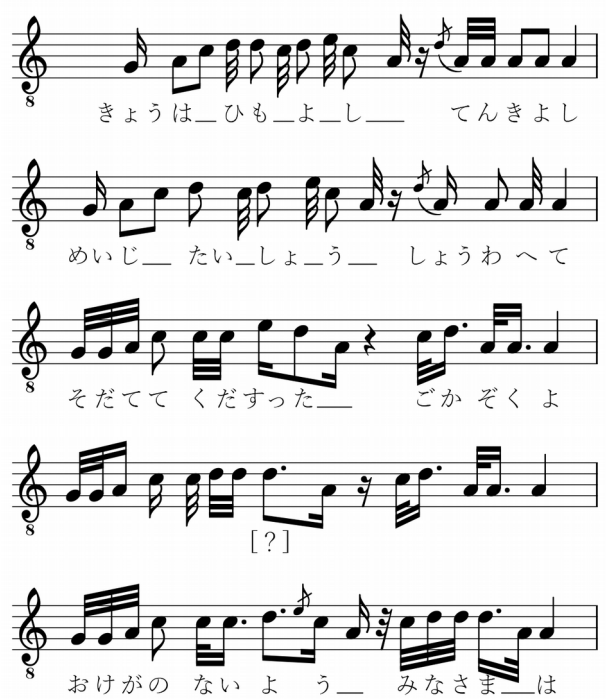
譜22



旋律B



旋律C



旋律Ｂ

宮原神社の木遣りは、「イャーレ皆様ごめんなよ」という、橋倉諏訪社の木遣りの唄い出しとほぼ同様の歌詞が多く聞かれたが、「イャーレご一同の皆様よ」、「イャーレ皆様ちょとごめん」など様々な唄い出しが聞かれた。

「①イャーレご一同の皆様よ」が唄われると、周囲から「サーイサイ」と合いの手がかかり、唄い手も一呼吸置くため、ここで一区切りと考えた。ほぼド-レ-ミの三音で唄われるが、冒頭か中ほどにソまでの大きな跳躍があり、後に唄われる旋律Ｃとの対比関係をなしている。

ここで、この木遣りにおける「① イャーレ ご一同の皆様よ」、「③ 氏神さまもお喜び」、「④ 今日の御柱いうなれば」などの旋律を並べると、左の譜面のようになる。これらを眺めると、同様の旋律によって唄われていることがわかる。従って、これらを旋律Ｂとした。

旋律Ｃ

「①イャーレご一同の皆様よ」が唄われたあとに「サーイサイ」の合いの手が入り、一呼吸あった。その後、「今日は日もよし天気良し」と唄われたところでまた「サーイサイ」の合いの手が入り、一呼吸あくため、ここでまた一区切りだと考えた。

旋律Ｂに対して低い音域で唄われ、高低の対比関係をなしている。

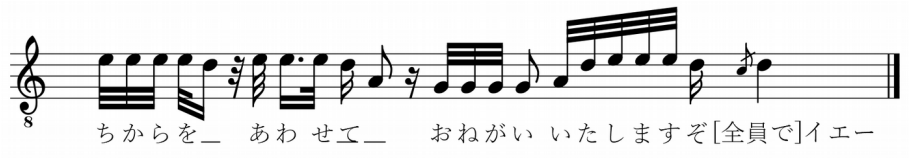
ここで、この木遣りにおける「② 今日は日もよし天気良し」、「⑤ 明治大正昭和経て」、「 ⑦ 育てて下すったご家族よ」などの旋律を並べると、左の譜面のようになる。これらを眺めると、同様の旋律によって唄われていることがわかる。従って、これらを旋律Ｃと分類した。

旋律Ｄ

ここまで、旋律Ｂと旋律Ｃとをほぼ交互に繰り返すことによって唄われることを確認した。

しかし、唄い終える際には、旋律Ｂとも旋律Ｃとも異なる旋律を唄い、次の譜面のように唄い終えている。従って、これを旋律Ｄとした。橋倉諏訪社とは異なり、この後に「ヨイサ」は行われない。

旋律D



以上の特徴をまとめると、下図のようになる。

(図 1) 宮原神社の木遣り（I）のイメージ

歌詞	（なし）	① イャーレ 一同の皆様よ	② 今日は日もよし天気良し	⑫ 力を合わせてお願い致しますぞ [全員で] エ	（なし）
		③ 氏神さまもお喜び	（なし）		
		④ 今日の御柱いうなれば	⑤ 明治大正昭和経て		
		(…略…)			
		⑩ これより宮原神社のお芝に	⑪ [?]ないよう皆様は		
旋律	なし	B	C	D	なし

五つの旋律をもつ沙田神社の木遣りと比較すると、唄いだしに相当する旋律 A と、唄い終わったあとの旋律的掛け声である旋律 E がない。

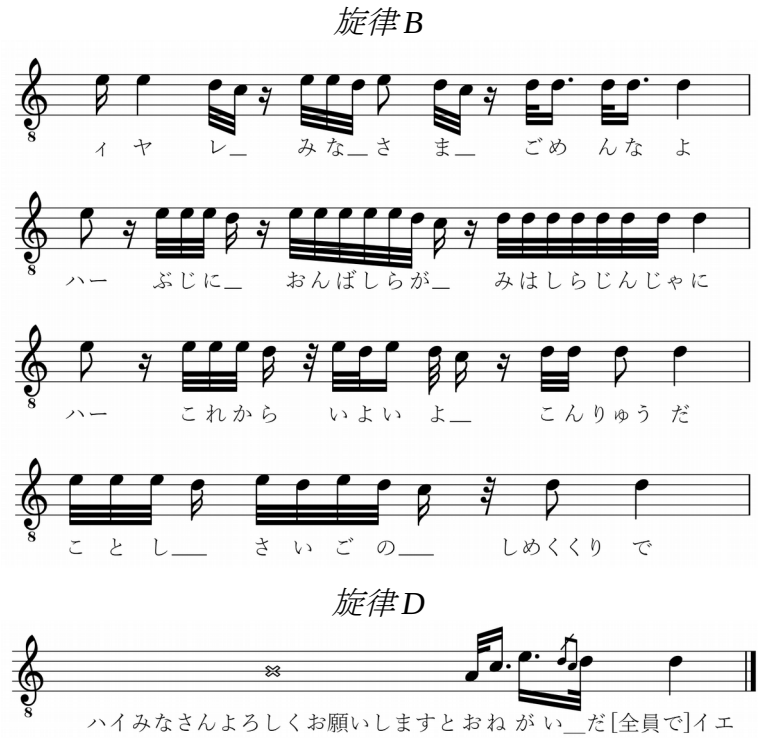
旋律 B・旋律 C を繰り返して唄い、最後に旋律 D を唄って終える形式は、他の松本市内の神社の木遣りと類似するところであり、矢彦神社の「甚句」とも共通する。また、旋律の唄いだし、最高音、唄い終わりなどの音程は橋倉諏訪社のものと共通するところが多い。

二つの旋律からなる宮原神社の木遣り（II）

御柱を神社境内に曳き込み、これから建立となる際にいくつか木遣りが披露された。そのうちのひとつを例にあげて検討する。全体の譜例は第二節の 21 に記載されている。

---

① イャーレ 皆様ごめんなよ
② ハー　無事に御柱が御柱[?]神社に
③ ハー　これからいよいよ建立だ
④ 今年最後の締めくくりで
⑤ ハイ　みなさんよろしくお願いしますとお願いだイヨ



旋律B

「①イャーレ 皆様ごめんなよ」と唄われると、周囲から「サーイサイ」と合いの手がかかり、唄い手も一呼吸置くため、ここで一区切りと考えた。節回しはIの木遣り同様である。

ここで、この木遣りにおける「①イャーレ 皆様ごめんなよ」、「②ハー 無事に御柱が御柱[?]神社に」、「③ハー これからいよいよ建立だ」、「④今年最後の締めくくりで」の旋律を並べると、左の譜面のようになる。これらを眺めると、同様の旋律によって唄われていることがわかる。従って、これらを旋律Bとした。

Iの木遣りとは異なり、旋律Cとの対比関係がないため、唄というよりも語りに近い印象を受ける。

旋律D

ここまで、旋律Bを繰り返すことによって唄われることを確認した。

しかし、唄い終える際には、それまでとは異なる旋律を唄い、上の譜面のように唄い終えている。従って、これを旋律Dとした（上譜面）。

この唄い手の場合、ほとんど話すようにしているため譜面上×で記したが、「お願いだ」の部分の特徴的な旋律は採譜したように唄われており、唄の終わりを印象づけている。

木遣り（II）は、木遣り（I）が唄われていたところ、自然と低い方の旋律が省略され、旋律Bだけになったものであろうか。宮原神社では、木遣り（II）の方が唄われることが多いように感じられたが、唄い分けなどは不明である。

全体として、歌詞が唄い手ごとに異なっており、固定的な歌詞はあまり唄われない印象を受けた。以上の特徴をまとめると、下図のようになる。

(図2) 宮原神社の木遣り（II）のイメージ

歌詞	（なし）	① イャーレ 皆様ごめんなよ	（なし）	⑤ハイ　みなさんよろしくお願いしますとお願いだ [全員で]イヨ	（なし）
		② ハー　無事に御柱が御柱[?]神社に			
		③ ハー　これからいよいよ建立だ			
		④ 今年最後の締めくくりで			
旋律	なし	B	なし	D	なし

おわりに

宮原神社の木遣りは、音域も狭く、ほとんど語りに最低限の節回しがついたもののように聞こえた。歌詞の内容も、形式張った文句はあまり聞かれず、むしろ普段の会話に近い言葉が多く聞かれた。音域の狭い節回しも相まって、宮原神社の木遣りは、御柱の上に立った唄い手と、周囲を取り巻く聞き手との対話のようにも思えた。

参考文献一覧

太田真理「須々岐水神社御柱祭関係用語集」『長野県民俗の会通信 238 号』2013 年。
著者不明、宮原神社資料。
「松本市文化財ホームページ 松本のたから ～受け継ぎ伝える郷土の文化財～ 入山辺宮原神社の御柱祭り」
<http://takara.city.matsumoto.nagano.jp/city/181.html>(2018 年 1 月 9 日閲覧)

須々岐水神社

木下和幸

平田くるみ

はじめに　担当:木下和幸

2017 年 5 月 5 日に行われた須々岐水神社御柱祭について報告する。この御柱祭は、一の御柱と二の御柱に分かれているが、今回は二の御柱を取材した。

映像で見る諏訪の御柱祭に比べると、地域の中で行われているお祭りという印象を受けた。木遣りについては、ほかの神社の木遣りと比べると長く、ある種、物語性を持った歌詞だと思われる。そして、木遣りの担い手の方たちが里山辺という地域の中で、どのように生活し、地域を見守る須々岐水神社や薄川に対してどのような思いを抱いているかどうかがこちらにも曖昧ではあるが感じ取れた。

本報告書では、第一章にて須々岐水神社の概要について、第二章では御柱祭の行程、第三章では木遣り関連のことについて報告する。

また、本報告書の執筆にあたり、2017 年の御柱祭の湯ノ原町会年長の石川和也さん、薄町町会の西村侊哉さんに貴重なお話を伺うことができた。

第一章　須々岐水神社について　担当:平田くるみ

所在地、歴史

須々岐水神社は、長野県松本市の東部にある美ヶ原高原の麓を流れる薄川のほとり、里山辺地区に位置する神社である。薄川は美ヶ原高原を源とする一級河川で、須々岐水神社のあるあたりは、薄川が作る扇状地の中央部であるが、川の水を利用して早くから水稲耕作が行われた。

また、後述の薄宮大明神が祀られていた「穂屋野」という地名は『信濃地名考』に「諏訪郡三才山神戸(ガウド)の東八ヶ嶽の麓の原をほや野と云　又筑摩郡松本の東薄水の神のいます處を保也野と云」とあることをはじめ、諏訪大社下社の御射山祭との関連が指摘されており、古来諏訪大社と須々岐水神社の間に、霧ヶ峰高原を経由しての繋がりがあったことが窺われる。また、太古「須々岐水ノ神」が祀られていたという「古原」という社地には現在、須々岐水神社の「古宮」が祀られており、「穂屋野」は現在では「大明神平」と呼ばれ、須々岐水神社「奥社」が祀られ、その来歴を伝えている[18]。

18　太田真理（2013）「須々岐水神社の御柱祭」，『長野県民俗の会会報』第 35 号，97 頁～100 頁。同前，98 頁，99 頁。

祭神

須々岐水神社の祭神は建御名方神と素戔嗚命である。この神社の名前が初めて文献に見えるのは『日本三代實録』であり、そこには、それまで正六位であった須々岐水の神が、梓水の神とともに従五位下に位階が上がったことが記されている。これによって、須々岐水神社の創始が平安時代初頭に遡ることは確認できる。

須々岐水神社の由緒については、宮司である上條家所蔵の文書に書かれている。これによると、「須々岐水ノ神」は元々土地の水神であったものが「諏訪明神」として祀られていたという。これに対し、薄川上流「穂屋野」の地に祀られていた「薄宮大明神」と称する出雲の神(素戔嗚命)が薄川を下って「薄畑」に移り、やがて現在の地に合祀されたのが現在の須々岐水神社であるといわれている。

諏訪の神である建御名方神は日本神話の「国譲り」の時に出雲から諏訪に来た神であるため、その祖神である素戔嗚命と結びつくことに矛盾はないと言えるだろう。素戔嗚命を主人公とする八岐大蛇退治の説話において、大蛇の来襲を川の氾濫と捉え、それを退治した素戔嗚命が治水の神とされたことと、水神である「須々岐水ノ神」とが自然に結びついたものと考えられている[19]。

須々岐水神社御柱祭概要

須々岐水神社の御柱の数は四本で、長さは五丈五尺(約十七メートル)であるが、御柱祭が行われる際、四本の柱のうち二本だけ(一の御柱と二の御柱)を新しく建て替える。三の御柱と四の御柱は、それまで六年間建ててあった一の御柱と二の御柱の根元の部分から、建御柱の際に根元を突き固めるときに使う「根槌」を切り出して、上部を訳七メートル残し、三の御柱、四の御柱として建て替える。その際、一の御柱を四の御柱、二の御柱を三の御柱とする。これにより、一本の御柱は十二年間御柱としての役目を担うことになる。

用材として、かつては松が用いられたこともあったが、最近では杉が用いられることが多く、表皮を剥ぐ白木作りである。また、御柱の根元は木の根を地中から掘り出し太く残している。これは「男作り」と呼ばれる木作りの方法で、根元を残すことで細い用材でも大きく見える効果があると考えられている。

須々岐水神社の一の御柱(町会: 薄町、下金井、荒町、西荒町、兎川寺)と二の御柱(町会: 上金井、藤井、湯ノ原、新井)は、5月5日の建御柱に向かって行事を進めるが、互いに相談したり共同したりすることはほとんどないという[20]。

19　同前，98頁，99頁。
20　同前，101頁～105頁，115頁。

組織

御柱祭の組織としては、まず、実働部隊である青年、中老、壮年があり、そしてどちらかというと町会寄りの御柱総代がある。

青年というのは三十歳までの男性で、町会に託され、祭りを取り仕切る。だが、青年は、高齢化のためか、少なくなっており、運営状態が芳しくない町会もある。青年のまとめ役が年長と呼ばれる職である。青年が少ないために木遣りの唄い手が少ない場合、他の世代の人に唄うようお願いしたり、自身がより多く唄ったりするのは年長の仕事のうちの一つだ。そして、御柱祭を行うころにはすでに決まっている次の年長が次年長と呼ばれる。

中老は、前回の御柱年長までの世代のことだ。人数が少なくなりつつある青年を支え、木遣りを教えることもあるという。その一つ上の世代が壮年と呼ばれる。

写真 16: 須々岐水神社御柱祭が始まる直前。

（2017 年 5 月 5 日　撮影:木下）

御柱の運営方法は町会によって違う。青年と他の世代で協力してやっていく町会もあれば、青年にこだわらず、町会として祭りを運営する町会もある。

第二章　各御柱の行程について　担当:木下和幸

先述したとおり、今回の調査では一人しか行くことができず、二の御柱は筆者が見てきたままのことを記すが、一の御柱については調査できなかったため、一の御柱については省略する。

二の御柱の担当町会は、上金井、藤井、湯ノ原、新井である。筆者は、朝 6 時 30 分、御柱置き場である美ヶ原温泉内の「そば庵　米十」の駐車場の近くに着いた。まだ太陽も顔を出してない早朝から既に御柱の周りには各町会の人々が集まっていた。そして 7 時になると、木遣りが唄われ始める。非常に静かな空間だったので、木遣りを

唄う人の声が広く響き渡った。木遣り唄が何曲か唄われたあとは、各町会の人々が御柱の周りに群がって、町会の人々はもちろん、一般の人々も協力を仰がれ縄を持ち、町会からの代表各一人ずつが御柱の上に立つ。そして、7時30分ころ、「やまと」（御柱出発前の唄）が唄われ、唄い終わると縄がひかれ始める。「せーのこい！」と御柱に乗っている人が号令をかけると、ほかの人々が「おいさ」と叫んで大きく縄を曳く。縄が順調に動き出すと、御柱に乗っている人も「おいさ」と叫ぶようになり、声の掛け合いが早くなる。この掛け合いは、たとえ目を閉じて聞いていたとしても、御柱を曳かれていく様子が瞼の裏に映し出されるようだった。

御柱は、まず、アルピコタクシー湯ノ原営業所前で一旦停止する。7時50分頃のことである。停止すると、各町会、木遣りをそれぞれ唄う。9時30分頃、その後の休憩で新井権現様前に停止する。ここでは酒や軽食が出される。この場でも木遣りが唄われる。

写真 17: 写真２　湯ノ原アルピコタクシー営業所付近曳行中。（2017年5月5日　撮影:木下）

10時頃ふたたび出発するが、ここからは御柱に車輪がつけられ曳かれていく。

笹鳥居前への御柱の曳き付けが完了したのは11時30分頃だった。曳き付けが完了したあとは木遣りが唄われた。「七年一度」、「里山辺」「怪我がないように」など定番のような言葉もたくさん聞いたが、なかには面白く個性的なフレーズもあった。自分と同じような年齢に見える若い人からかなりのご高齢の方まで、幅広い年齢層が木遣りを唄った。木遣りを唄う周りの人々が場の雰囲気を盛り上げているところが印象に残った。

木遣りが唄い終わった後の神事が終わると、二の御柱は町会ごとのお昼休憩になるが、そこでも木遣りは唄われていた。休憩が終わると、神社への曳き込みが始まった。その最中、数回停止し、毎回木遣りが唄われ、御柱の建立の場まで曳き付けられる。

その後、御柱についている曳くための綱が外され、斧で御柱が何回か削られ、16時頃、建立が完了する。

第三章　木遣りについて　担当:木下和幸

本章執筆にあたり、2018 年 1 月 19 日、里山辺公民館にて 2017 年御柱祭の湯ノ原町会年長である石川和也さんにお話を伺い、2018 年 1 月 29 日、薄町町会の西村侊哉さんに電話でお話を伺った。

概要

須々岐水神社の木遣りは、スタート地点の安置所、各休憩所、神社に入ってからは御柱の曳行を一時停止するごとに唄う。休憩所は、二の御柱で言うと、アルピコタクシー湯ノ原営業所前、木元の木下様の家の前、「海鮮居酒屋竹屋」前、新井権現様前、上金井にある笹鳥居前の道中である。休憩する場所というのは、湯ノ原、新井、藤井、上金井、四つの各町会の見どころになるところが選ばれる。ただし、昨年のスタート地点は当番の湯ノ原であり、藤井に行くと逆方向になってしまうため昨年は止まらなかったとのこと。湯ノ原二回、新井二回、上金井一回というふうに止まっている。

各休憩所では、基本的に、各町会の青年一名と各町会の御柱総代が一名ずつ唄うので、一つの休憩場所で八曲歌うことになる。ただし、それも必ずしも一定ではなく、時間調整のために増やすことも削ることもあるとのこと。

唄う順番も明確に決まっている。二の御柱では、親郷である上金井を先頭に、藤井、湯ノ原、新井と続く。親郷とは、各柱の御柱祭を率いて行う町会のことで、一の御柱の親郷は薄町である。では、なぜ上金井が親郷かというと、昔、この地域が、入山辺から筑摩に流れていく薄川の水をほかの水がない地域に引き込んでいたからだ。この御柱祭は、水資源がなくならないように祝い、水資源が原因で仲たがいせずむしろ協力してやっていくためのものでもあるのだ。須々岐水神社の「岐」という字は「分岐」の「岐」であり、一の御柱の方へ流れる水路、二の御柱の方へ流れる水路があることを示している。唄う順番は、少なくとも二の御柱においては、水が流れる方向の通りに行っているとのことだ。

第一節 木遣りの歌詞

須々岐水神社の木遣りの特徴としては、物語をかたるように唄うという特徴がある。歌詞は基本的に七五調で、唄の長さは唄い手によってまちまちである。歌詞の形は大きく二つに分かれている。一つは、朝、神事のあとや神社内で唄うときの「正調」。これは、神への願い、祈りなどを唄う品格が高いものだ。これは、個人で事前に歌詞を作ってきたり、伝統の歌詞集から持ってきたりする。もう一つは、正調以外の歌詞で、ダジャレを入れたり、風刺をきかせたり、男女の仲を唄ったりなど、様々なものがある。こちらの方は、むしろ即興のほうが多いとのことだ。即興は、その時の雰囲気を読んで唄うので、唄う人らしさがよく出る。

ただ、須々岐水神社の木遣りの歌詞は長く、即興は難しいのではないかと筆者は考えたが、落としどころを定めて起承転結をしっかり作れば大丈夫であるという。ただ、歌詞の大筋を、皆にお願いするものにするのか、木を褒めるものにするのか……とにかくしっかり決め、最終的にはみんなを納得させなければならない。

そして、先ほど言及があったように、歌詞が書き収められている木遣り唄の歌詞集が存在する。これは1988年に作られたものであり、ほかにも、世相風刺の歌詞、時局的なものも存在する。

第二節 木遣りの歌詞の実例と考察

この節では、実際に筆者(木下)が聞いた歌詞と歌詞集に載っている歌詞を考察する。

【筆者が聞いた正調の歌詞】(二の御柱安置所にて、2017年5月5日、7時7分。唄い手:石川さん)

木遣れ皆さまごめんなヨ
七年に一度の大祭事
御柱さとびきを迎えんと
容姿端麗なるご神木を
無事にお宮に奉ずるは
里の氏子の誉れなり
ここで皆様にお願いだ
木元様のまなごころ
木下様のあつい思いを
木元町会胸に秘め
皆々様のまつり心
全て柱に込めまして
薄御神(すすきみかみ)のみこころえ
気持ちを一緒につなぎ留め
盛大に最後までお願いだ

(考察)

これは朝神事のあと唄われた木遣りで、15行ある。まず、御柱の定番と言われるような歌詞が登場する。そのあと、石川さんが、「御柱は性別で言うと女」とおっしゃっていたように、「ご神木」の前に「容姿端麗なる」という、まるで女性の容姿をほめたたえるような歌詞が唄われている。そして、木元という、御柱の親にあたる方に感謝の意を述べ、最後は「お願いだ」と締めており、これから始

まる曳行において、何も危険なことがなく無事に終われるように皆で協力していこうという内容になっていて、祭りの始まりには大変ふさわしい歌詞となっている。

【筆者が聞いた、正調ではなく、恐らく即興だと思われる唄】(二の御柱笹鳥居前にて、2017 年 5 月 5 日、11 時 51 分。唄い手:五十代男性)

木遣れ、皆さま、ごめんなヨ

今日はめでたい御柱で

「かえる」を集めて申すなら

トノサマガエルにウシガエル

アジサイ寄り添うアマガエル

暑さが後押す痩せガエル

旅に出たなら無事帰る

嫁は実家にすぐ帰る

娘は夜遊び朝帰る

湯上り一杯生き返る

女房は化粧で若返る

粋な女にゃ振り返る

あたしゃ浮気がばれまして

帰るに帰れずしょげ返る

(考察)

笹鳥居前で唄われた木遣りで、正調が多く聞かれたこの場で唄われたこの木遣りは、しゃれが上手に効いていて一際目立っていた。

この木遣りはまず、カエルがテーマになることを三行目で示しつつ、動物のカエルについて四から六行目で唄い、そこからは唄い手自身に関しての「帰る」や「返る」を唄っている。

では、なぜ「かえる」について唄っているのだろうか。前半のカエルについて唄った部分は、水を特に大事にしている薄川水域の地域で、カエルが生きていられる環境をずっと保てるように願って唄っているのではないかと考えた。そして、後半については、唄った方の個性がよく出てきていて、オチさえも御柱祭と直接関係しているとは思えないが、「旅に出たなら無事帰る」という歌詞については、御柱が無事に建てられますようにという願いが暗に込められているのではないかと考えた。

【歌詞集に載っているもの(昔から伝わっているもの)】

木遣若象(ママ)又ごめん

今日はめでたい御柱で

朝も早よから御苦労様

数ある難所も打ち越えて

所定の場所へも後僅か

もう一頑張りお願いだ

それにつけても皆様よ

お腹の虫もさわぎ出し

お昼の時間になりました

角力(すもう)の文句じやないけれど

大関までには参らねど

小結(おむすび)位は取らせます

(考察)

内容から察するに、恐らく鳥居に曳き付ける直前の休憩にて唄われたものだろう。そして、恐らくこれを唄ったのは御柱総代ではないか。そうでなくとも、位が高い中年以上の方だろう。「朝も早よから御苦労様」の歌詞に、今まで柱を運んできた若者を労う様子が見られる。そして、これも恐らく元々は即興だったのだろう。特に、後半の歌詞が、周りの様子を見て唄ったように感じられる。

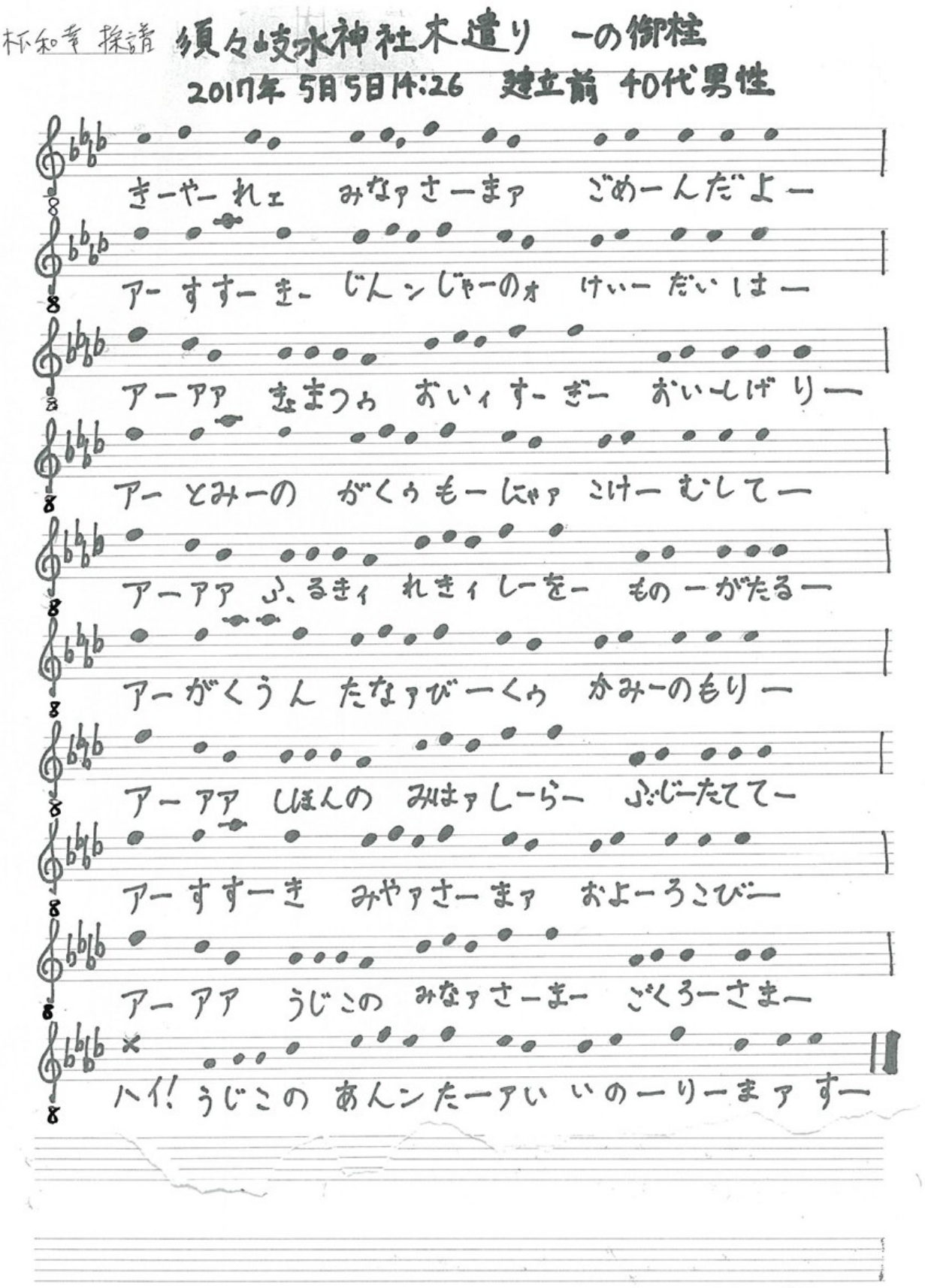
第三節 旋律

まず、木遣りが唄われる手順として、まず、木遣りを唄う人が御柱の上に立つと、その町会の人が周りを囲む。ほかの人々は、外側に行く。そして、采配を持って一礼したあと唄い始める。「木遣れ皆様ごめんなヨ」と唄うと、「ソーイソイ」と采配を二回上げながら合いの手を入れる。このあと、この合いの手は最終行を除く毎行に入る。二行目からの偶数行には「アーアア」(下行形)、三行目からの奇数行には「アー」(上行形)が歌詞の前に入る。ただ、これは二の御柱の場合であり、一の御柱では、上行形と下行形が逆になっていた。二の御柱の中でもすべてが同じというわけではなく、「アーア

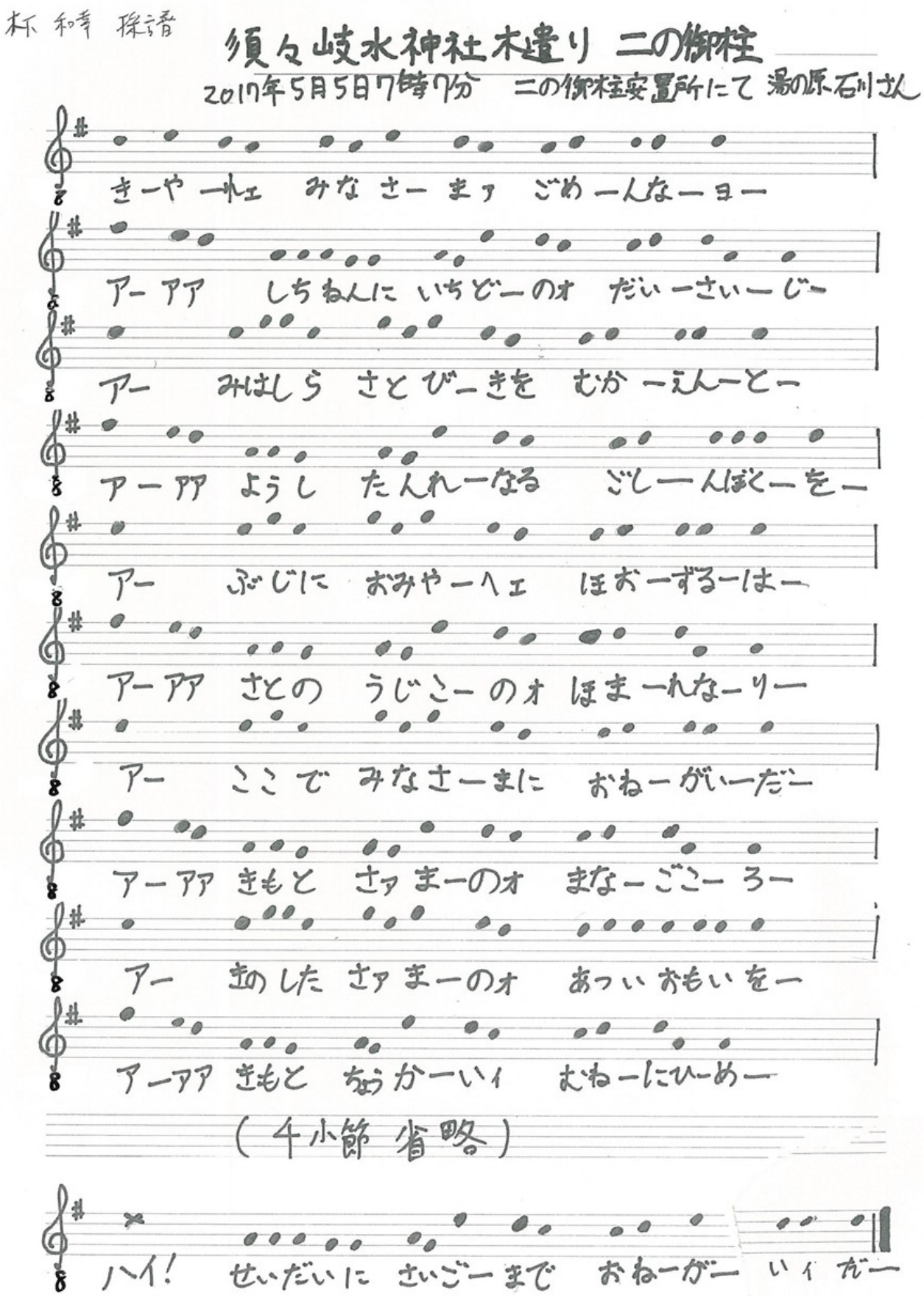
ア」と「アー」を抜かす人や最初の「ア」を「ハ」と唄っていた人もいたので定かではないところがある。そして、最終行に入ると、歌詞の前に、「アーアア」と「アー」ではなく「ハイ！」というまるで合図のように声を上げ、七五調の五の部分を木遣りの唄い手のみならず、周りを取り囲んだ全員が唄う。そして、最後は、「オイサー！オイサー！」と囃子詞を、唄い手とほかの人々が交互に叫び、叫ぶごとに両手を挙げたり采配を上げたりする。どちらが先なのかは定かではない。

そして、旋律については、一の御柱の唄い手は旋律を正確に唄い上げるが、二の御柱の唄い手は自分が唄いやすいようにメロディーを少々変える傾向があるそうだ。この二つの違いについては、下の記譜にて示す。

実際に記譜してみると、ほぼ同様の旋律によっていることがわかる。しかし、前者（一の御柱）の楽譜（譜 23）と後者（二の御柱）の楽譜（譜 24）を比較すると、小さな違いを発見することが出来る。例えば、前者と後者で「アーアア」と「アー」が逆になっている。さらに、前者の二行目である「じんンじゃーのォ」は凸型の旋律であるのに対し、後者の楽譜での「さとびーきを」は凹型の旋律である。



譜 23: 須々岐水神社御柱祭一の御柱の採譜(2017 年 5 月 5 日　採集・採譜:木下)この木遣りの音源は CD トラック No. 21 に収録する。



譜 24: 須々岐水神社御柱祭二の御柱の採譜(2017 年 5 月 5 日　採集・採譜:木下)この木遣りの音源は CD トラック No. 22 に収録する。

第四節 所作と采配

木遣りを唄うときの所作は、一小節の七五調の七で采配を内側に二回半回しながら後ろへ小さく二歩歩き、五で采配を外側に二度回しながら右足を軸にして大きく一歩戻る。戻る際、采配を回し終わるのと同時に、左手を上げるので、終着点は、前に向かって両手を挙げているように見える。掌(たなごころ)で風に舞うように回すのがこつなのだそうだ。

采配について。御柱祭に使用する采配は、必ず小さい和紙が水引で巻かれている。上についてる小さい上質な紙の枚数は正確に決まっていて、赤白紫(青)黄、緑が基本で、金や銀も混じっている。枚数は決まっている。采配の下の棒は竹が使用されていて、一の御柱は黒色のもの、二の御柱は青色のものを使用している。竹の長さは正確に決められていて、百三十センチメートル。

采配の本数は各町会それぞれ決まっていて、まずは親郷が采配の数を決める。そのあと、ほかの町会が本数を決めるが、親郷より多くなってはならないとのことだった。

第五節 木遣り保存会と木遣り師

木遣り保存会の一番の活動は、木遣り師の練習を町会の長老や経験者でサポートするというものである。木遣り保存会は町会ごと存在するのだが、すべての町会にあるのではない。ない町会は、御柱祭についての会議の後に講習を開いて学ぶなどして木遣りを学んでいくとのことだ。

木遣り師については、一の御柱の町会には木遣り師が各町会にいて、親郷の薄町となると二名いるのだが、二の御柱の町会には木遣り師は一人もいない。木遣り師は、まず、御柱祭や木遣りに興味があり、五十代くらいで、信頼がおける方が選ばれやすいとのことである。

おわりに　担当:木下和幸

写真 18: 笹鳥居前の木遣り。唄っているのは湯ノ原町会年長の石川さん。(2017 年 5 月 5 日　撮影:木下)

須々岐水神社の御柱祭は、氏子の皆さんが一丸となって御柱を曳行し、生き生きと木遣りを唄い里山辺にその声を響かせていた姿が印象的だった。祭りの担い手として、木遣りを唄う人を盛り上げたり、大きな掛け声を曳行の際に発したりして、祭り全体に活気を出していた様子はこの目に未だに焼き付いている。

木遣りについては、一の御柱と二の御柱に違いが見られ、さらに二の御柱の中では個人間においても違いが見られた。物語のように唄われるこの神社の木遣りの歌詞は、格式高いものからユーモアを大いに含むものまで様々なものがあり聞いていたこちらとしても非常に楽しめた。特に、里山辺の景色や須々岐水神社をほめたたえるフレーズが多く登場したが、そこに地元の人々の地域に対する愛が感じられた。この御柱祭が美しい自然の中、とこしえに続いていくことを願うばかりである。

参考文献一覧

太田真理「須々岐水神社の御柱祭」『長野県民俗の会会報』第 35 号、2013 年、pp.97-120。

「松本市文化財ホームページ　松本のたから～受け継ぎ伝える郷土の文化

「松本市文化財ホームページ 松本のたから ～受け継ぎ伝える郷土の文化財～ 里山辺須々岐水神社の御柱祭り」

<http://takara.city.matsumoto.nagano.jp/city/183.html>(2018 年 2 月 8 日閲覧)

千鹿頭神社

関島ゆりな

丸山恵利奈

はじめに　担当:丸山恵利奈

2017 年 5 月 3 日に行われた千鹿頭神社御柱建立祭での木遣りについて報告する。千鹿頭神社は二つの社殿が並ぶつくりになっており、神田地区と里山辺林地区が曳行と建立を担う。神田地区が一位御柱と四位御柱を、里山辺林地区が二位御柱と三位御柱を担当する。今回の建立祭では、神田地区の一位御柱と四位御柱の曳行を取材した。曳行開始地点から千鹿頭神社に到着するまでは四位御柱、千鹿頭神社到着後は一位御柱と四位御柱のそれぞれの曳行を取材した。

千鹿頭神社では、非常に丁寧に唄われる木遣りが特徴的であり、その文化がどのように保存・継承されているのかということに興味をもった。本報告書では、第一章にて千鹿頭神社と御柱祭の概要を説明する。第二章では、建立祭にて唄われた木遣りを考察する。第三章では、御柱の伝統を受け継ぐ神田木遣り長持ち保存会や木遣り師について焦点を当てたい。

なお、報告書の執筆にあたり、建立祭にて木遣り師の高根俊宏氏と加賀葵氏にお話を伺った。また 2017 年 12 月 8 日には高根氏にご協力いただき、信州大学にて木遣りに関する講演を行った。本報告書は、お二人のお話をもとにしている。

第一章　千鹿頭神社および御柱祭の概要　担当:関島ゆりな

本章では、千鹿頭神社の概要や御柱祭に関わるラッパ隊、長持ちについて報告する。

千鹿頭神社および御柱祭

はじめに、千鹿頭神社の概要について説明する。当神社は松本市の東部に位置する千鹿頭山山頂に鎮座する。本来は一つの社殿だったが、1618(元和 4)年に千鹿頭山の尾根を境に神田地区側が高島藩領、里山辺林地区側が松本藩領となり、その際に社殿も二つに分けられた[21]。なお、神田地区側の社殿を千鹿頭神社、里山辺林地区側の社殿を千鹿頭社と呼ぶ。

21「松本市文化財ホームページ　松本のたから～受け継ぎ伝える郷土の文化財～　千鹿頭神社本殿」、＜http://takara.city.matsumoto.nagano.jp/city/085.html＞2018 年 1 月 21 日閲覧.

千鹿頭神社御柱祭の起源については諸説ある。高根氏によると江戸時代末期には存在していたといわれている。また、序章(p.35)で述べられているように、1550(天文 19)年頃から存在していた様子もうかがえる。御柱祭の開催周期は数えで七年に一度で、卯年と酉年に行われる。千鹿頭神社で御柱として用いられる木は五丈五尺(長さ約十七メートル、直径約一メートル)が理想とされ、マツ、スギ、ヒノキなどが選ばれる。

御柱の曳行はすべて人力で行われ、女性や子どもも参加していた。周囲の安全が確認されると、切呼(きりこ)の「お頼みだー！ヨーイサ！」という声がかけられ、曳き手たちは「ヨイサ、ヨイサ」「ヨイサ、ヨイサ」と言って曳き始める。切呼は御柱の先頭に立ち、曳行を先導する役割を担う。

写真 19: 安置所にて。一位御柱と四位御柱。　(2017 年 5 月 3 日　撮影:関島)

次に当日の行程を報告する。なお、文章中に示されている番号は下の図 3 上の番号と対応している。

7 時 30 分から、セブンイレブン神田店南側道路にて神事が行われる(①)。実施項目は御清祓式、采配渡し式、御神酒開き式、木遣り式、綱渡り式、やまと式である。木遣り式では一位御柱と四位御柱それぞれに木遣り師が一人ずつ乗り、木遣りを披露した。やまと式は、杣役(そまやく)と呼ばれる木こりのような格好をした氏子を先頭に、切呼と木遣り師全員がそれぞれの柱に乗って行われた。歌詞は聞き取れなかったものの、杣役は声をそろえて唄を唄っていた。この唄は木遣りとは違うメロディであり、長さも木遣りより短い。8 時 30 分に一位御柱の後に四位御柱が続く形で、曳行が開始される

(②)。曳行ルートは③に示す。木遣りのタイミングは主に曳行が止まるときだが、酒店など歌詞に出てくる場所の前でも行われた。9 時 40 分から 10 時の間に鳥居手前に到着し、車両通行止めによる限られた時間の中で神社前の道路を横断する(④)。10 時 20 分に社務所前到着(⑤)、11 時 30 分には一位御柱が竹鳥居(⑥)に到着した。昼休憩を挟み、13 時から社務所前にて紅白モチの振る舞いが行われた後、四位御柱の曳行が再開する。途中で女性による木遣りや、千鹿頭池を唄った木遣りなどが披露された。14 時頃に四位御柱が竹鳥居前に到着し、御柱出迎え式、御丈取式などの神事が行われた。14 時 30 分に神社本殿(⑦)に到着し、綱戻し式、到着木遣り式、御柱冠落し式、やまと式、長持ち奉納などの神事が行われる。到着木遣り式では一人が柱の上に立ち、これから建立が始まり神の柱となる喜びを唄った。綱戻し式では杣役が采配を逆手に持ち、やまと式と同じメロディで「イヨー綱を戻せよお若い衆」と唄うと切呼や氏子たちが綱をとぐろのように巻き始め、建立の準備を整えていく。15 時頃からクレーンにて御柱の建立が開始された(⑧)。

図 3: 千鹿頭神社御柱建立祭　曳行ルート　(2018 年 1 月 19 日　作成:関島)

曳行出発点から鳥居までは道が舗装されており、傾斜も比較的緩やかである。千鹿頭神社は山頂に位置するため、④鳥居から⑦本殿までは上り坂が続く。道幅が狭い箇所やカーブもあり、曳行の際には安全確認が徹底された。

ラッパ隊

ラッパ隊は、一つの柱につき七名ほどがつき、そのうち一人はスネアドラムを担当していた。 同行した四位御柱では四種類ほどのメロディが確認できた。使い分けは不明だが、特別な場面や推定される移動距離によって種類が異なると考える。御柱の停止によってラッパ隊の演奏も停止するが、演奏時間は二十秒のものから四十秒を越えるものもある。安置所からの出発時は両柱のラッパ隊員が集まり一人が指揮者になってファンファーレのように演奏したり、鳥居通過時はラッパとスネアドラムを交互に鳴らすような演奏を行ったりしていた。曳行中は御柱の後ろに配置し、決して御柱に触れたり曳いたりすることはないが、曳行を彩り、リズムをつける重要な役割の一つだと感じた。

長持ち

御柱祭では長持ちの文化も根付いている。長持ちとはT字型の棒に箱が取り付けられたもので、前に二人、後ろに一人がつき合計三人で担ぐ。担ぎ手の動きに合わせて、長持ちからギーコーギーコーという低い音が鳴る。高根さんによると（詳細は本報告書付録151ページ参照）、箱を支える棒がしなり擦れることで、このような音が鳴るという。長持ちは町会内の大工によって製作されている。作り手たちは、良い音が鳴るように細心の注意を払って作るという。

もともと神田地区では長持ちを行っていなかったが、諏訪から取り入れて行われるようになった。かつては箱の中に御柱祭の道具(斧、のこぎりなど)を入れていたようである。しかし、長持ちは非常に重いため、現在は何も入れないか、あるいは石を入れているようである。

第二章　木遣り　担当:丸山恵利奈

本章では、第一節で木遣りの歌詞を検討し、第二節でどのように木遣りが唄われているのかを分析する。

第一節　歌詞

建立祭で披露された木遣りには、御柱の建立を祝うものが多く見られた。また、その場の情景や雰囲気を読み取り木遣りを唄うこともある。曳き手の士気を高める詞や、観客を笑顔にさせるため、工夫を凝らし時事ネタなどを取り入れたものも唄われる。

木遣り師は歌詞カードを持っており、時折歌詞を確認する姿も見られた。高根氏によると、木遣り師は一度御柱の上に乗ったら唄い切るまでは降りるなと教えられている。木遣り師にとって歌詞を忘

れてしまうことが一番の問題であるため、念のため歌詞カードを持っているという。木遣り師は十分に練習を重ねてから本番に臨むため、その場で歌詞を考えて木遣りを唄う場面は見られなかった。

以下に掲載する木遣り①～④は、建立祭にて採録し、筆者が歌詞に起こしたものである。木遣り⑤は、2017 年 12 月 8 日に高根氏をゼミにお迎えした際に歌詞を教えていただいた。なお、歌詞の最後に記した( )内の数字は、その木遣りの長さを示している。

木遣り①(CD トラック No. 23)

イヤレ皆様御免なれ

この度迎えた御柱(みはしら)は

千鹿頭神社が惚れまして

ゆかりも深い中山で

お育て申した名木よ

本日めでたく建立祭

神の柱と見た夢が

曳き子の皆様叶えます　(2 分 17 秒)

(2017 年 5 月 3 日　採集:丸山　場所:曳行中。四位御柱)

建立祭を祝う内容の歌詞である。遠くまで響かせるように伸びやかな声で唄われた。唄い終わると「良いぞー」と声がかけられ、盛り上がりを見せた。

木遣り②(CD トラック No. 24)

イヤレ皆様御免なれ

旅は道連れ世は情け

氏子曳き子の皆様の

思いを託した御柱(みはしら)は

赤い鳥居をくぐり抜け

神のひざ元 社務所前

これから挑むは難所坂

険しい旅路のその前に

二人並んだ花嫁も

腰を下ろして一休み　(2 分 27 秒)

(2017 年 5 月 3 日　採集:関島　場所:千鹿頭神社社務所前。四位御柱。)

木遣り師は高根俊宏氏。難所坂を前にして、士気を高めるような木遣りだった。唄い終わると拍手に包まれた。

木遣り③(CD トラック No. 25)

イヤレ皆様御免なれ

春のうららの千鹿頭山

緑まばゆい鶴ヶ峰

浦古の池にはこいのぼり

色もとりどり風そよぎ

五月(さつき)の空へと舞い上がる　(1 分 32 秒)

(2017 年 5 月 3 日　採集:関島　場所:千鹿頭池を臨む坂道。四位御柱。)

神田地区初の女性木遣り師・加賀葵氏による木遣り。唄う際には「保存会のホープです。女性木遣り師・加賀葵が唄いますので、皆さんご清聴をお願いします」と紹介され、聴衆から温かい拍手と歓声が送られた。歌詞で読み込まれているように、千鹿頭池には色鮮やかな鯉のぼりが風になびいていた。

木遣り④(CD トラック No. 26)

イヤレ皆様御免なれ

御柱(みはしら)様に乗りまして

さあさ歌えと言われても

木遣りの文句が出てこない

足りない頭をひねっても

スマホを開いて調べても

Google 検索してみても

うまい言葉が見つからぬ

あれこれ悩んでいるうちに

いつの間にやら木遣り節　(2 分 19 秒)

(2017 年 5 月 3 日　採集:丸山　場所:曳行中。四位御柱。)

木遣り師は高根俊宏氏。当該木遣り師が作ったオリジナルの歌詞である。木遣り師が「Google 検索」や「いつの間にやら木遣り節」と唄うと、周りの者も笑みを浮かべた。現代語や時事ネタを取り入れた木遣りのひとつである。

木遣り⑤

木遣り皆様　御免なれ

神田千鹿頭と申するは

諏訪明神の御子神(みごがみ)が

鎮座まします　宮所(みやどころ)

松の翠は千歳振り

浦古の池の水清し

世にも稀なる名勝地

七年(ななとせ)一度の御柱(みはしら)と

神田千鹿頭の名と共に

代々伝えて栄(さか)ゆらん

(2017 年 12 月 8 日　採集:関島　場所:信州大学人文学部 313 演習室)

高根氏を信州大学にお迎えした際に披露してくださった木遣り。木遣り師が課題曲として練習の際に唄うものだという。神田地区の松林や千鹿頭池の様子を詠み込んでいる。

千鹿頭神社の木遣りの特徴として、「イヤレ皆様御免なれ」という出だしで始まる。出だしの「イヤレ」は、「木遣り」が変化したものだと考えられている。このフレーズで木遣りの始まりを聴衆へ知らせる。千鹿頭神社では、木遣りの歌詞における一行を「くだり」と呼ぶ。かつては偶数のくだりで唄われていたようだが、現在は奇数が主流で、特に七〜九くだりが最も適しているといわれている。

なお、冒頭の「イヤレ皆様御免なれ」はくだりには含まない。基本的に七五調だが、七音節の部分が八音節になっているものも多い。一つのくだりは十二〜十三音節で構成されている。

多くの木遣りの歌詞は個人で作詞・所有していたため正式な伝承唄はなかった。1939 年頃、多くの木遣りの作詞を手がけ当時の木遣り師に唄を提供していた前澤氏という方がおり、1987 年に前澤氏のご子息が記録として木遣りの歌詞集を制作したことが分かっている。2004 年には歌詞集の第二集が発行され、これらの歌詞集が木遣り師の教本となったことで、現在は多くの木遣りが伝承されるようになった。木遣り師はこれらを元に、原文で唄ったりアレンジを加えたりしている。各自四、五曲ほど自作の持ち唄を用意しているという。また、木遣り師のみならず一般の氏子も作詞をすることがある。

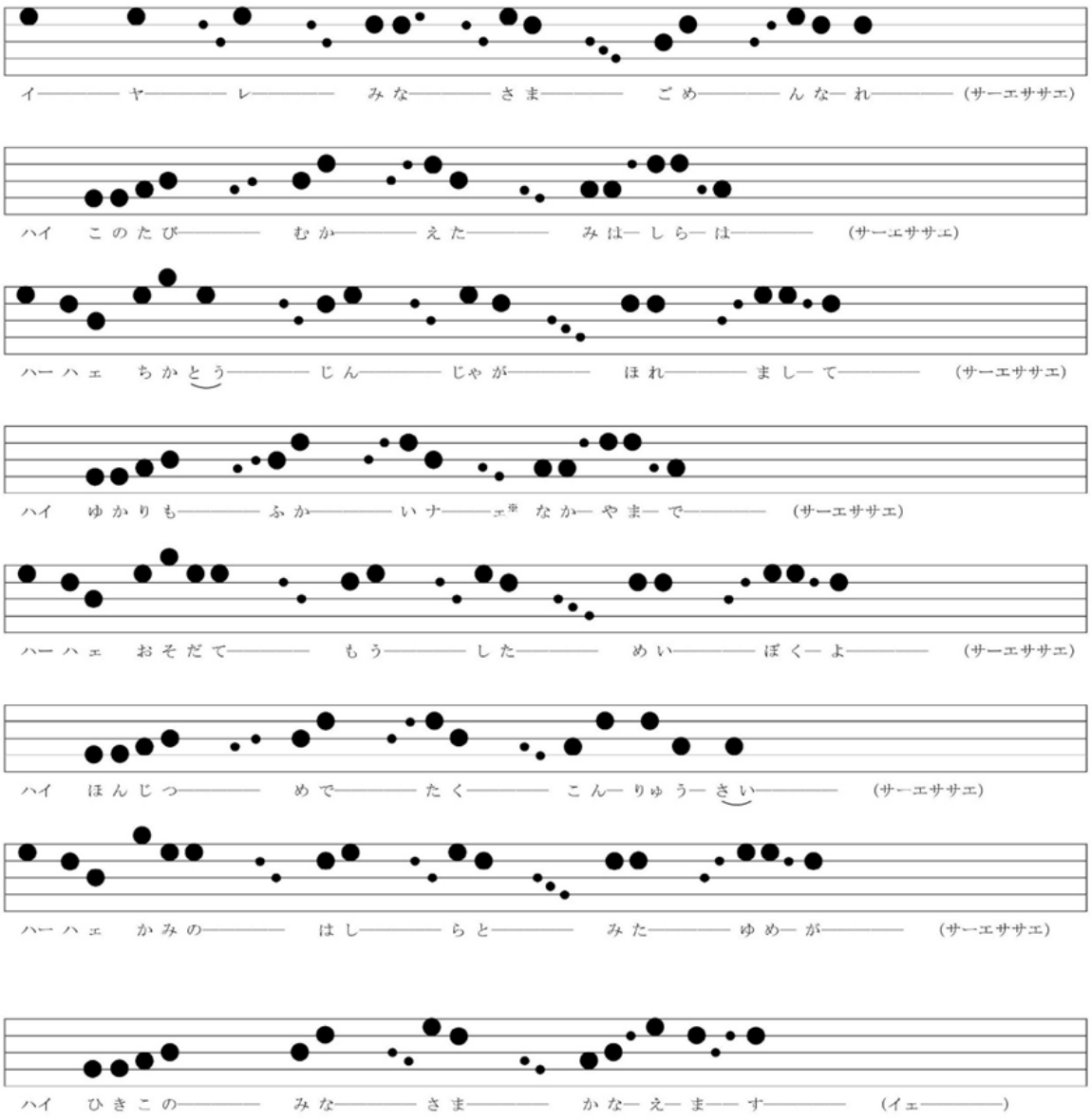
実際に建立祭で木遣りを聴き、千鹿頭神社の木遣りは非常にバリエーションが豊かであった。当日は二十五曲の木遣りを採録したが、同じ歌詞の木遣りが二回以上披露されることはほとんどなく、聴いていて飽きることがなかった。筆者は初めて木遣りを耳にしたということもあり、木遣りの場面になると「次はどんな歌詞だろう」と興味深く聴き入った。時には曳き手の士気を高め、時には笑いを誘いリラックスさせており、木遣りによって曳行にメリハリをもたらしていることを実感した。

第二節　唄い方

本節では、木遣りがどのように唄われているのかを記譜を用いて分析する。また、木遣りを唄う際の木遣り師の動きにも着目したい。

(一)メロディの特徴

木遣りには大まかなメロディの一貫性はあっても、音程や細かい節回しは木遣り師によって異なる。高根氏によれば、木遣り師は先輩の木遣り師のメロディを何度も聴いて覚え、その上での節回しのひねりやアクセントの付け方は、各木遣り師の腕によるという。次の譜 25 は、千鹿頭神社での平均的なメロディの木遣りを、上記の木遣り①の歌詞を用いて起こしたものである。



譜 25: 木遣り① （採譜:丸山）

譜面上の●は旋律を示している。大きい●は詞が発音されている部分を示し、小さい●は音を伸ばしながら音程が変わる部分を示す。五線は音の高さを示しており、西洋音楽のト音記号を用いた音程と同じ音程である。

千鹿頭神社の木遣りは、ゆっくりとしたテンポで一音一音明瞭に唄われる。歌詞には記されないが、唄う際にはくだりの冒頭に「ハイ」と「ハーハェ」が交互に入る。メロディにおいても、「イヤレ皆様御免なれ」と終わりのくだりを除くと二つのメロディが交互に唄われている。最後のくだりは一際力強く「ハイ！」とオチがつけられ、メロディにおいても低音から高音へと盛り上がっていく構成となっている。小さい●で示したように、音を伸ばすときには末尾の音を細かく上げたり下げたりする。

しかし、特に最後のくだりの冒頭(ここでは「ひきこの」)は、音程を変えずに伸ばして唄われたり、あるいは、アクセントをつけるように一音一音力強く唄われたりする。高根氏によると、アクセントをつけて短く力強く唄うことは「たたみ込み」と呼ばれ、特に木遣りが終わりに近づくにつれてたたみ込んで唄われるという。

切呼や氏子たちは、各くだりの終わりで「サーエササエ」と合いの手を入れる。また、最後のくだりを聞き終わると「イェー」と大きく盛り上げる。

※七音節で唄われる場合、メロディ上では一音節分字足らずとなる。この字足らずを埋めるため、木遣り師は「ハェ」や「ナェ」など意味のなさない言葉を足したり、語尾を伸ばしたりしている。ここでは「ゆかりも　ふかい」が七音であるため、「ナェ」を入れて「ゆかりも　ふかいナェ」とし、字足らずを補っている。

(二)動作の特徴

次に、木遣りを唄うときの動作について検討する。木遣り師は基本的に御柱の上に乗り、采配を振りながら木遣りを唄う。采配とは、木遣り師や氏子の持つ棒状の道具である。先端には色鮮やかな紙が付けられている。

①まず、木遣り師は一礼してから柱に乗る。

②柱に乗ると、写真 20 のように柱の先端(曳行の進行方向)を向いて、采配を横に寝かせた状態で持ち、木遣りの冒頭の文句「イヤレ」を唄い始める。

③「イヤレ」の「レ」のあたりから、左足を一歩引き、横にしていた采配を立てて右手で回しはじめる。

④「みなさま」と唄いながら采配を内回りに三度回す。采配を回す間、左手は掌を上にして胸の前に置く。両膝は軽く曲げ、柱の上でバランスを保つ。

写真 22 は、別の木遣り師を正面から撮影したものである。

⑤「ごめんなれ」と唄いながら体の向きを変え、外回りに二度采配を回す。

⑥最後の「れ」の音を伸ばしている間は、写真 23 のように両手を挙げる。

⑦ひとつのくだりを唄い終えると、再び柱の先端の方に向き直り、左足を一歩引く。

⑧各くだりの冒頭の「ハイ」または「ハーハェ」では、膝を軽く落とす。

写真 20　(2017 年 5 月 3 日　撮影:丸山)

写真 21: (2017 年 5 月 3 日　撮影:丸山)

写真 22　(2017 年 5 月 3 日　撮影:丸山)

写真 23: (2017 年 5 月 3 日　撮影:丸山)

以降の動作は、各くだりの前半七音節と後半五音節で動きが分かれている。前半七音節は④と同じ動きであり、後半五音節は⑤⑥と同じ動きをする。最後のくだりの「ハイ」は一際大きく声を上げ、膝を落とす動作も大きくなる。木遣りを唄い終えると一礼し、柱から降りる。

聴衆は基本的にその場にしゃがんだり座ったりして休みながら木遣りを聴く。「サーエササエ」と合いの手を入れるときは持っている采配を掲げ、最後に「イェー」と盛り上げるときは両手を挙げる。

高根氏にお話を伺ったところ、采配が綺麗に舞うように回すことを意識しているという。また、采配の頭が下がらない点や、采配を速く回しすぎない点にも注意しているようである。

生の木遣りを見て、千鹿頭神社の木遣りは、聴衆へ「魅せる・聴かせる」という意識が高いと感じた。采配を勢いで回さずに金銀の色紙がなびく様子が見えるように丁寧に回したり、体の向きを変えることにより反対側にいる聞き手にも声を届けたりしていた。筆者が同じように采配を振ってみようとしても、采配の重みや手の扱い方の影響を受け、綺麗に安定して回すことができなかった。木遣り師の方々はこの動作を不安定な御柱の上で、しかも唄いながらすることが求められるためかなり高度なことを行っているのだが、当日はどの木遣り師を見ても木遣り・動作ともに安定していた。ここにも積み重なる練習の成果が表れていると感じた。

第三章　神田木遣り長持ち保存会　担当:関島ゆりな

本章では、第一節で神田木遣り長持ち保存会の概要について、第二節で木遣り師になるまでの過程などを報告する。

第一節　神田木遣り長持ち保存会について

神田地区では、御柱祭に関する行事や文化を保存継承するため「神田長持ち保存会」が活動している。会員は町内在住の二十二～七十八歳の男女八十名ほどで構成されている(2017 年 12 月 8 日時点では女性一名)。お祝いの席をはじめ、松本ぼんぼん、松本城 400 年祭り、信州博覧会、松本空港ジェット化記念式典、松本大歌舞伎など松本市内のイベントにも積極的に参加している。保存会では地区の子どもたちへの指導も行っている。しかし、子どもたちは人前で唄うことに抵抗感を持ってしまうため、御柱祭での子ども木遣りは行っていないという。子どもへの指導は今後の課題だと高根氏はおっしゃっていた。

第二節　木遣り師について

木遣り師になるには、立候補して神田木遣り長持ち保存会に認められることが必要だという。若手からベテラン(～五十代後半)まで十～十二名ほどの候補者が数年間、月に一、二回ほど木遣りの練習を行い、神田木遣り長持ち保存会の会長や氏子総代の役員などから実力を認められると、そのうち八名のみが木遣り師になることができる。神田地区の場合は、一位御柱と四位御柱それぞれに四人の木遣り師がつくため、計八名と決まっている。御柱祭直前には、仕事が終わると公民館や神社に集まってほぼ毎晩練習を行う。

木遣り師の衣装は特に華やかで、オレンジ色を基調としている。木遣り師の衣装の背中と長持ちの側面には、諏訪大社の御神紋である梶の葉紋が見られた。この金色の派手な衣装を着られるのも、八名の木遣り師だけである。

また、金銀の紙で作られた采配を一人一本持つ。氏子が持つ通常の采配は五色の紙で作られ、こちらも鮮やかだが、木遣り師の采配はより一層目立ち、華やかである。采配は神田木遣り長持ち保存会や氏子総代の方々をはじめ、地域の人々が手作りで製作するという。

今回の建立祭では神田地区初の女性木遣り師である加賀葵氏の姿も見られた。御柱の上には乗らず、柱の下で木遣りを唄っていた。衣装も異なり、木遣り師の衣装ではなく氏子が着る黒い法被を着ていた。幼い頃から神田地区の人々と家族のように接するうちに、自分も木遣り師を目指すようになったとおっしゃっていた。

おわりに　担当:関島ゆりな

神田地区の木遣りは、風景を唄うものや、要所要所での曳行中の場面を唄うものなど由緒ある歌詞が見られる一方で、地元のお店のことや時事ネタを取り入れたものを披露することで、観客を「巻き込みながら聴かせる」要素が強かったように感じる。実際、筆者は人生で初めて御柱祭に参加する機会だったこともあって最初は部外者意識があったが、木遣りを聴いて笑いをもらったりすることでだんだんと神田地区の雰囲気に馴染めていった。また、同行したのはたった一日だったが、神田地区以外の者にも昼食が振る舞われたり、木遣り師や氏子の方に積極的に御柱に関するお話をしていただいたりと、地域の方々の優しさに触れる機会が何度もあった。保存会についても一人ひとりが各人の個性を活かして楽しみながら活動している様子が伝わってくる。歌詞を保存するという動きは膨大な調査や作業が必要とされただろう。木遣りの歴史を残し、未来に繋げるという強い熱量がないと成し遂げられないことだ。そのおかげで現在まで千鹿頭神社の丁寧で気高い木遣りが受け継がれている。そして何よりも木遣り師の方々は、数年間にわたる練習を経て保存会から八名に選ばれたことで、責任と誇りを持ってこの役を全うしているのだろう。それは同じ歌詞の木遣りを聴くことがほとんどなかったことや、采配の回し方まで気を配る姿、「木遣り師は一度御柱の上に乗ったら唄い切るまでは降りるな」という教えにも表れている。

千鹿頭神社の木遣りが非常に丁寧に唄われ、またこのような伝統が守られているのは、地域の人々が一体となってこの伝統文化を支え、大事にしているからだと感じた。

参考文献一覧

「松本市文化財ホームページ 松本のたから ～受け継ぎ伝える郷土の文化財～ 千鹿頭神社本殿」
<http://takara.city.matsumoto.nagano.jp/city/085.html>（2018 年 1 月 21 日閲覧）

総括

田中大暉

本報告書では、様々な木遣りを検討してきた。各社の木遣りは、地域ごとにかなり異なっていることがわかった。

中でも際立つのは、諏訪大社の木遣りである。諏訪大社の木遣りは、各社の木遣りの中でもかなり高い音域で唄われており、緊張感がある。一方で、松本城周辺の各社の木遣りは、諏訪大社の木遣りよりも低い音域で唄われている。張り詰めた雰囲気というよりは、周囲の人々の笑いや雑談に囲まれて唄われている。

同じ木遣りと呼ばれていながら、なぜこれほど大きな差異があるのだろうか。ここでは、松本城と諏訪大社の中間ほどにある「二之宮」矢彦神社の木遣りに着目して考察する。

「二之宮」小野・矢彦神社の木遣り

本報告書内では、小野・矢彦神社の木遣りを扱った。そこでは、「さくり」と呼ばれるものと、「甚句」と呼ばれるものとの二種類の木遣りが唄われていることを述べた。

「さくり」は、「甚句」と比べると高い音域で唄われ、緊張感がある。唄い手は「おんべ」を掲げて御柱の上に立ち、御柱曳行の司令官のような雰囲気があった。上の句・下の句からなり、二、三十秒程度で唄い終える。御柱の曳行開始の合図という役割を担うこともある。これらの特徴を一言で表せば、実用的といえるだろうか。本報告書を通じて、これらの特徴が諏訪大社の木遣りにも見られることがわかった。

一方、「甚句」は、「さくり」と比べると低い音域で唄われ、緊張感はあまり感じられない。筆者（田中）が 2017 年 5 月 3 日の矢彦神社御柱祭・一之御柱で見たところでは、「甚句」を唄う木遣り師の前に立ち、記念撮影をする人もいた。採譜の面から見ると、旋律 B・旋律 C を交互に繰り返して唄った後、旋律 D を唄うことによって唄い終える形式を持っており、長いものでは五分ほどにもなることがある。御柱祭という文脈の中では、御柱の曳き出しの合図として唄われることはなく、もっぱら休憩時に唄われる。これらの特徴を一言で表せば、余興的といえるだろうか。本報告書を通じて、これらの特徴が松本城周辺各社の木遣りにも見られることがわかった。

従って、本報告書で扱った各社の木遣りには、「さくり」に類するものと、「甚句」に類するものとの二種類があると考えられる。これらを仮称して、「さくり型木遣り」・「甚句型木遣り」と分類する。以下にその特徴をまとめる。

「さくり型木遣り」・「甚句型木遣り」の特徴

さくり型木遣り	甚句型木遣り
諏訪大社の木遣りに特徴的	松本城周辺各社の木遣りに特徴的
音域は高く、緊張感がある	音域は低く、緊張感はあまりない
主に上の句・下の句からなる	主に旋律Ｂ・旋律Ｃ・旋律Ｄからなる
曳行開始の合図ともなる	休憩時に唄われる
「実用的」	「余興的」

本報告書で扱ったところでは、「さくり型木遣り」を唄うのは諏訪大社上社・諏訪大社下社と小野・矢彦神社の「さくり」である。また、「甚句型木遣り」を唄うのは小野・矢彦神社「甚句」、沙田神社、千鹿頭神社、須々岐水神社、橋倉諏訪社、宮原神社である。

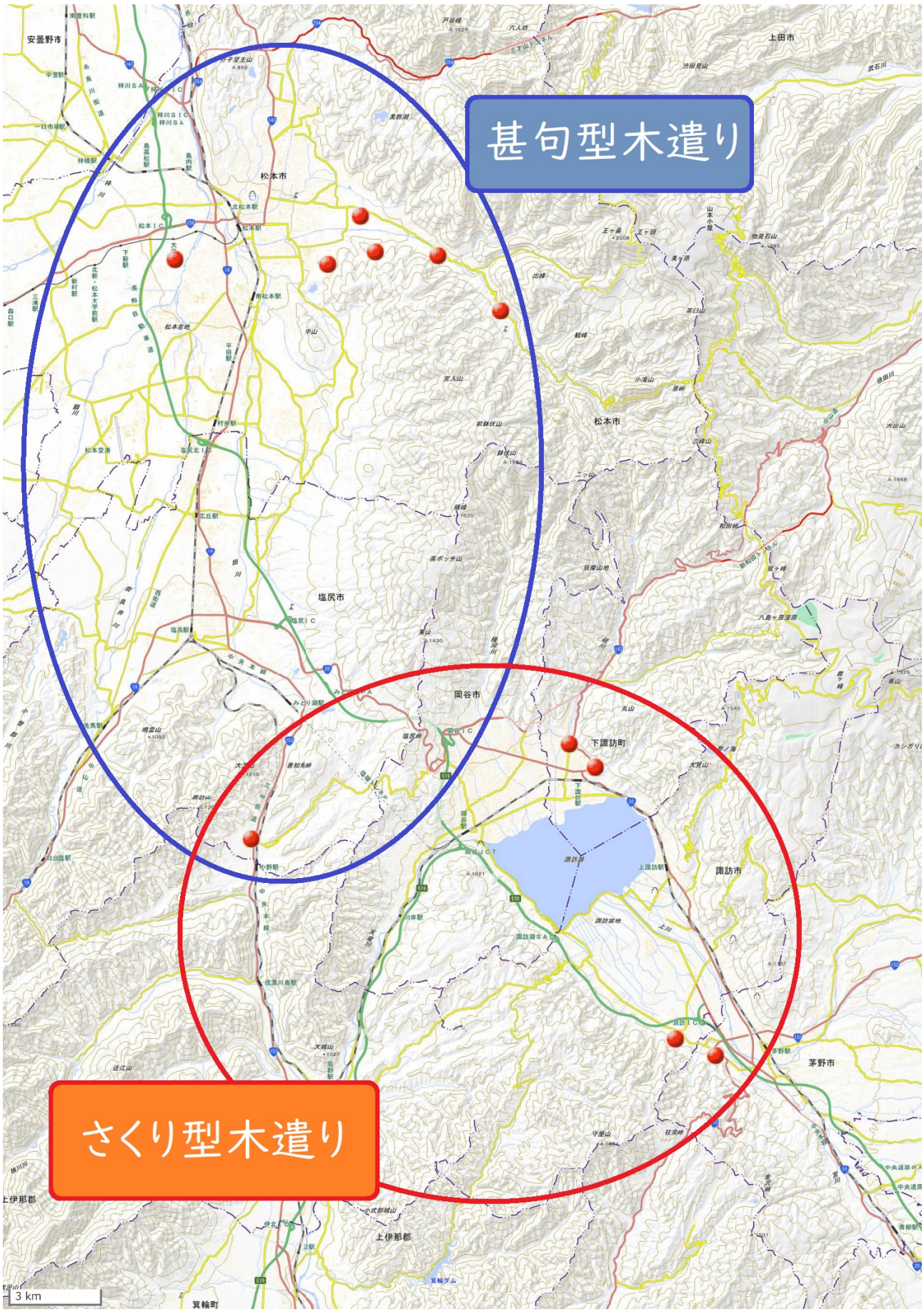
「さくり型」・「甚句型木遣り」の分布

「さくり型木遣り」			「甚句型木遣り」					
諏訪大社上社	諏訪大社下社	小野・矢彦神社「さくり」	小野・矢彦神社「甚句」	沙田神社	千鹿頭神社	須々岐水神社	橋倉諏訪社	宮原神社

これらの分布を地図上に示すと、地図１のようになる。

「二之宮」である小野・矢彦神社よりも松本城側に位置する神社は「甚句型木遣り」を、諏訪大社側に位置する神社は「さくり型木遣り」を唄っている。

また、地図１を見ると、二種類の木遣りにはそれぞれ中心点があるように思われる。すなわち、「さくり型木遣り」は諏訪大社を中心として広がっており、「甚句型木遣り」は松本城を中心として広がっている。両者の広がりの重なるところに「二之宮」小野・矢彦神社が鎮座し、そこでは二種類の木遣りが唄われている。



地図 1 「さくり型木遣り」と「甚句型木遣り」の広がり。国土地理院発行地図を使用して作成。

本報告書で扱った木遣りの二類型

諏訪大社では、民謡事典などにある原義的な木遣りの姿、つまり木を遣るための「さくり型木遣り」が唄われる。短く唄われ、二、三十秒ほどの長さである。力を合わせるための合図があまりに長くては綱の曳き子も疲れてしまう。そのため、唄われる長さが予めわかっている形式、すなわち上の句・下の句からなる短いものが最適な形式として採用されたのではないか。また、神木を運搬する合図としての実用的な木遣りが、ここではある種の神聖さとともに受け継がれているのではないか。

その一方で、松本城周辺各社では「甚句型木遣り」が唄われる。松本城周辺は、城下町であるため端唄・小唄などの唄も盛んだっただろうと推察される。そのような状況で、人を笑わせたり、楽しませたりするための木遣りが育まれたのではないだろうか。お世話になった方への感謝の気持ち、神社の由緒、あるいは色物などを木遣りの歌詞に盛り込むためには、当然「さくり型」のような短いものでは不足である。そのため、旋律Ｂ・旋律Ｃを必要なだけ繰り返し、最後に旋律Ｄを唄って「オチ」をつける形式が採用されたものと推測する。

諏訪大社を中心とする「さくり型木遣り」と、松本城を中心とする「甚句型木遣り」の間に鎮座する小野・矢彦神社は、両者から影響を受け、二種類の木遣りを有するに至ったものと考えるところである。

「音楽」としての木遣りに向き合うこと

本報告書では、採譜という手段を通じて、「音楽」としての木遣りに向き合った。その結果、筆者（田中）の表現で言うならば、松本城周辺の木遣りは旋律Ｂ・旋律Ｃ・旋律Ｄを核とする形式を持っており、その形式は複数の神社の木遣りに共通するものであることがわかった。また、諏訪大社の木遣りについては、上の句・下の句の独自の旋律を持ち、それぞれいかなる節回しによって唄われているものかをある程度記録することができた。

筆者が実地に調査した御柱祭で氏子の方々に伺ったところ、異口同音にいうことには、「木遣りは地域や神社によっても異なるし、柱によっても異なる」ということである。それについて筆者は、木遣りは地域ごとにどのように異なっているのか、いかなる共通点が見いだせるのかという疑問を抱いていた。目に見えない音の世界である木遣りの旋律について考察するのは容易ではなく、本報告書を完成するにあたっても学生全員で様々な方法を試行錯誤したが、結局楽譜に書き起こすという手段により、このような疑問に対する一つの回答となる「楽譜」を示すことができたものと思う。

従来、木遣りについては歌詞の記録はなされているものの、楽譜に書き起こすという手段による考察はほとんど皆無であった。本報告書では、歌詞を記録すると同時に、採譜によって木遣りを可視化したことにより、音の世界としての木遣りを記録することを試みた。

木遣りに携わり、信州の地で育んできた方々との対話

今回の報告書作成にあたっては、各学生が御柱祭に伺い、地元の方のお話を伺いながら木遣りの記録を行った。日程の都合上、大和合神社の御柱祭に伺うことができなかったのが心残りであるが、木遣り師の方をお招きするなどして、お話を伺った。筆者（田中）は、小野・矢彦神社、沙田神社、橋倉諏訪社の三社の御柱祭に伺い、木遣り師の方や氏子の方々とお話をさせていただいた。

そこで感じたのは、木遣りを通じて伝統を担うことへの誇りと、氏子の方々の絆の強さである。筆者が目にした矢彦神社一之御柱の木遣りでは、「さくり」を通じて一心に気を合わせ、御柱の大木を曳行する様子をみた。また、「甚句」を唄う木遣り師の周囲で、お酒を飲みながら談笑する氏子たちの姿も印象的である。沙田神社や橋倉諏訪社では、木遣りを通して笑ったり、周囲の人々全員で誰かにお礼の気持ちを表したりする様子に、その地域の人付き合いの親密さを思った。筆者が橋倉諏訪社に伺った際には、地元の方からお酒を惜しみなく振る舞っていただき、木遣り師の方やラッパ隊の方々とも交流をすることができた。

それぞれの地域によって様相の異なる木遣りであるが、木遣りを通じて地域の人々に笑いを届け、絆を強めるところに本質があるのではないかとさえ感じた。木遣りは御柱祭に欠かすことができないとされる所以であろう。

記譜するということ

本報告書で扱った木遣りは、主に各地の「木遣保存会」によって継承されている。そこでは、楽譜に書き起こすということはせず、主に口頭伝承、口伝えに節回しを受け継いでいるという。保存会の方の話では、楽譜に書き起こすことはできないと考える方もいる。

本報告書では、そのように言われる採譜という手段を通じ、木遣りの音の世界を可視化し、記録することを試みた。それによって、木遣りがどのような節回しによって唄われているものなのかをある程度は明らかにすることができた。また、旋律の面からみた際、木遣りがどのような形式によって唄われているのかを明らかにすることができた。

その一方で、楽譜に書き残すことができない情報は、収録することができなかった。例えば、微妙な節回しの雰囲気などは、楽譜を通じては表現することが難しい。筆者（田中）が採譜した木遣りの譜面をピアノなどで弾いてみると、音程やリズムはほぼ書き留められているにもかかわらず、物足りなさが否めない。おそらく、実際に耳にした木遣りの微妙なニュアンスや、唄い手の表情、周囲の合いの手の感覚などの情景が、楽譜には記録しきれないためであろう。

木遣りは実際の御柱祭の場と結びついたものであり、音程やリズムのみをそこから切り離して記録しても、無機的なものとなってしまうようである。より鮮明で生き生きとした記録方法については、今後の課題としたいところである。

木遣りの現在

さて、このように見てきた木遣りであるが、伝統や歴史といった言葉の背景にある、人々の生きた感性を原動力として唄い継がれていることを強く感じた。

これまでに見てきた木遣りは、それぞれ異なる性格を持つものであった。諏訪大社の木遣りでは、歌詞はほぼ固定されており、即興的な歌詞は聞かれないという。御柱という巨木の曳行を指揮する誇りと伝統を思い、木遣りが御柱とともに神聖さを持って唄い継がれているかのように感じた。その一方で、松本城周辺各社の木遣りでは、歌詞は固定的なものに加え、「オバマからトランプへ」「Google 検索」など、現代の日常に即した言葉も耳にした。

木遣りは同じ地区内でも様々なバリエーションがあるため、例えば沙田神社では「何が正調かわからない」という話も耳にした。また、諏訪大社のものと松本城周辺各社のものの、どちらがより古い形式であるのか、なぜこれほど差が広まったのかなど、不明点は多い。しかし、むしろ正調や起源がわからず、時代や場所によって変化して楽しめる点にこそ、木遣りが今日唄い継がれている原動力が存するのではないか。

次の御柱祭のとき、今回と同じ木遣りが唄われることはないであろう。これまでと同様、歌詞内容は変化し、節回しも変わっていくものと思われる。地域・神社といった横軸のみならず、現在・未来といった縦軸によっても色彩豊かな変化を見せる木遣りが、これからどのような様相を見せていくのか。また、木遣りはどのような唄の影響を受け、育まれてきたのか。本報告書を踏まえ、更に包括的な視点からの研究を進めたい。

参考文献一覧

【参考文献】

石川俊介「長野県諏訪の『木遣り唄』―練習と保存会活動について―」名古屋大学大学院文学研究科比較人文学研究室『比較人文学研究年報 2010』2010 年、pp.137ff。

石川俊介「諏訪大社御柱祭の文化人類学的研究：祭礼の存続と民間信仰」名古屋大学博士論文、2015 年。

上田正昭『図説　御柱祭』太洋社、1998 年。

太田真理「須々岐水神社御柱祭関係用語集」『長野県民俗の会通信 238 号』2013 年。

太田真理「須々岐水神社の御柱祭」『長野県民俗の会会報』第 35 号、2013 年、pp.97-120。

奥中康人「長野県諏訪地方におけるラッパ文化の形成に関する研究」『静岡文化芸術大学研究紀要 17 巻』、2017 年、 pp.65 - 86 。

倉野憲司校注 『古事記』 岩波書店 、1991 年。

小林竜太郎「平成に入ってから御柱祭を開催した記録のある長野県内の神社」『長野』303 号、2016 年。

笹本正治『すばらしい松本』信濃毎日新聞社、2001 年。

信濃毎日新聞「多彩な木やり 信大生 譜面に」2018 年 1 月 19 日朝刊、9(33)。

辰野町誌編纂専門委員会編『辰野町誌　近現代編』辰野町誌刊行委員会、1990 年。

辰野町誌編纂専門委員会編『辰野町誌　歴史編』辰野町誌刊行委員会、 1990 年。

田中大暉「信州における民俗音楽の研究 木遣り唄について」信州大学人文学部芸術コミュニケーション分野 卒業論文、2017 年。

谷川健一編『日本の神々 神社と聖地 第九巻 美濃・飛騨・信濃』白水社、2000 年。

福田アジオ,新谷尚紀,湯川洋司,神田より子,中込睦子,渡邊欣雄『日本民俗大辞典　上』 吉川弘文館、1999 年。

宮坂清通、増沢光男、竹渕甲子、信州・市民新聞グループ『おんばしら　諏訪大社御柱祭のすべて(改訂版）』信州・市民新聞グループ、2009 年。

武藤清躬『式内社の神々 神のやしろの起源について』朝日新聞出版サービス、1999 年。

「安曇筑摩両郡村々明細調書上帳」『新編信濃史料叢書第十四巻』信濃史料刊行会、1976 年。

「伊那郡神社仏閣記」『新編信濃史料叢書第十四巻』信濃史料刊行会、1976 年。

「委寧能中路」『新編信濃史料叢書第十巻』信濃史料刊行会、1974 年。

『「御柱祭」ガイドブック』信濃毎日新聞社、2004 年。

『カラーグラフおんばしら　ガイドブック』信州・市民新聞グループ、2003 年。

「来目路の橋」『新編信濃史料叢書第十巻』信濃史料刊行会、1974 年。

『信州三之宮式内沙田神社 御柱祭』沙田神社御柱祭記録集編集委員会、2006 年。

「信府統記」『新編信濃史料叢書第六巻』信濃史料刊行会、1973 年。

『東筑摩郡松本市・塩尻市誌第二巻上』東筑摩郡松本市・塩尻市郷土資料編纂会、1973 年。

「平成 28～29 年度　沙田神社御柱会議　図面綴」式内沙田神社御柱祭実行委員会、発行年不明。

著者不明、宮原神社資料。

【参考 URL】

信州・両小野地区振興会「H29 小野おんばしら」
<http://www.shiojiri.info/~ryouono/H29Onbashira/>(2018 年 1 月 6 日閲覧)
信州・両小野地区振興会「憑の里【だのめのさとだより】」
<http://www.shiojiri.info/~ryouono/onbashira/>(2018 年 1 月 6 日閲覧)
「辰野町消防団公式ホームページ」
<http://www.town.tatsuno.nagano.jp/baren/>(2018 年 1 月 6 日閲覧)
諏訪地方観光連盟　御柱祭観光情報センター「信州諏訪御柱祭」
<http://www.onbashira.jp/about/onbashira/>(2018 年 1 月 31 日閲覧)
ちのステーションホテル「天下の大祭…信濃国一之宮「諏訪大社」・御柱祭のご案内」
<http://www.cs-h.co.jp/mihasira.htm#top>(2018 年 1 月 31 日閲覧)
長野県上伊那地域振興局総務管理課「い～な　上伊那」
<http://blog.nagano-ken.jp/kamiina/>(2018 年 1 月 9 日閲覧)
「下諏訪町木遣保存会公式 Facebook」
<https://ja-jp.facebook.com/shimosuwakiyari/>(2018 年 1 月 31 日閲覧)
「下諏訪町木遣保存会公式 HP」
<http://www.kiyari-shimosuwa.com/costumeitem.html>(2018 年 1 月 31 日閲覧)
「松本市文化財ホームページ 松本のたから ～受け継ぎ伝える郷土の文化財～ 入山辺橋倉諏訪神社の御柱祭り」
<http://takara.city.matsumoto.nagano.jp/city/182.html>(2018 年 2 月 8 日閲覧)
「松本市文化財ホームページ 松本のたから ～受け継ぎ伝える郷土の文化財～ 入山辺宮原神社の御柱祭り」
<http://takara.city.matsumoto.nagano.jp/city/181.html>(2018 年 1 月 9 日閲覧)
「松本市文化財ホームページ 松本のたから ～受け継ぎ伝える郷土の文化財～ 里山辺須々岐水神社の御柱祭り」
<http://takara.city.matsumoto.nagano.jp/city/183.html>(2018 年 2 月 8 日閲覧)
「松本市文化財ホームページ 松本のたから ～受け継ぎ伝える郷土の文化財～ 千鹿頭神社本殿」
<http://takara.city.matsumoto.nagano.jp/city/085.html> (2018 年 1 月 21 日閲覧)
「二十五丁橋（にじゅうごちょうばし）｜初えびす 七五三 お宮参り お祓い 名古屋 ｜ 熱田神宮」＜
https://www.atsutajingu.or.jp/jingu/about/keidai/31.html＞（2018 年 3 月 17 日閲覧）
松本市市政情報　地区町会別人口・世帯数＜
http://www.city.matsumoto.nagano.jp/shisei/oshirase/toukei_jinkou_inf.html＞から 平成 2 年～9 年
chiku2.1.1_9.1.1.xls （2018 年 3 月 17 日閲覧）
塩尻市行政情報　統計　地区別・区別・年齢 5 歳別 1 歳別住民基本台帳人口＜
https://www.city.shiojiri.lg.jp/gyosei/tokei/index.html＞ から jyuukijinkoH180401.xls（2018 年 3 月 17 日閲覧）
辰野町オープンデータ＜http://www.town.tatsuno.nagano.jp/opendata.html＞ から「人口・地区別推移」opendata_jinko.xls （2018 年 3 月 17 日閲覧）

執筆者一覧

一番上に名前がある者が各班のチーフ

＜諏訪大社上社＞

田保綾

北村奈々

高橋満里奈

＜諏訪大社下社＞

吉野ひかる

五十嵐美佳

戸田伊城

長谷川七海

＜沙田神社＞

岩渕真理絵

田中大暉

木下和幸

関島ゆりな

宮田紀英

＜矢彦・小野神社＞

船田紗希

田中大暉

宮田紀英

＜須々岐水神社＞

木下和幸

平田くるみ

＜千鹿頭神社＞

丸山恵利奈

関島ゆりな

＜橋倉諏訪社＞

田中大暉

＜宮原神社＞

田中大暉

謝辞

ゼミ活動および本報告書作成にあたり、多くの皆様よりご協力を賜りました。ここにお名前を記し、厚く御礼申し上げます。

＜諏訪大社上社＞

諏訪市木遣保存会　竹森笑子さん

田中和人さん

石上千奈美さん

小林智波さん

＜諏訪大社下社＞

下諏訪町木遣保存会会長　吉田和人さん

下諏訪町木遣保存会事務局長　小口典久さん

下諏訪町消防団　佐藤重正さん

下諏訪町木遣保存会の皆さん

＜小野・矢彦神社＞

矢彦神社小野木遣り保存会会長　青木一男さん

CD 収録木遣りの歌い手　さくり：鷲津清人さん

甚句：小野博さん

＜沙田神社＞

三之御柱元木遣り師　北野義友さん

三之御柱 御柱主任総代　上條英雄さん

＜須々岐水神社＞

湯ノ原町会　石川和也さん

薄町町会　西村侊哉さん

＜千鹿頭神社＞

神田木遣り長持ち保存会組織強化部部長　高根俊宏さん

神田木遣り長持ち保存会　加賀葵さん

＜橋倉諏訪社＞

橋倉町会 会長　武井茂善さん

入山辺公民館館長　遠山重治さん

＜宮原神社＞

宮原神社木遣保存会　村田衛さん

宮原神社木遣保存会　新井典登さん

＜大和合神社＞

三之御柱木遣り師　原山保さん

下諏訪観光協会 おんばしら館よいさ

諏訪市博物館

あとがき

本報告書は、2017年度（2017年4月―2018年3月）に、信州大学人文学部芸術コミュニケーション分野の音楽系ゼミナールに参加した学生たちの共同調査の成果です。必ずしも音楽を専門としない学生たちが、御柱祭に参加し各神社を訪れ、木遣り師の方々にお話をうかがいながら木遣りを徹底的に聴き、採譜を含め文字化に挑戦していく作業は試行錯誤の連続であっただろうと思います。総括でも指摘されているように、「書けること」と「書けないこと」のはざまで悩むこともあったはずです。

課題は多々ありながらも、本調査を通して木遣りの旋律類型が見えてきたことは、本ゼミの大きな成果です。それと同時に、学生ひとりひとりが、木遣りを通して人々の言葉や思いにふれ、音や声にふれ、土地や歴史の重みを感じながら「形ならざるもの」を楽譜や文字にしてゆく困難さに向き合ったプロセスそのものが、本ゼミのもうひとつの成果であろうと思っています。

2018年2月10日（土）に人文ホールにてゼミ報告会を開催した際には、これまでお世話になった神社の木遣り師の方々が大勢集まってくださいました。大変うれしいく有り難いことでした。急なお願いにもかかわらず、各社が木遣りをご披露くださり、その誇り高く、朗々と響く声に聴き入りながら、あらためて木遣りの奥深さに感じ入るとともに、木遣りがつないでくれた「縁」を感じずにはいられませんでした。多くのみなさまより本当にあたたかいご協力とご支援を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

また、音楽学の立場から折にふれアドバイスを頂戴した稲玉千瑛さん（信濃毎日新聞社）、宮原神社でお会いしたことをきっかけに、多くのご助言をいただいた太田真理先生（フェリス女学院大学）惜しみない支援をくださった信州大学人文学部の教職員のみなさま、ありがとうございました。とくに沢木幹栄先生には、本ゼミを立ち上げるきっかけを与えてくださったことに加え、ご専門の立場から貴重なアドバイスや示唆を数多くいただき、いつもあたたかくゼミ活動を見守り支えてくださいました。感謝いたします。

そして大変な作業に向き合ってくれたゼミ生のみなさん、このゼミを立ち上げた当初は、まさかこのような報告書を書くまでになるとは思ってもおらず、戸惑いも多々あったと思います。大変ながらも、最後まで一緒に駆け抜けてくれてありがとう。私にとっても、信州の地に息づいた音楽の深遠さにふれる、代え難い経験となりました。

「御柱祭は『木遣り』なくしては成立しません」。

前述の報告会で、ある木遣り師の方がおっしゃった言葉です。自主ゼミを立ち上げた当初にこのフレーズを聞いていたとしても、おそらく耳に留まることはなかったであろうと思います。しかし今はこの言葉の真意と重みを受け止めることができます。本報告書が、この言葉をさらに深く、広く、探求していくための小さな、しかしひとつの礎石となることを切に願います。

2018年3月　人文学部芸術コミュニケーション分野 准教授　濱崎友絵

写真 24: 橋倉諏訪社を訪問するゼミ生　2017 年 11 月 21 日撮影

写真 25: 橋倉諏訪社　2017 年 4 月 29 日 田中撮影

付録

＜付録 1 ＞沙田神社 木遣り師の方の話

以下は、2017 年 7 月 31 日、沙田神社の木遣り師である北野義友さんを大学にお招きし、お話を伺った際の記録である。

沙田神社について

まず、沙田神社は奥社がある。奥社は、今は波田町に合併されたが昔は東筑摩郡と言われた地区に鷺沢という里山のようなところがあって、そこに奥社がある。そこに大きな岩がご神体として祀られている。今から 1300 年以上前に今の地、島立三ノ宮に勧請されたという。現在のお宮の前に流れる奈良井川が頻繁に氾濫していたので、それを鎮めるために現在の地に移したという話もある。

川の反対側である東側の笹部地区も、奈良井川の氾濫により度々流されていたため、そこで沙田神社を祭りたいとして、沙田神社を分祀して笹部神社にお祀りし、それ以後氾濫がないとされている。沙田神社に祀っている神様は 3 人あって、彦火火見尊、豊玉姫命、沙土煮命であるが、これが御柱と関わるかどうかは伝説上の逸話であるから不明である。御柱祭は今から 1160 年くらい前に始まったと言われている。今のように盛大になったのは織田信長が活躍した天正年間であるといわれている。

なぜ（沙田神社を）三之宮と称するかというと、昔、穂高神社と諏訪の諏訪大明神の勢力争いがあって、その狭間として沙田神社になったといわれている。三之宮はどっちに付けばいいかと言って、諏訪の方についた。御柱をやるところの神様は、だいたい男の神様、武神である建御名方神が祀られているが、沙田神社の神は女の神様と水の神様、農耕の神様である。

沙田神社の御柱は酉年と卯年に行う。諏訪地方はその前なので、申年と寅年。すなわち諏訪に一年遅れで 7 年に一度御柱を行う。特徴は、きらびやかな衣装にある。「支度見るなら三之宮」「衣装見るなら三之宮」と言われるくらい、各四本の柱ごとに支度が違い、しかもそのうちに大老と中老と青年があって、それによっても全部衣装が違う。そのため、衣装見るなら三之宮といわれる華やかな衣装である。

木遣り唄

木遣りは即興を重んじて、その場面を見てすぐに唄う。しかし、即興はなかなか大変なので、昔からある歌を歌い継いでいるものもあるし、自分で作った歌を唄うこともある。

戦前は洒落た方が多く、端唄・小唄、短歌・和歌を嗜んでいる方が多く、そういう方が自作で多くの木遣り唄を作った。それらには落語のように必ず「オチ」があり、「聞かせる文句」がある。三之宮の木遣りは、聞かせる唄である。それで曳き子の士気を鼓舞したり安らげたり、沿道の皆さんに笑いや感動を与えたりする。わりと沿道には聞いている人が多い。

木遣り唄は御柱のときだけに唄うものではなく、昔は結婚式や会社の新年会、工事の竣工式など、また松本あめ市、国宝松本城 400 年まつり、松本市市制施行 100 周年記念のイベントなどでも唄われて

いた。その時は、通り一遍の歌詞ではなく、そのときに合わせて文句を作って唄う。そのため、今の若い人は即興ができず難しいという。ある程度文学的な素質がないとできない。

節回しは諏訪の御柱とも異なり、小野神社、千鹿頭神社とか、須々岐水神社とかは、それぞれ節回しが異なっている。戦前は中山とかの方から木遣り師をお願いして、役員の家に泊まらせ、それで上手い人に教えた。その節回しが若干、各柱ごとに今でも残っている。小さい頃からそれを聞かされて育つ。木遣り唄はどれが正調かわからない。かなり昔には正調を求めて譜面にしようという動きもあったが、なかなか大変で、伝統は伝統として守っていき、若干節回しが違ってもやむを得ないということになった。小野神社の宮司さんに聞いたところ、そちらも同じような状態だといい、各柱ごとの木遣りは大筋では一致しているが細かいところが若干違うという。音符に書くと言っても専門家にお願いしないといけないし、なかなか大変である。そういう（記譜しようという）意見のあった時代もあったが、今はそのまま伝統を守ってきている。

木遣りは子供の頃から耳にしないと。途中で覚えるのは、歌謡曲と違い微妙な節回しがあるので難しい。私は三之柱（の木遣り師）であるが、四之柱の節回しが良いと思ってそれを覚えた。このようにして、木遣り師ごとにそれぞれ節回しが異なる。

昔は波田に国有林があってそこから柱を持ってきたが、今は私有林で、個人の家から頂いている。大体は樹齢 100 年以上のもので、目通り[22]が 120 センチメートルや 130 センチメートルほどのものを選んでいる。あまり太くても曳くのが大変になる。一から四の柱があるが、それぞれの担当の地区の人口が違うので、大きいところは大きく、小さいところは小さい。

昔は地引といって、そのまま引っ張ってきた。しかもアスファルトではなく、砂利道であるから、大変だった。今よりも御柱を引っ張るのは重労働だったので、木遣りが更に重要であった。今は台車に乗せて運んでいるから楽である。

以前は女性が御柱に触ってはいけないというので、男衆だけで木遣りを行っていたが、いまは女性も参加できるようになり、女性の木遣り師もいる。

沙田神社では、衣装のデザインを御柱祭ごとに毎回新しくするため、1 つ何千円とする衣装を買わねばならず、しかも最近は女性も御柱祭に参加するので、家族全員の衣装を揃えるとなると、それなりの負担である。そのため、今は新しいものでも、古いものでもよいということになっている。鉢巻も一から四之柱ごとに全部違うデザインである。私のものは「三之柱」と書かれている。采配は二から四之柱は同じ五色の色紙でつくられているが、一之柱だけは宮元なので特別に白で統一してある。

ではちょっとやらせていただく。最初にお宮のこと、それから御柱のこと、松本のこと、皆さんと一緒に短い木遣りをやろうと思う。（采配は木遣り唄の一小節が終わるまでに）だいたい二回り半回す（唄い始める前には采配を）頂いて、お願いしますと（お辞儀をする）。

それで、合いの手、掛け声は、一小節終わったら「オーイ」とお願いしたい。そうすると唄う方も唄いやすい。ではお願いします。

22　目の高さでの立ち木の直径。

さあ　やるぞよ
信濃にお宮は数あれど
三之宮こそ宝船
八ヶが氏子の波に浮き
沙田様が舵を取り
七福神なる総代は
四本の御柱竿に垂れ
お目出度いをば釣り上げましたぞ　エンヤラサ
サーノ　エンヤラサ

さあ　やるぞよ
信州信濃の三之宮
今年ァ酉年巡りきて
七歳一度の御柱
花の四月に山を出で
実りの秋に里を曳く
めでたく建立納むれば
沙田様にもおよろこび
氏子繁盛とお守りくださる　エンヤラサ
サーノ　エンヤラサ

さあ　やるぞよ
松本に誇れるものあれば
一に国宝松本城
二つに信大がある学問の街
三つアルプス青に見る
四つは小澤征爾の音楽の街
これを称して三がく都
信大のますますの発展祈りまするぞ　エンヤラサ
サーノ　エンヤラサ

さあ　やるぞよ
今日のめでたいお祝いに
松竹梅の風呂をたく
ちょっと熱けりゃ梅にする
ちょっとぬるけりゃ竹にする
お客がこんだら松にしますぞ　エンヤラサ
サーノ　エンヤラサ

これはお風呂にかけた短い木遣りである。

9月24日日曜日にもう決まっているが、島立の集落のところに御柱を安置してあるのを、24日に里曳きと言って境内に曳き込む。昔は四本が一緒に鳥居のある参道・正門へ向かっていたが、通らない部落が出てしまう。何年か前かに、そういう家があって、うちのそばは通らないというのはおかしいという意見が出て、今は分けて、分散して通るようになった。

ところがそうなると、昔は自動車もなかった時代なのでよかったかもしれないが、今は車が来たり狭い道を自動車が通ったりするので、交通事情が大変で、警察もなかなかうんとは言わない。しかも国道を通る場合は、だめだと言われた（国道を通る許可が得られなかった）ことがある。2回か3回まえにそういうことがあった。今から10年前に松本市の重要無形民俗文化財に御柱が指定され、それから警察も若干警備はするがゆるくなった。昔の諏訪にいた警察官が異動で松本に来たときは、警察官自身も諏訪一群で学校も休んで行う行事ということをわかっているので緩かった。そういう時代もあったが、今は重要無形民俗文化財に指定されてから、伝統を守って行こうということになり、楽になった。四本もあるので、飛行機や電車に乗り遅れたらどうするんだということで、次回は違うところを通るようにと念書を入れられた時代があった。

今は途中途中で休むことで車を流したり、迂回路を設定したりして、警察の了解を得ている。警察からすれば、途中で事故があったり乗り遅れたりした場合の補償問題などで大変である。それで、私も協力するようにということで、最近は酒も飲まないでやっている。昔は腰にコップをさげて、酒を飲みながらやっていた。今はそういうわけにいかない。飲むと言ってもジュースくらい。警察も厳しい。なにかあると次回に影響がある。

（「松竹梅」の木遣り唄においては）「今日の」は高く出て、「松竹梅」は下げて唄う。そうするとメリハリが付いて良い。「ちょっと」は高くし、「ぬるく」のところは低くする。これは練習するより仕方がない。

練習は覚えていくっきりである。保存会はそういうふうにやっている。「そこを直せ」とかはあんまりない。音楽の教室と違って、耳で聞いて覚えるしか無い。だからどれが正調かわからない。自分がいいと思ったものを覚える。だからみんな節回しが微妙に違う。それは余りこだわっても（仕方がない）。歌謡曲とは違う。

（以上）

記録：田中大暉

＜付録２＞ 千鹿頭神社 木遣り師の方の話

以下は、2017 年 12 月 8 日、千鹿頭神社の木遣り師である高根俊宏さんを大学にお招きし、お話を伺った際の記録である。

＜本編＞

（法被に着替えて登場）

高根「木遣り師の衣装とはまた違うんですけれども、うちの町会のお祭りのときの正装になります。お祭りの法被としては、黒一色というのは非常に地味なんですけれども、逆にそれはそれで渋さもあって良いというような、自己満足もありますけれど、町内の氏子の方は皆この格好でお祭りに参加したり、御柱祭に出たりしています。」

高根「それではよろしくお願いいたします。始める前にいくつかこちらからお聞きしたいんですけれど、長野県内の出身の方っていらっしゃいますか？……逆に、他の県から来られた方は？……半分くらいは長野県内の方がいらっしゃいますので、御柱のことは大体ご存知だと思います。日本三大奇祭と呼ばれている御柱ですが、"御柱"っていうと諏訪大社が非常に有名です。具体的にどんなお祭りかというと、山から 4 本の木を切ってきて、それを人の力だけで引っ張って、そして神社の本殿の周りに、いわゆる魔除けのような形で建てるというのが御柱の基本的な流れです。私たち神田は、松本市の東側にあります。付近で有名なところと言ったら、薄川沿いに松商学園がありますが、その南側のエリア、桜で有名な弘法山の麓あたりにあります。世帯はおよそ 520 軒、2000 人くらいが住んでいると言われています。私たちの地域には、神田千鹿頭神社というお宮があります。こちら歴史あるお宮でして、およそ江戸時代ですか、400 年くらい前にお宮が作られたと聞いています。歴史上重要なポイントがありまして、実は昔、今で言う諏訪市、当時江戸時代で言うと高島藩と呼ばれていましたが、その高島藩と松本藩のちょうど境目のところにありました。元々はひとつの神社でしたが、江戸時代に藩が分かれましてて、私たち神田の地区というのは諏訪の方に吸収された形になります。ひとつだったお宮が、松本藩と高島藩のふたつに分かれたというちょっと特殊なエリアです。私たちの地域はそのような関係で諏訪のエリアに一度含まれたという経緯があって、御柱が伝わったという風にいわれています。具体的に神田千鹿頭神社の御柱がいつ頃から始まったかというのは、歴史の部分で紐解くと、争い事になるくらい人によって意見が分かれることもありますが、江戸時代の末期にはもう存在していたといわれています。特徴としては、諏訪の御柱に敬意を表するということで、1 年遅れの卯年と酉年の周期で、6 年に 1 度ですね、よく数えで 7 年に 1 度と言われますが、6 年周期の卯年と酉年の 5 月 3 日に御柱が行われます。

御柱で使用する大きな木は長さ 17 mで直径およそ 1 mあります。選ばれる木はマツ、スギ、ヒノキと、その年々によって違い、特に木は決まってません。比較的多いのはスギの木ですね。柱を建てるということで、真っ直ぐな木がどうしても欲しいものですから、そうなるとスギの木が一番最適ではあります中々難しいのはマツですね。大きくなると歪んで生えてしまうので御柱には選びにくいんですが、たまに良いマツが見つかれば、それを御柱に使うこともあります。御柱では大きい木を人の力だけで引っ張るわけなので、そこで皆さんが疲れたときに、モラル、士気を高めるために唄われるのが木遣り唄です。お祭りですので、お祝いの雰囲気を出すためにも唄われます。ちなみに皆さんはグループに分かれて松本をはじめ色んなエリアの御柱に行かれたんですか？……私たち、他の地域の御柱って、日程が大体同じなのでなかなか見に行く機会がないんですよね。諏訪だけは唯一前の年にやっていますので、そこだけは見に行けるのですが。余談になってしまいますが、薄川の上流にある神社の御柱は、これもいつの頃かは分かりませんが、神田で木遣り唄を始めたときに、「俺たちもあれをやりたい」ということで、木遣り師の方が神田に来て指導したという過去があるようです。ですので、神田の木遣り唄と薄川の上流の御柱の木遣り唄は、どうも似ているようです。」

澤木「林地区と神田地区と一緒にやるんですよね？」

高根「そうですね、林地区は千鹿頭社、神田の場合は千鹿頭神社といいます。お宮がふたつに別れたとき、その流れで、御柱をやるときは神田側で 2 本建てるから、林側は 2 本建ててください。その代わり一緒の日にやりましょう。ということになりました。番号も決まっていまして、神田は一位と四位、林は二位と三位です。二位よりは一位の方が上だと感じてしまうので、そうすると林の方々からはそこが面白くないとよく言われます(笑)。御柱が近付いてくると合同の会議をしますが、行事の内容は全く別物です。」

澤木「木遣りも違うんですか？」

高根「木遣りも違います。林の方はテンポの速い木遣り唄ですね。」

高根「それでは、事前にいただいた質問に沿ってプレゼンを用意させていただきましたので、お答えしていきたいと思います。」

Q 1「木遣り保存会のような組織はありますか？」

高根「あります。「神田木遣り長持ち保存会」といいます。神田千鹿頭神社の御柱に関する行事や文化を保存・継承する団体です。主な活動は、木遣り唄の伝承、長持ち唄・長持ち行列の伝承です。この長持ちですが、他の神社で見たことある方はいますか？」

濱崎「諏訪の「おんばしら館よいさ」というところで見る機会がありましたが、実際どのように動いて、どのような音がするのかは学生によって知っている人と知らない人がいます。」

高根「神田町会の長持ちって、実は御柱にはなかったのですが、諏訪でやっているというのを聞いて、「じゃあ取り入れてみよう。」ということで長持ち行列を始めました。」

高根「で、その他には御柱にまつわる神事・作法の習得、子供たちへの伝統文化の指導・伝承。長持やときどき木遣りも教えています。あとは地域活性化の基盤作り、町会内外のボランティアやイベント活動(草刈りや模擬店出店)もしています。構成としては、会員 80 名(町会在住のみ。町会外の者はいない。)、およそ 22 歳～78 歳で、ほとんど男性ですが、昨年か一昨年に女性の方が 1 名入りました。ちなみに、信大の卒業生も何名かいます(笑)。専属でやっている方は全くおらず、基本的には普通の会社員とか、大工、ガソリンスタッフ、農協職員、市役所職員、介護福祉士、牛の獣医さん、学校教師 (信大の卒業生で、元校長先生。現在(？)松本市の教育長)などです。色んな方がいますが、一人ひとり一芸みたいなものを持っていますね。御柱は木に関する行事なので、木を加工したりするのが非常に多いです。その中で、大工さんとか手先の器用な方は重宝されます。あとは歌が上手い人、体力に自信のある人、話が上手い、絵が上手い、パソコンが趣味など、色んな特技を活かして協力しています。」

Q 2「木遣り師になるには、どのような過程がありますか？」

高根「複数の候補者が数年間木遣り唄の練習を行い、実力を認められた 8 人が木遣り師になれます。8 人というのは決まっていて、神田の御柱の場合は、一位と四位それぞれに 4 人の木遣り師がつくので、4+4=8 人です。また、金色の派手な衣装を着られるのもこの 8 人の木遣り師だけです。若手中心ですが、ベテランの方も含めて、10 人から 12 人くらい候補を選びます。1 年間から数年間、月に 1 回か 2 回くらい公民館に集まって木遣り唄の練習をしています。木遣り長持保存会の会長をはじめ、氏子総代の役員など色んな人に聴いていただいて、最終的に 8 人が決定します。御柱直前になると、仕事が終わると公民館や神社に集まってほぼ毎晩練習をします。室内だと声が響くので上手く唄えているような気がしますが、本番は外なので、本番直前は外で練習をしています。」

Q 3「木遣り師になろうと思ったきっかけはなんですか？」

高根「きっかけは人それぞれですが、私の場合は、諸先輩が金色の衣装を着て大勢の前で唄っているのを見て、『格好良い！あの派手な衣装を着て目立ってみたい！(当時 21 歳)』と思ったからです。華やかな世界ではありますが、現実は先輩に散々言われながら、途中で投げ出したくなるくらい厳しい練習があります。私の場合は 2 年間くらい木遣り唄を練習しまして、平成 11 年、28 歳のときが木遣り師としての初舞台でした。きっかけは人それぞれで、この人は歌が上手いからやらせようとか、こいつは頑張っているから木遣り師にさせてあげようとか、地元の出身で、お父さんやおじいさんが木遣り

師をやってきたから俺も頑張ってやってみようとか。今は木遣り長持保存会には、長野市や東京など地元の方じゃない方も大勢います。行事に参加したときに、『この伝統文化は失くしちゃいけない』と感じていただいて、木遣り師を目指した方も何人かいらっしゃいます。」

Q４「昔から歌い継がれている木遣り唄はありますか？それはどんな歌詞ですか？」

高根「木遣り唄というのは、個人で作詞したものが圧倒的に多いんですね。昔は公式な記録や書面に残すことがあまりなくて、割とその場その場で唄ってあとは人の記憶に残るだけ、というのが多かったです。伝承されるきちんとした唄というのは実はありませんでした。そんな中、昭和 14 年くらいですかね、木遣りの歌詞を専属で作っては色んな人に配っている前澤さんという方がいまして、その息子さんが記録にまとめて木遣り唄の歌詞集を作られました。現在はこの歌詞集が木遣り師の教本となっています。我々はこの教本をお手本にして、原文で唄ったり、昔の言葉で分かりづらいこともありますので、ベースをあまり崩さないようにしてアレンジを加えたりしています。多くの唄が歌い継がれるようになり、そのうちのひとつが練習の課題曲として定着しました。

木遣り皆様　御免なれ

神田千鹿頭と申するは　諏訪明神の御子神(みごがみ)が

鎮座(ちんざ)ます　宮所(みやどころ)

松の翠は千歳振り　浦古の池の水清し

世にも稀なる名勝地　七年(ななとせ)一度の御柱(みはしら)と

神田千鹿頭の名と共に　代々伝えて栄(さか)ゆらん

これは神田の風景をうたった唄です。神田千鹿頭神社というのは山の上にありまして、その山は全部松林なんですね。その千鹿頭神社の足元には、今は千鹿頭池と呼ばれていますけども、池があります。その松に覆われた千鹿頭山の風景と、その下にある千鹿頭池の風景を唄い込んだ歌詞になっています。歌詞の内容的にも、非常に地元を象徴する唄というイメージが強いものですから、いま私たちは練習曲として、これをずっと唄い継いでいます。

木遣り唄の特徴として、一人では唄えないんですね。というのも、合いの手が途中とちゅうに入ります基本的には、「サーエササエ」という掛け声をお願いしたいです。神田の木遣りの場合は「いやれ皆様ごめんなれ」という、これから木遣りを始めますよという挨拶のような出だしの言葉が決まっています最後のオチだけは、手を挙げて「イエー」です。」

（記譜を見て）

高根「もしかしてそれ、楽譜に起こしたんですか？(笑)我々の保存会には楽譜に起こせる人がいないので感覚でやっている感じですね。」

（歌詞の実演）

高根「御柱のときは一人 4、5 曲持ち唄を持って練習していましたが、御柱が終わるとなかなか歌う機会がないものですから、久し振りに大きい声を出しました(笑)。」

Q 5「即興の木遣り唄はありますか？」

高根「他の地域もやっぱりそうですかね？これは本当はあまり言いたくないのですが、あります。その場の情景や雰囲気を読み取り、即興で唄にするのが神田の木遣り唄の特徴と言われています。町会で集まってお酒を飲む機会で、皆さん酔っぱらってくると場が寂しいので「誰か木遣りやれ！」といいますね、そうするとやらされるのが木遣り師なんですよね。それまでおいしくお酒を飲んでいたのに、「誰かやれ！」と言われると僕らは隅っこに縮こまります(笑)。でもやっぱり、その場の雰囲気に合わせて 1 曲唄った方が盛り上がますので、それが神田の流儀というか風習になっています。町内のどこに行っても、木遣りは欠かせないものです。とは言ってもその場で歌詞を作って唄うのは難しいので、ベテランの木遣り師でも指名されると慌てることが多いです。」

Q 6「諏訪の御柱では、結婚式や運動会でも木遣り唄を唄うそうです。神田地区でもそのような機会はありますか？」

高根「木遣り唄自体は御柱のものなんですけれども、お祝いの席には欠かせない唄でもありますので結婚式や夏の盆踊りなどおめでたい席では欠かせません。その他、松本市内で行われる多くのイベントにも積極的に参加して、木遣り唄を披露しています。私たちは神田の木遣り長持ち保存会は、松本市内の御柱をやっている団体の中でおそらく一番行事に参加しています。松本ぼんぼん踊り連(91 年、98 年～現在まで毎年)、模範連ということで何回か賞も頂いています。松本城 400 年祭、信州博覧会、松本空港ジェット化記念式典、信州そば祭り、松本市民祭、去年は 2 年に一度の松本大歌舞伎で、平成中村座をお迎えする歓迎式典に呼ばれまして、平成中村座、市民 1000 人くらいの前で木遣り唄を披露しています。」

高根「頂いた質問は以上になります。ご清聴ありがとうございました。」

濱崎「ありがとうございました。皆の方から聞いてみたいことがあればお願いします。」

丸山「保存会で、子供たちへの指導をされているということでしたが、子供木遣りはありますか？」

高根「実は何年か前に一度教えようと思って取り組んだことがあります。長持ちというのは皆で唄いますが、木遣りはひとりでっていうと抵抗感を持たれてあまりやってくれないので、そこは保存・継承という意味ではあまりまだ上手くできていないかなというのはあります。子供長持ちに関しては、秋の 9 月の例祭で毎回 20〜30 人くらいの子供さんが参加してくれています。子供木遣りは、やらなきゃいけないという大きな課題になっているのが現状ですね。」

木下「木遣り唄は、1 曲ごとの長さは決まっていますか？」

高根「良い質問ですね。例えば先ほど見本で唄った唄は、全部で 9 くだりあります。先ほど唄いましたように、唄の中では頭のところに「ハイ」という言葉と「ハーハェ」という言葉で始まる 2 種類があります。これが交互に来て、最期に「ハイ！」でオチをつけますので、奇数の組み合わせになっています。唄の長さについて規定はないのですが、奇数の方が唄いやすいといわれています。短い人はふざけて 3 くだりくらいで終わらせる人もいますが、大体はどんなに短くても 5 くだりで、7〜9 くだりが最も良いといわれています。逆に 11 とか 13 は長すぎますね。

木遣りって順番にやっていくので、いくつも長々と聴いていると飽きちゃうんですよね。歌詞を作るときは、言いたいことはいっぱいあっても全部詰め込むと長くなってしまうので、皆さんが飽きずに聴いてもらえるよう、なんとか 7〜9 くだりにまとめています。」

丸山「個人で木遣り唄を作詞されるということで、木遣り師じゃない人も唄っていましたが、そういう方も作詞されているんですか？」

高根「そうですね、御柱のときは 8 名の木遣り師しか唄っちゃいけないというわけではなく、黒い法被を着た氏子さんといいますか、地元の方も唄ってもらって構わないということになっています。ただ御柱に乗る人は、事前に何曲か自分で作ってきて、本番で披露することになっています。木遣り師が作ると割と真面目な唄が多いんですけど、下ネタとか時事ネタを入れると非常に盛り上がるんですね。例えば今年で言ったら、"35 億"とか、"インスタ映え"とか。私は"Google 検索"と入れました(笑)。時代に合った流行り言葉を入れてみると、聴いているお客さんも耳を傾けてくれます。木遣り師の中でも、唄を唄うのが上手い方、采配振りが上手い方、詞を作るのが上手い方がいますが、作詞に関しては皆さん知恵を絞っていますね。」

濱崎「『やれ皆様ごめんなれ』というのは、1くだりとカウントしないのですか？」

高根「カウントしないですね。最初の挨拶、決まり文句という感じです。昔は『木ー遣ーりー』と言っていたそうですが、それがなまったのか、『いーやーれー』という形になりました。」

澤木「沙田神社ではお年寄りの方が頭を下げて木遣り唄を聴いていましたが、何か功徳のようなものはあるんですか？」

高根「歌詞の中にありがたみがあるかは個人の受け取り方によると思いますが、ご年配の方には、熱心に作詞の意味は何なのと聴いてくださる方が多いですね。人の唄を聴くことで、『よしじゃあ俺はそのさらに上の歌詞を作ってみるか』と。例えばこの教本を作られた方は元木遣り師だったのですが、晩年は木遣りを唄うことも御柱を曳くこともできませんでしたので、法被を着て参加して、木遣り唄を録音して書き留めて記録していました。功徳があるといいますか、そこまで崇高なものではないと思いますが、『どういう歌詞を作ったのかな』と皆さん真剣に聴いてくれていますね。特に、作詞の苦労を味わった人ほど。」

田中「薄川の上流の方の木遣り師さんとは、具体的にどこの神社ですか？」

高根「お名前は分かりませんが、薄川の上流に大和合神社があるとか、入山辺に3つくらい御柱をやっている地域があるんですね、その3つとも木遣りを覚えたいということで、まとまって来たという話を聞いています。どの方に教えたとか、それがいつ頃かは年配の方に聞かないと分からないですね。昭和の頭くらいとは聞いたことがあります。逆にお隣の林町会とは、一緒に御柱をやっていますが神田とは全然違う節回しです。」

濱崎「高根さんご自身は、林の木遣りはもう全然？」

高根「唄えないですね。ただ速い、という感じですね。例えばなんですが、（采配を振り回して実演）林の方はひたすらこう振るんですね。早く振るので、唄うテンポも必然的に速くなっていうようです。薄川の上流の方の神社は、神田で指導したということで、だいぶオリジナルは入っていますが曲調は似ていると聞いていますけども、やっぱりこんな感じなんですか？」

田中「そっくりです。」

高根「そうなんですね(笑)。なかなか聴き比べができないので、人伝えに「あっそうなんだ」って言うしかないんですけどね。沙田神社は行かれた方はいないんですか？……沙田はまたちょっと"聴かせる"感じの調子で、多分何曲か種類があるんですよね？神社毎でだいぶ特徴とか違いはありますね。小野神社さんはこういう木遣りじゃなくて、諏訪みたいに甲高いやつですね。」

宮田「甲高くは…あんまり…途中で調子が暗くなる感じですね。」

高根「一定調子じゃなくて、ちょっと下がったりとかでしたっけ。」

宮田「そうですね。諏訪ともまた全然違いました。」

高根「年に数回ではありますが、実は沙田神社さんと小野神社さんと神田で交流会があるんです。その場でお互いの木遣りを聴き比べしますが、確かに三社三様で全部違います。」

戸田「先ほど実演していただいた動きというのは、何か特別な意味があるんですか？」

高根「考えたことなかったですね(笑)。ただ『グーで握って振り回すな』とはよく言われます。采配は色とりどりに作ってありますので、これが綺麗に舞うように回せと。やっぱり緊張しますが、気持ちに余裕を持って、綺麗に見えるように振るというのは心がけるようにしています。また、木遣りの歌詞によっては擬音を入れたものがありまして、我々はこれを『はらりはらり』と表現しています。」

濱崎「実際には御柱の上で振るわけですから、バランスが大事ですよね。」

高根「今日は床面なので足回りとか問題ありませんが、本番は御柱の丸いところでやりますので、どうしても平らじゃないんですよね。なので足のバランスを取りながら、踏み外さないように回しています。ただ、御柱を加工する際、親切な方は木遣り師が落ちないように少し平らに削ってくれます。」

戸田「采配は、神田地区の方々の手作りですか？」

高根「そうですね。お休みの日に集まって、『じゃあ今日はこれ作るぞ』ということで、竹も山の方へ行って切って加工してドリルで穴を開けて。色紙を買ってきて、決められた太さに切って、作っています。」

戸田「それは特定の方々が作っているんですか？」

高根「木遣り長持ち保存会の方々、あとは神田千鹿頭神社を取りまとめている氏子総代の方々が中心になって作っています。」

宮田「僕が見てきた矢彦神社などでは、一之柱が一番長くて、四之柱になるにつれて短くなっていきますが、千鹿頭神社では全部一緒の長さなんですか？」

高根「そうですね。昔の言葉で表現すると、御柱は五丈五尺の長さの木を選びます。基本的に一位から四位まで長さは変わらないのですが、林は若干長くするんです。神田はどちらかというと太くて 17 m のものを選びますが、林は細いんですけど少し長いんですよね。林にしてみると、"一位"という番号が

神田に取られているという思いはあるみたいですね。『神田には負けちゃいけない』ということで。」

濱崎「建て御柱のときも、お互いなかなかすごいやりとりがありましたね。」

高根「競い合っていますね。ただ神田の反省がありまして、最後建てるときの見せ方、盛り上げ方は林の方が上手です。スピーカーで呼びかけたり。あれは今年神田の方では『なんとかしなきゃいけないな』と反省点です。」

船田「木遣りのときに『ハーイ』という掛け声がありますが、意味はあるのですか？」

高根「言わなくても唄えるんじゃないかなという気はしますが、一文唄った後に皆さんが『サーエササエ』と言いますよね、いわゆる『よしよし、次来い！』と応援みたいな感じで。その言葉に対して、『じゃあお応えしましょう』という意味で『ハイ』と言っていると、自分は思っています。」

濱崎「「サーエササエ」には何か意味があるのですか？」

高根「考えたことなかったです。他の地域ってどうなんですか？」

田中「橋倉諏訪社は、「サーエサエ」でした。沙田神社は「サーノエンヤラサ」。」

高根「そうでした。一緒に唄う感じですよね。逆に諏訪とかは高い声なので、そういう合いの手みたいなのはそんなにないんですよね。ただ諏訪の木遣りはひとりでやるというより複数の方でやるので合いの手という意味では諏訪はあまり…というのはありますね。普通に知らずに聴いている方は「サーイサイ」と聞こえたかもしれません。私も子供の頃はそうでした。」

濱崎「皆さんの方で、上の句下の句というように分けているんですか？」

高根「上の句下の句とはあまり言いませんが、何となく区切ってあった方が唄いやすいものですから、それでこんな風に分けています。例えば鳥居の前で唄うとか、神社の本殿の前で唄うときはやっぱり堅い文章が多いんですよね。そういう真面目な歌詞は教本に入っていますが、やっぱり人の作った歌詞っていうのはなかなか頭に入らないんですよ。じゃあどうしてるかっていうと、自分でワープロとかに打ってカンペを作ります(笑)。で、唄う方の足元に誰かがこうやって(笑)。途中で忘れちゃうのが一番まずいので。厳しく言われているのは、「一度御柱の上に乗ったら、きちんとオチをつけるまでは降りるな」。「あ、やばい唄忘れた！」で降りたら、その人は次からは唄わせてもらえないんですよ。途中で歌詞が抜けるくらいだったら、カンペをきちんと用意しておいて最後まで唄いきれ、というのは言われます。」

濱崎「オチをつけるというのは、歌詞上でのことなのか全体のことなのか、どういうことでしょうか。基本的には、奇数にすればオチがつくのでしょうか？」

高根「そうですね、ここで切ろうと思えば切れるのですが（練習曲の歌詞を示して）、歌詞を作るときは皆さん何となく頭の中で物語を想像するので、物語をきちんと完結させた方がすっきりするな、という思いで作っていますね。中途半端に終わるよりは、きちんと最後の一行はつけようかなと。」

濱崎「旋律的なメロディーの面では、一番最後の行だけちょっと変わる感じですか？」

高根「同じリズムでずっと唄っていると飽きちゃうので、例えば「神田千鹿頭と申するは」は

こういう風にイントネーションやひねりでアレンジを加えたりします。（実演）」

濱崎「これは、そのときによって変えるんですか？」

高根「そうです。人によって唄い方も違いますが、少し言葉を早くしたりだとか、ちょっと音程を変えたりとかは、ひとつの技？としてあります。」

濱崎「教えられるときは固定ですか？」

高根「固定です。どこでひねりを加えるだとか、この辺でアクセントをつけようかなというのは木遣り師の腕ですね。木遣り師の中には、教科書通りに最初から最後まで同じリズムで唄う方もいますし、極端に短く唄う方もいます。（オチに近い「神田千鹿頭の名と共に」を例に実演）少し力を入れて、短く、我々はよくたたみ込みと言いますが、そういうアクセントを付け加えるときもあります。『こうしなさい』っていう指導やお手本があるわけではないです。短くしすぎても『たたみ込みすぎる』と注意されるときはありますが。」

濱崎「教科書通りの、"教科書"というのは…。」

高根「ないです(笑)。聴いて耳で覚えた唄が"教科書"です。」

濱崎「つまり、正調的なものが保存会で受け継がれているわけですか？それは結構年配の方から直に教えられてっていう…」

高根「そうですね。楽譜があるわけでも、音符が読めるわけでもないので、先輩が唄ったものを耳で覚えてそのリズムを体に叩き込むっていうのが一番最初ですね。何年もやっているベテランの方でも『あ、こいつ今リズム外れたな』って思うときは結構ありますね。」

関島「いまお聴きしていて、『神田千鹿頭とーぇ』『諏訪明神のーなぇ』で終わっていますが、この入るものはなんですか？」

高根「例えば『諏訪明神の』中間に入るやつですよね、これをもし入れないで唄うと、（実演）言葉が切れちゃうんですよ。ひとつの流れるような唄い込みの中で、何かあまり意味をなさない言葉を足した方が唄いやすいです。空欄があっても、文章的に足りないときはそこに『なぇ』『はぇ』とかいう言葉を意図的に入れています。あとは語尾を伸ばしたり。（「鎮座まします」を例に実演）」

濱崎「ユリとかこぶしを入れる規則性みたいなものはありますか？」

高根「ありますね。（『神田千鹿頭と申するは』『諏訪明神の御子神が』を例に実演）大体一単語のところ、母音が伸びる辺りで震えというかビブラート、こぶしを入れます。逆にこれを入れないで唄うとつまんない唄になっちゃうので。」

濱崎「やっぱり上手い木遣り師さんというのは、そこがかなり違いますよね。」

高根「上手い方は本当にこぶしが上手いんですよね。仲間内で一番上手い方の練習のときの映像がありますので、聴いていただけると。」

（音声を流して）

濱崎「随分ユリみたいなものがありますね。」

高根「そうですね。この人は普段カラオケも上手いので、木遣り歌歌わせても非常に上手ですね。ちなみにこの方長野出身の方で、地元の方ではないんですね。逆に地元の人ではないので引け目というか感じて人一倍練習するよってことで練習量は半端じゃないんですよね。努力した人はそれなりに結果が出てるんだなあっていう、良い見本の方ですね。」

丸山「曳行の時に、スムーズに木遣り師の入れ替わりとかあったんですけど、

ここに来たら誰が何を歌うっていうのは事前に決められてるんですか？」

高根「事前に決めてます。御柱曳きながら途中途中で歌うわけですけども、ここまで来たら柱を止めてここで一曲とか二曲とか歌いましょうってのは事前に決めてます。ただ、柱もちょうどいいスケジュールでは動かないんですね。ですので、時間がなければここで歌う予定だったけどいい、行け行けっていう風になりますし、逆に時間が余ってるときは一曲しかやらない予定だったのが三人ぐらいやったりします。そこは割と臨機応変ですね。」

濱崎「長持ちについてぜひお話を伺えないかと思いまして。」

（御柱祭のときの長持ちの映像を見させていただく）

高根「昔はこの木の箱の中に色んな道具を入れて運んだらしいですね。特に大名行列とかで使われたらしいんですけど。今はお祭りの賑やかく華を添えるための道具って形で使われます。音に注目していただきたいんですけど、低いギーコーギーコーいってる音分かりますかね。これ何かで鳴らしているわけじゃなくて、担いでるのが前が二人、後ろが一人、要はＴ字型です。Ｔ鋳型の棒を作って、そこに箱をつけているんですね。その棒が、木で支えてるんですけども、そこに擦れて今のような低いギーコーギーコーって音が鳴ってます。うまくこれが組み立ててないと、あのいい音が出ないんですよね。なので、いい音が出るように細心の注意で組み立てます。」

濱崎「諏訪のおんばしら館よいさで、地域ごとに違うんだってことで箱の中は見せられないっていう話だったんですけど」

高根「大体は多分中空っぽです。空っぽか、もしくは石入れてるところもあるって聞きます。実は結構重いんですよ。とても一人では持ち上がらないくらいの重さがあるですね。何キロかは量ったことがないんですけど。前の方で二人が担いで、後ろで一人が支えの担ぎで三人で担ぐんですけど、10 分やればもう肩が真っ赤っ赤になります。相当な重さが加わりますで。昔は箱の中に御柱の道具とか斧だとかのこぎりだとかそういうものを入れてたらしいですね。今はさすがにそういうものを入れると重くてとてもじゃないけど担いでられないですから。大体今はうちの場合は空っぽです。」

濱崎「どんな方が作ってらっしゃるんですか？」

高根「私達の町内の場合は大工さんがいるんですね。何人かメンバーの中に。

その方が本職ですからこういうのを作りたいって話をしてじゃあ作りましょうっていうことでお休みの日とか使って作ってくれる感じですね。特殊な方がいて、松本民藝家具で伝統家具を作っていた方がうちの場合は長持ちを作ってくれました。すごい技術がそこに入ってますね。」

濱崎「あれだけの音が鳴ってパリンといかないし微妙なしなりですよね。」

高根「そうでうすね。しなりがありますので、あんまり振りすぎると地面にゴンとぶつかって割れちゃうことあるんですね。自分たちが作ったものだとちょっと粗末に扱う時あるんですよね。ふざけてすごいしならせるんですよ。で、たまたま地面に落として割ったときにものすごい怒られました（笑）。『俺が死んだらもう誰も作れないから大事にしろ』ってよく言われます。」

田中「御柱祭で木遣り師以外の方も木遣り歌を歌うということなんですけど、木遣り師だけの役割とかありますか？」

（御柱祭の曳行の時の写真を見せていただく）

高根「木遣り師は歌うのが仕事といえば仕事なんですが…。御柱って実は色んな役割ありまして。（柱の）後ろに乗ってる黄色の衣装を着た方は木遣り師なんですが、この先頭の方、切呼っていう方が御柱のかじ取りをする方ですね。この人が笛を吹いたら（曳行を）止める。号令をかけたら柱を引っ張るこの人の指示で柱が動いてます。後ろに乗っている木遣り師は、

基本的には止まったり、要所要所で歌を歌って周りの皆さんの士気を上げるっていうのが仕事なんですが、もう一つの役割としたら一緒に柱に乗って切呼の方と一緒に号令をかけるのも仕事ですね。柱に乗っているときは切呼の方がまず第一声で『お頼みだー！ヨーイサ！』っていう感じで声をかけるんですね。その周りで引っ張る方は『ヨーイサ』って言いながら曳きます。一人で『ヨーイサ』って言ってると切呼さん声つぶれちゃうんですよね。なので後ろの木遣り師はこの方の声の合わせて『ヨーイサ』って一緒に掛け声をかけます。そういう役割がもう一つありますかね。ただ、調子に乗って切呼調子に合わせて、この方も大勢の何メートル先の人にまで声を響かせなきゃいけないので大声で張り上げるんですね。この方のまねをして我々も大きい声あげちゃうと、いざ木遣りを歌う時に喉つぶれちゃうのでほどほどにしろって言われます。歌うこと以外役割としては切呼と一緒に『ヨーイサ』という号令をかけるというのが木遣り師のもう一つの仕事ですね。」

＜番外編＞

関島「（お土産で買った采配の）竹の太さが違うのは…。」

高根「お土産用なのでちょっと違うんですよ。本当はもっと細くて長いんですよね。振り回しやすいように。通常は五色の色紙のやつなんです。金銀のやつは木遣り師しか持てない。御柱の時にしかそれは作らないです。普通のやつは何かのイベントがあるときに作ったりもするんですけど、金銀だけは絶対に８本しか作らないです。」

濱崎「回し方が難しいですよね。」

（実際に持たせてもらう）

濱崎「意外に重いですね。」

高根「柱の上に乗ってちょっと不安定なところに、一段高いところに上がると、お客さんがすごい大勢いるっていうのが分かるんですよね。何百人と。もうその瞬間に頭真っ白になりますね。」

濱崎「（歌詞が）飛ぶってときないんですか。」

高根「あります。『ｈｈｈｈｈハイィィィィ…！』って感じで一生懸命思い出すんですけどね。そうすると周りはみんな『あ、これは歌詞を忘れたな』って悟るんで、みんなで逆に歌ってないのに合いの手

で『ハイ、サーエササエ！サーエササエ！』ってあおるんですよね。ある意味面白いといえば面白いんですけどね。なので、できるだけそういうことのないようにということで、カンペを一応用意しなさいと言われています。使っても使わなくても。」

高根「采配はどこの神社も似たような感じですけど、付いてる紙の量とか多さが違ったりしますね。色も違いますし。」

（実際に采配を振っていただきました）

高根「（采配を回すときは近くまで）引き寄せておいて、後ろに回すときは私の場合は素早く回してますけどね。あんまり速く回しすぎると怒られるんですけど…。後ろに回すときに（采配が）下がっちゃう人がいるんですけど、（采配の）頭は下げちゃいけないってことで注意されます。」

高根「采配は名前のシールが貼ってあるんですよ。結構持っていかれちゃうんですよ。特に金銀（の采配）は８本しか作らないので珍しいということで、ちょっとトイレ行こうって置いておくと盗まれちゃうんですよ。」

高根「木遣り師さんとか切呼さんは専用で采配を持ってるので、なくしちゃいけないようにシールを作って全部貼りました。私は保存会の中では組織強化部長っていって、新しい会員を増やすための部署にいるんですけど、広報とかデザインみたいなこともやってるんですよ。なのでそういう名前シールを作ったりもそうですし、御柱のポスターも全部自分で描きました。全部似顔絵を描きました。デザインが専門で昔からやってたんですけど。結構いろんなもの作るんですけど、仲間内の手作業で作ったっていうものは多いですね。業者さんに発注して作ってもらうっていうよりは、ある程度デザインとか組み立ては自分たちでやって、最後の印刷だけは業者さんにお任せする。」

濱崎「本当に皆さんがいろんな工程から関わってるんですね。」

高根「それだけいろんな職業の方がいるっていうのもありますね。大工さんもいれば、鉄鋼業の方もいるので溶接をお願いしたりとか、広告業界に勤めていた方がいるので、その方は市民タイムスとかテレビ信州とか信毎とかメディア関係とはつながりが強いので、その方にお願いして来てもらってますね。」

濱崎「木遣り師になりたいっていう若手は多いんですか。」

高根「ほどほどですかね。すごい大勢はいないですけど。今一所懸命現役で活躍されている方の中には、僕らが御柱であの衣装で歌って、終わって公民館で飲んでるときに突然やってきて『これってどうやったらなれるんですか』っていう人はいました。その方は今現役で活躍しています。その時も３人くらい来たんですけど、きちんとやり遂げたのは１人だけでした。最近は若い人が少ないので、『お願いだから木遣り師やってくれ』ってお願いすることも多くなりましたね。ただ昔は大勢候補の方がいたので。かといって全部若手にするわけにもいかないので。やっぱりベテランの聞かせる歌を持ってる人もいなきゃいけないので。そこでは線引きとか優劣つけて、一生懸命練習したんだけど本番の直前で『お前はだめだ』って言われて涙を飲んだ人もいます。」

高根「メロディーは聞いて、ひたすら聞いてひたすらまねして練習して、上手い人のものは吸収するっていう感じですかね。でもやっぱり努力した人が一番上手いですね。」

濱崎「もともと皆さん、音楽的な背景はあったんですか。歌を歌ってらっしゃったとか。」

高根「ないですね。ただある意味有利だったのは、私が地元だったので生まれたときからずっと聞いてるので。必然的に教わらなくてもある程度のメロディーとか流れは承知してたので。そういう意味ではあとから引っ越してきた方よりはずっと聞きなじみがある。それは有利だったのかもしれないです。」

濱崎「旋律とかメロディーは体にしみついていて、あとは歌詞をどう作っていくかということなんですね。」

高根「そうですね。」

（記譜をお見せしたところ。。）

高根「我々も昔こういうのを書いて練習しました。ここは上がる、ここは下がる、ここは『ああぁ』って段階を踏んで音程を下げるっていうまさにこういう感じで作りました。でも初めての人は上手くコツがつかめないんですね。それで最終的には耳ですよね。」

（昔の木遣り師が歌った録音データをくださいました。）

高根「（昔の木遣りは）私が歌ったのとはまた節回しとかも違うし、いわゆる曲の長さも、さっきだいたい奇数ってお話ししたんですけど、昔の方って偶数で締めてるんですよ。（現在は）『ハイ』『ハーハエ』、最後にオチで『ハイ！』ってやるんですけど、偶数で締める場合は、『ハイ』『ハーハエ』『ハイ』『ハイ！』で締めるんですよね。」

濱崎「今は主流は奇数なんですか。」

高根「主流は奇数です。リズムの中で奇数の方が歌いやすいっていうのがありますね。」

（以上）

記録：関島ゆりな、丸山恵利奈

濃毎日新聞　第三種郵便物認可

多彩な木やり 信大生 譜面に

県内各地で異なる節回しや歌詞

信州大人文学部（松本市）の芸術コミュニケーション分野の学生たちが、県内各地で口頭で伝承されている「木やり」を譜面で記録する取り組みを進めている。地域ごとに節回しや歌詞が異なる木やりを譜面に起こすことで、特徴を探り、後世に伝える可能性も探る。昨年は松本地方の神社で7年目ごとの御柱祭が行われ、学生たちは氏子らと交流しつつ木やり文化への理解も深めた。2月10日午後1時から同学部で報告会を開く。

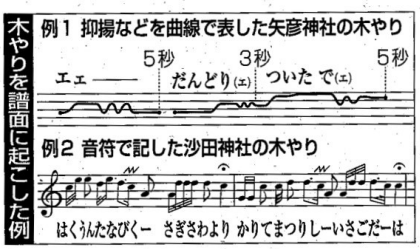
御柱祭が行われた宮原神社を訪ねた信州大生ら＝2017年11月、松本市入山辺

来月報告会「特徴探り後世に」

取り組んでいるのは浜崎友絵准教授の音楽学の授業を受講する2～4年生16人。松本市の沙田（いさだ）神社（島立）、千鹿頭神社（神田）、須々岐水（すすきが）神社（里山辺）、橋倉諏訪神社（入山辺）、宮原神社（同）と、塩尻市の小野神社、上伊那郡辰野町の矢彦神社でそれぞれ行われた御柱祭で、里曳（ひ）きや建て御柱に足を運んで木やりを聞いたり、保存会メンバーに話を聞いたりした。

基本的に口頭で伝えられ、歌い手やタイミングによっても大きく変わる木やりをどう譜面に書き記すか―。3年の船田紗希さん(21)は、矢彦神社の御柱祭で歌われた木やりの歌詞に、音の高低、抑揚を表す曲線を当てた＝**図の例1**。「人によって節回しが全く違うのも木やりの良さ。最大公約数のような形で記録してみよう」と考えた。

一方、4年の田中大暉（ひろき）さん(25)は、沙田神社などの木やりの一部を、西洋音楽の音符で記した＝**例2**。微妙な音程を記すことができないため、捨ててしまう情報も多いが、「リズムが分かりやすく比べやすい」と選んだ。



田中さんは調査結果を卒業論文にまとめた。譜面に記録することで、木やりごとの特徴に加え、それぞれの木やりに共通する構成も見えてきたという。小野、矢彦神社の木やりには松本、諏訪地方ではあまり見られない特徴的な音程があることも気付いた。

学生たちは、諏訪大社も含めた各地の保存会に聞き取りも行い、少子高齢化で伝承が難しくなっている現状も把握。「木やりは時代とともに変化してきた」「録音して記録するのは便利だが、名人の節回しに画一化される懸念もある」といった声も聞いた。

田中さんは「氏子の方たちと一緒にお酒も飲み、6年かけて準備する苦労と誇りを感じた」。茅野市出身で木やりに親しんできた船田さんは、ゆっくりと歌い上げる松本地方の木やりを新鮮に感じたといい、2月の報告会を通じて「保存会同士の交流や木やりの多様性が広まるきっかけにもなればいい」と期待する。

浜崎准教授は「記譜を通じて学生たちが木やりを徹底的に聞いたことが重要。時代などによって変化する木やりの今を、自分たちなりに書きとめ、次の展開につなげていければいい」と話している。

本ゼミ活動についての新聞記事。

信濃毎日新聞「多彩な木やり 信大生 譜面に」2018年1月19日朝刊、9(33)。

CD トラック番号

トラック	収録内容　カギカッコ内は歌詞の一部
1	諏訪大社 上社 木遣り「皆様ご無事で」
2	諏訪大社 上社 木遣り「清め給えや」
3	諏訪大社 上社 木遣り「山の神様」
4	諏訪大社 下社 木遣り「恋に焦がれし花の都へ」
5	諏訪大社 下社 木遣り「山の神様」
6	諏訪大社 下社 木遣り「奥山の大木」
7	小野・矢彦神社 木遣り（さくり）「段取りついたで」
8	小野・矢彦神社 木遣り（甚句）「青垣巡らす小野矢彦」
9	沙田神社 木遣り「白雲たなびく鷺沢より」
10	沙田神社 木遣り「今日はめでたい里曳きで」
11	沙田神社 土搗歌「今年はめでたい御柱祭」
12	沙田神社 土搗歌「一に俵を振りまいて」
13	橋倉諏訪社「やまと やまとの綱渡り」
14	橋倉諏訪社 木遣り「卯酉卯酉」
15	橋倉諏訪社 木遣り「松竹梅」
16	橋倉諏訪社 木遣り「とりとりづくし」
17	橋倉諏訪社 木遣り「詐欺には気をつけて」
18	橋倉諏訪社「やまとやまとの綱返し」
19	宮原神社 木遣り「昨年春より始まった」
20	宮原神社 木遣り「今日の御柱いうなれば」
21	須々岐水神社 木遣り「岳雲たなびく神の森」
22	須々岐水神社 木遣り「七年一度の大祭事」
23	千鹿頭神社 木遣り「この度迎えた御柱は」
24	千鹿頭神社 木遣り「旅は道連れ世は情け」
25	千鹿頭神社 木遣り「春のうららの千鹿頭山」
26	千鹿頭神社 木遣り「Google 検索」

「木遣り」研究報告書

2018 年 3 月発行

編集｜田中大暉、丸山恵利奈、宮田紀英

発行｜信州大学人文学部 芸術コミュニケーション分野

表紙デザイン｜関島ゆりな

表紙写真｜宮田紀英

本報告書に関するご意見やご質問は下記までご連絡ください。

〒390-8621　長野県松本市旭３－１－１

Tel. 0263-37-3245（濱崎研究室）

https://www.facebook.com/hamazakisemi/